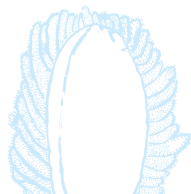




でへんし  
まゐる  
シヨウガイは



4,500人以上の声から  
創り上げたストーリー





発行：一般社団法人シブヤフォント 2025年4月28日 第1刷発行  
本書は日本財団 通常助成事業「障害者とデザイナーの協働によるフォント  
デザイン事業の知見の共有と周知」の一環として制作いたしました。





で  
ま  
る  
。 へんし  
。 ショウガイは。



4,500人以上の声から  
創り上げたストーリー

|               |     |
|---------------|-----|
| もくじ           | 2   |
| はじめに          | 4   |
| 第一章 へんしんストーリー | 6   |
| 印刷会社編         | 9   |
| COLUMN 1      | 23  |
| 学生・デザイナー編     | 35  |
| COLUMN 2      | 50  |
| 企業経営者編        | 59  |
| COLUMN 3      | 78  |
| 施設支援員編        | 89  |
| COLUMN 4      | 100 |
| アーティストと家族編    | 107 |
| COLUMN 5      | 120 |

|     |                       |     |
|-----|-----------------------|-----|
| 第二章 | へんしんの舞台               | 128 |
|     | シブヤフォントとご当地フォントについて   | 131 |
|     | 福祉の関係人口について           | 145 |
| 第三章 | へんしんの支え方              | 154 |
|     | デザインの現場から ライラ・カセム     | 157 |
|     | 事業運営の現場から 磯村歩         | 181 |
|     | 福祉の現場から 古戸勉           | 201 |
|     | 行政の現場から 原信吉、齋藤貢司、黒田敬久 | 215 |
|     | おわりに                  | 226 |





# 第二章

へんしんストーリー



# はじめに

「シブヤフォント」が生まれる瞬間には、たくさんの想いと物語が詰まっています。

障がいのある人とデザインを学ぶ学生たちが協働で創り出したフォントとパターン。この試みは多くの方々の共感を得て、「ご当地フォント」として全国へと広がり続けています。

このプロセスに関わるのは、フォントとパターンを共に生み出す障がいのある人、デザインを学ぶ学生、彼らを支える支援員、ご家族、教員、そのデータを活用する企業、そしてこの活動を支えてくれる自治体、ボランティアたちです。「ご当地フォント」においては、学生のみならずプロのデザイナーも参加。加えて「ご当地フォント」を自ら運営する企業など、それぞれの視点や感性が交わりながら、新たな表現が生まれています。

当初は、こうして生まれたフォントとパターンの利益の一部を福祉に還元する社会貢献活動として、このプロジェクトを運営してきました。しかし、事業を進

めるうちに、単にフォントとパターンを生み出すことにとどまらず、関わるすべての人々に内的な変化や気づき、行動の変容が生まれていることに気づきました。それは社会貢献という“支援する”、“支援される”という一方通行の営みではなく、誰もが対等に関わり、関わったことにおける報酬を受けとり、互いに価値を享受しあう、あるべき共生社会が実現していたのです。

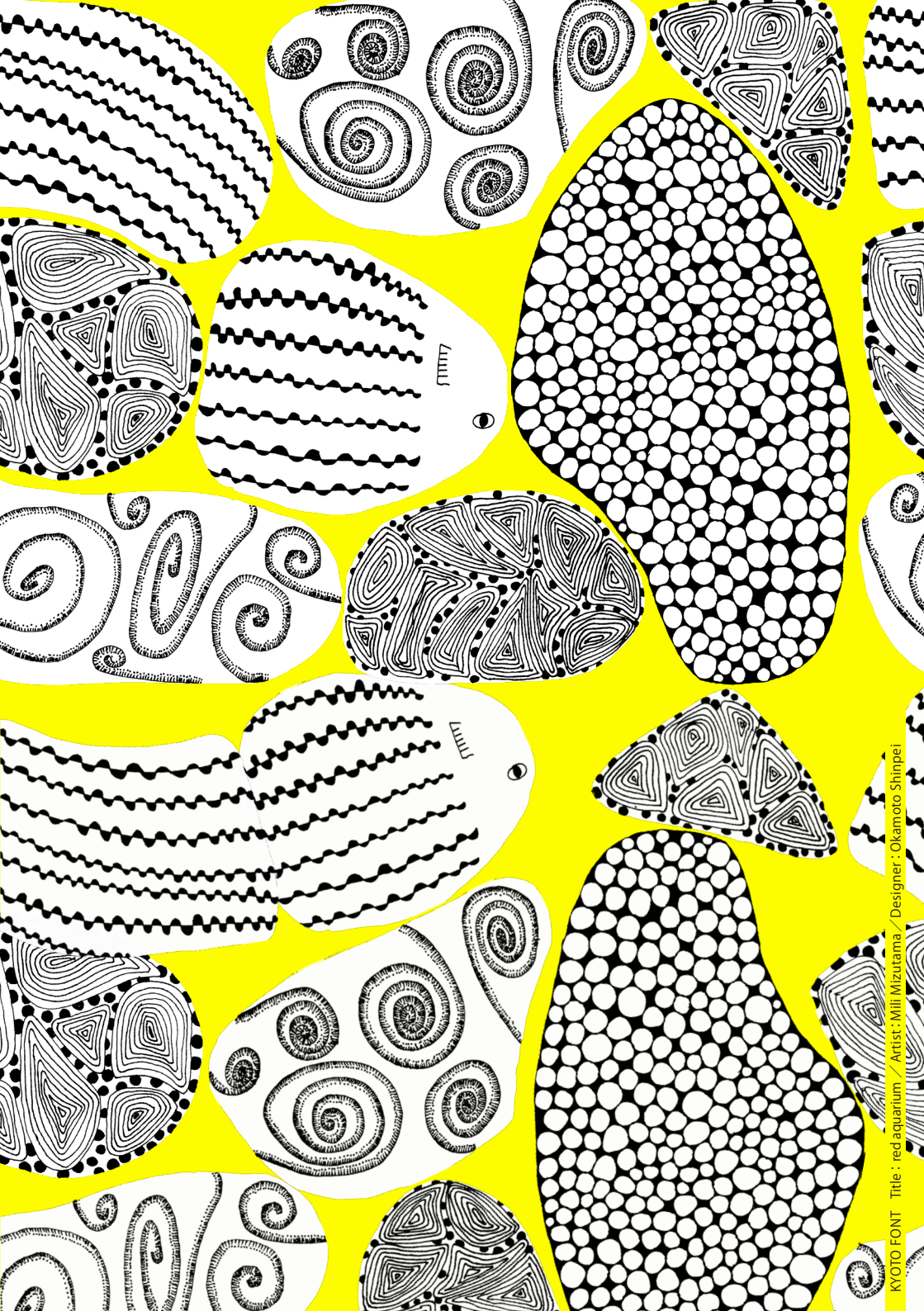
本書はシブヤフォント・ご当地フォントの成り立ちや、その意義をわかりやすくまとめたものです。第一章は、四千五百八十名のアンケート、五十六名のインタビュー、合計四千六百三十六名もの方々のリアルな声をもとに編み上げたストーリーで、登場人物は複数の関係者のエピソードを統合しながら描かれています。細部の表現は異なることがあるかもしれませんが、語られる出来事はすべて実際に起こったことをもとにしています。

第二章はシブヤフォント・ご当地フォントと、そこから生まれる関係人口について。そして第三章はシブ

ヤフォントを立ち上げ、現在も支え続ける関係者がそれぞれの立場から、この取り組みの意義や進め方について語っています。

本書を通して、フォントとパターンが生まれる背景にある想いや、人と人との関わることで生まれる変化を感じていただければ幸いです。そして、より多くの方々にこの取り組みを知っていただけることを願っています。





# 1

Real Fiction Story

リアルフィクションストーリー

印刷会社編

——なんかこう、フックになるものが欲しいよねえ。

雨の中を歩きながら、岡崎弘一は取引先の社長、塩見から言われた言葉を思い出していた。父親が興した印刷会社を岡崎が継いでから二十年。塩見の会社は父の代からの顧客だが、最近を受注件数が減っている。

印刷業界では早いところでは、年が明けてすぐに翌年のカレンダーの企画を考え始める。塩見の会社は、例年は既存のカレンダーに社名を入れたものを作っていたので、通常ならば夏を過ぎてから動き始める。ところが、来年は創立五十周年ということで、まだ二月だというのに、呼び出されて相談を受けた。

「いきなりフックって、言われたってなあ」

塩見はフックと抽象的なことを言うだけで具体的な案は何ひとつ持っていなかった。結局それを形にするのは岡崎の仕事だ。

少ない予算の中で、いったい何ができるといえるのかと岡崎はついぼやいてしまう。

とはいえ、最近ではカレンダーや年賀状を廃止する会社も増えているので、仕事をもらえるだけでもありがたい。

冷たい雨の降る中、塩見はため息をついて帰路を急いだ。

会社に戻りパソコンのメールを開くと、小中学校の同級生、影田からメールが届いていた。

影田は大手企業の人事部でバリバリ働いていたが、数年前に脳梗塞を発症。

幸い命に別状はなかったが、それを機に会社を辞めて独立をしたと連絡をもらっていた。

「シブヤフォンってなんですか？」

メールを読んでいる岡崎にそう声をかけてきたのはデザイナーの森田順子だ。

「え？」

「今、社長、シブヤフォンって言いましたよね？」

「どうやら自分でも気づかずに独り言を言っていたらしい。」

「ああ、友達からシブヤフォンとやらのイベントに來ないかって誘いが來てるんだ。森田さんはシブヤフォンって知ってる？」

「いえ、初めて聞きましたけど。なんだか面白そうですね。私も行ってみたいです」

さすがはデザイナー、聞いたことのないフォント名に反応したようだ。

岡崎はメールに添付されていた資料のPDFを森田に転送すると、自分も目を通す。

イベントのタイトルは「ご当地フォント発表会」。シブヤフォンというフォントが関係しているらしい。

インターネットを使って調べてみると、シブヤフォンとは渋谷区が始めたプロジェクトだった。障がいのある人が描いた文字や絵を渋谷区内の学校でデザインを学ぶ学生がデザインし、フォントやパターンにしたものなのだが、オープンフォントとして誰でも使うことができるそうだ。

影田とは長い付き合いだが、こうした福祉がらみの案件に興味があるという話は聞いたことがない。岡崎も仕事の付き合いで、会社として福祉施設に寄付をしたことはあったが、障がいのある人と接した経験はなかったし、積極的にこうしたイベントに関わろうと思ったことはなかった。影田は後遺症でわずかだが目に障が

いが残ったそうだから、それをきっかけにこういうことに興味を持つようになったのだろうか？  
そんなことを考えていると、森田が自分ひとりでも行きたいと張り切っている。

「場所は原宿かあ。フックとやらを探しに、ダメ元で行ってみるか」

岡崎は森田に背中を押されるように影田に出席の返信をした。

\*\*\*

「社長、うちでもシブヤフォントを使いましょう！」

シブヤフォントのイベントの帰り道、カフェで席に着くなり森田が興奮気味に話し出す。

テーブルの上にはイベントで知り合った人たちの名刺が重ねられている。

「いや、使うかどうかはこれから検討するってことで」

そう森田に言ってみるものの、実は岡崎も自社でシブヤフォントを使おうと決めていた。

今日のイベントは、一般社団法人シブヤフォントが主催している全国のご当地フォントの発表会で、全国から九チームが集まり、それぞれの我がまちのご当地フォントをお披露目した。

岡崎はそれまで、障がいのある人のことを、心のどこかでかわいそうな存在だと思っていた。だからこそ、そうでない人がフォローすべきであると。

しかし、今日のイベントに集まったチームのメンバーたちは違った。福祉施設のスタッフ、フォントのもと

となる文字や絵を描いたアーティスト、フォントをデザインしたデザイナー……ご当地フォントに関わったみんなが、障がいな誰もが持つ個性のひとつととらえ、お互いの個性を活かし、同じ目的に向かって協力しあっていた。

何よりも、そこから生まれたフォントやパターンのクオリティが高いことにも驚かされた。

「私、今まで福祉関係のデザインにクオリティを求めてはいけなかったんです」

正面に座る森田の声に、岡崎は物思いから覚醒する。

「え？ どういうこと？」

「参加することに意義があるので、クオリティは二の次だと思ってたんですよ。なのに、今日見たフォント、やばくなかったですか？ あのフォントを使ったデザインが、いくつも思い浮かんで……というか、私もフォントを作ってみました」

森田の言うとおり、今日見たご当地フォントには、福祉の仕事だからこの程度でいいといった諦めは一切感じられなかった。

それどころか、プロが本気で障がいのある人、障がい者支援事業所とタッグを組み、物作りをした熱気が痛いほど感じられたのだ。

自分も、あの熱気の中に入りたい。岡崎は久しく感じなかった物作りに対する熱い思いが、自分の奥底から湧き上がるのを感じていた。

各地の「ご当地フォント」に触発された岡崎は、まずはシブヤフォントが誕生する過程を見てみたいと影田



に相談し、渋谷区内にある福祉作業所「ひまわり」を訪れた。

岡崎たちの目の前では、施設に通っているという女性が、丸い大きな打ち上げ花火の写真を見ながら黙々と絵筆を動かしている。しかし、画用紙に描き出されるのは、丸い花火ではなく赤や青の無数の点々。

「ユカリさん、花火のどこを描いているの？」

支援員の女性が声をかける。

ユカリと呼ばれた女性が「ここ」と、絵筆を持っているのとは反対の手で写真を指差す。それは打ち上げ花火本体ではなく、花火の根本、打ち上げ台付近に残った火の粉だ。

岡崎だったらきつと「そこじゃなくて、花火の方を描こうよ」と言っていただろう。しかし、目の前の支援員はそうは言わず黙って見守っている。

「そうか、ユカリさんはここに注目したのね。へえ、よく見たら、ここ光が集まっていてきれいなね」横で見えていた学生がそう言ったので、促されるように岡崎も花火の写真に目を凝らす。

すると確かに花火の写真の下の方、打ち上げ台の付近に小さいながらも無数の火花が強い光を放っていた。まるで、大きな花火を夜空に打ち上げるためのエネルギーが凝縮しているようにも見えるではないか。同じ写真を見ているのに、どこを見るかは人それぞれなんだと、岡崎は当たり前のことに気づかされる。

岡崎はどうしても聞きたいことがあって、花火の絵を褒めていた学生と支援員に声をかけた。

「すみません、ちょっといいですか？」

「はい」

岡崎は名刺を渡して、自己紹介をする。

都内の専門学校でデザインを学ぶ藤木優香という学生、支援員は田中千春と名乗った。

「今、花火の絵を描いてたじゃないですか？ あれって、デザインする側からしたら、花火本体を描いてくれた方がデザインしやすいと思うんですけど、そういう指導はしないんですか？」

岡崎の質問に藤木と田中は顔を見合わせた後、笑顔を浮かべた。

「私も最初はそう思ったんですよ。でも、シブヤフォントに関わるようになって、きれいに形が整っていないものにもたくさんさんの美しさがあるって気づいたんです。むしろ、デザイナーとして、自分にはない発想に出会えることにワクワクしますから、それを活かしたいんです」

と藤木が答えた。

「そうですか」

確かに先ほどの花火の絵は岡崎も自分にはない視点に遭遇して面白いと思った。

「それに今、岡崎さんは指導って言葉を使われましたけど、それって違うと思うんです」

藤木に思わぬことを指摘されて岡崎は戸惑う。

「最初にフォント（文字）とは何かについては説明しますが、何をどう表現するかはアーティストの意思を尊重します。障がいのある方たちは、守るべき存在、指導する相手ではなくて、一緒に社会を動かしていく存在なんじゃないかと私は思うんです。私自身、作業のために施設に通う中で、アーティストの方と心の距離がだんだん縮まっていて、一緒にひとつのものを作り上げていく共創感を得られるようになったんですけど、それは

専門学校の授業の中では味わえない難しさと喜びがあるんですよ。だから「一方的な指導ではないんですよ」藤木の言っていることは、頭では理解できた。ここへ来るまでに感じていた怖さや不安も少しは和らいだ。しかし、彼女がそこまでこの活動に打ち込む気持ちはすぐには理解できなかった。

「岡崎さんは、今日が初めてですよね？」

今度は田中が質問してくる。

「はい、福祉作業所というところに来るのは、今日が初めてです」

話の先が見えないまま岡崎は答える。

「障がいの有無にかかわらず、初対面の人と打ち解けるって難しくないですか？」

「確かに……」

「私もそうでしたが、戸惑いを感じてしまうのは相手が障がいのある人だからじゃないと思います。接する機会が増えれば相互理解が深まって、障がいがあるかないかは、関係なくなりますよ」

「はあ」

そんなものかと生返事をする、

「なんて偉そうなことを言ってますけど、私も彼らの可能性に気づいたのはシブヤフォントに取り組むようになってからです。シブヤフォントがひとつの共通言語のようになって、相互理解が深まったとも言えますかね。これまでとは違う側面からその人の良さのようなものを把握できることが増えて、まだまだいろんな可能性があるので？ とワクワクしてます」

と、本当に楽しそうに田中が笑った。

「私は障がいのある方に対して偏見を持っていないと思っていたんですよ。でも、ご当地フォントの発表会を見たとき、正直に言えば『障がいのある人に、こんなに凄いものが作れるのか』と思いました。それこそ、偏見ですよ。障がいのある人の可能性を潰していたのは、私のような人間の思い込みや先入観なのかもしれません」

岡崎が反省したように力ない声で答える。

「そうそう、でも大丈夫、我々もまだまだ変身できますよ」

そう言う田中が見ている方に目をやると、一緒に来ていた森田が、先ほど花火の絵を描いていたユカリと一緒に楽しそうに絵を描いている。

森田の相互理解は早速始まっているようだ。後れを取るまいと、岡崎も創作の輪の中に入っていった。

\*\*\*

「営業がしやすくなりましたよね」

外回りの帰り道、ハンドルを操りながら営業スタッフが嬉しそうに言う。

ご当地フォントの発表会に参加してから間もなく、岡崎は新たなご当地フォントを作ることを決意。会社のスタッフと一緒に近隣の福祉作業所を訪ねるなどしてご当地フォント「ニコニコふんど」を作り上げた。

そして自分たちで作ったご当地フォントを持って取引先に提案を始めると、明らかに相手の態度が変

わったのだ。

「うちも、D & I っていうの？ 取り組みたいと思っていたところだからさ、まさにこれだよ。いい取り組みだね」と、普段なら費用がかかるだの、もつと安くすむアイデアはないのかと聞いてきた会社が、コストを聞くよりも先に提案を褒めるようになったのだ。

変わったのは取引先の態度だけではない。

「営業がしやすくなった」と言った営業スタッフも、「ニコニコふおんと」を褒められるので、提案のしがいがあると感じているのだろう。以前より明るく積極的なアプローチをするようになり、取引先とのコミュニケーションが円滑になったことが、岡崎からも見てとれる。

デザイナーに至っては、初めて福祉作業所を訪れたときから「この文字を使って、こんなフォントを作りたい、そのフォントでこんなものを作りたい」と、次から次へとアイデアが湧いてくるようになった。

デザイナーと言っても、印刷会社の仕事は得意先に依頼されたものを作る受け身であることが多い。ところが、ご当地フォントを作るといことは、主体的にものを作るプロダクトアウトだ。

デザイナーたちはデザイン本来の面白さや醍醐味を感じているのだろう。以前よりも積極的に提案をするようになった。

岡崎は、ご当地フォントが仕事に新たな風を吹き込んでくれるだろうという期待はしていたが、まさか社内  
の雰囲気、スタッフの態度がここまで変わるとは。

「ニコニコふおんと」を作るまでには大変なこともあったが、それ以上にプラスの効果があったことを感じ

ずにはいらなかった。

\*\*\*

師走に入つてすぐ、岡崎は森田と一緒に取引先の塩見社長の会社カレンダーの納品に来ていた。

「おお、いいねえ、岡崎さんに相談して良かったよ」

塩見は納品されたばかりのカレンダーを手に満足そうにしている。

岡崎と森田が塩見に提案したのは「ニコニコふおんと」を使ったカレンダーだった。

しかも納品したのはカレンダーだけではない。塩見の要望で社員の名刺のデザインも「ニコニコふおんと」を使ったものに一新した。

「岡崎さん、このカレンダーと僕の名刺、カズキさんのお宅にも届けてくれるかな」

塩見の言うカズキさんとは、今回のカレンダーや名刺に使ったフォントのアーティストだ。

ぜひ、創作活動を見たいと塩見も福祉作業所を訪問したのだが、その際にアーティストの保護者たちの話を聞き、塩見は感銘を受けたのだという。

「もちろん、このフォントが素晴らしいから使わせてもらったんだけど、カズキさんのお母さんが、息子さんがご当地フォントに関わるようになって、普段なかなか見られない我が子の笑顔を見られるようになったって、喜んでいたのが印象的でね」



塩見はそれをきっかけに、自分の取引先にもご当地フロントを紹介しているらしい。岡崎もそうだったが、ご当地フロントにはそうした人を繋ぐ力があるのだろう。

「しかし、フックのあるものなんて簡単に言っただけ、予算も限られてるし、無理だろうなと思ってたんだよ。でも、できないって簡単に諦めたらだめだって、カズキさんたちに教えてもらった気がするよ。これから名刺を出すたびに、その気持ちを思い出して、まだまだ頑張るから、岡崎さん、これからもよろしく頼むね」

そう言っただけで岡崎の肩を叩く。

「いや、社長。それはいいお話ですけど、無茶ぶりは勘弁してくださいよ」

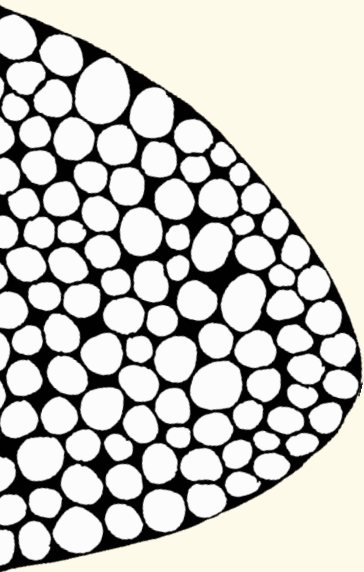
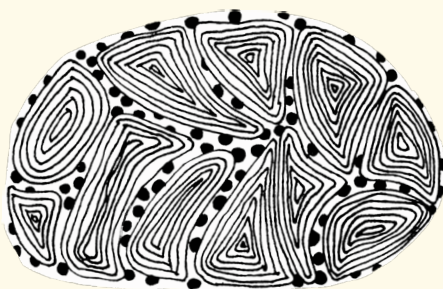
そうそう無茶な頼みをされても困ると慌てながらも、岡崎はあの日、塩見にできないと言わないで良かったと心から思った。この仕事のおかげでご当地フロントに出会い、その結果、会社だけでなく自身の人生にも大きな変化があったからだ。

それまで接点のなかった人々との出会いは、確実に岡崎の人生を豊かにしていた。そして、そうした話を妻や娘たちともするようになったのは大きな収穫だった。

美大に進学したいという娘とは、最近一緒にアート展などに行くようになったが「昔のお父さんだったら、絶対に行かなかった。今のお父さんは、前よりも話しやすい」と言われるのは、間違いなくご当地フロントのおかげだろう。

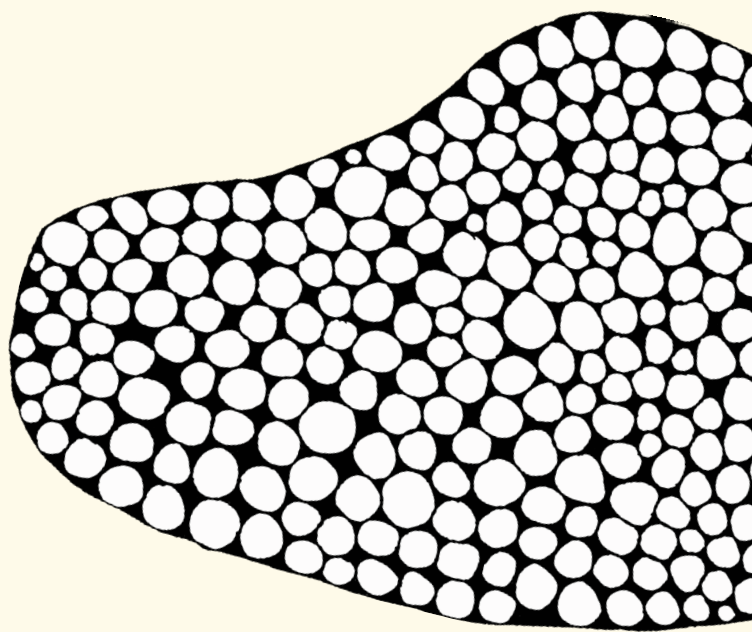
この出会いに感謝しながら、岡崎は塩見と次の新しい仕事の話をするのだった。





# COLUMN 1

印刷会社編



# 京都ふんと

印刷会社で「ご当地フォント」を運営している企業をご紹介します。「ご当地フォント」は、本業である印刷業とのシナジーが生まれるなど、社会性と継続性を兼ね備えた事業活動として展開されています。

## 京都ふんと

運営…タカラサプライコミュニケーションズ株式会社

一九九〇年代から「環境に優しい印刷」、二〇〇〇年代からは「人にも優しい印刷」をテーマにした取り組みをしていた同社は、サステナブルな活動に貢献できないかとご当地フォントに参画した。京都市、京都市観光協会の後援を受けるほか、十二の企業がサポーターとして応援（二〇二五年四月一日現在）。仏像や茶摘みの風景など京都らしさをいかしたパターンなど、オリジナルのご当地フォントを生み出している。

「京都ふんと」公式ウェブサイト

[https://www.takara-sc.co.jp/kyoto\\_font/](https://www.takara-sc.co.jp/kyoto_font/)



## 「京都ふおんと」に取り組む意義

普段の営業では、取引先の広報や販促についてのさまざまなプロモーションやツールのご提案をしています。コロナ禍以降、とくにプリントメディアの需要減少などの厳しい現状もあり、また価格競争も一段と厳しさが増しており、当社の価値や差別化ポイントをいかに伝えるかという点については大きな課題でした。

そのような状況の中で、今回の「京都ふおんと」の取り組みは、SDGsを推進しようとする企業や自治体にとっても大変興味を持っていただける、共感いただける活動です。京都に拠点を持つ当社としても取引先との新たな接点づくりができる活動として大いに役立ち、企業価値を高める一助になっています。営業も得意先に提案することで、いかに取引先のSDGsやサステナブルな活動に貢献できるかを自ら考えるようになります。お客様への提案にも変化が出てきています。

「京都ふおんと」に参加しているデザイナーやディレ

クターも、障がい者支援事業所とのワークショップに参加しています。障がい者のある作家さんや事業所の職員の方と円滑にコミュニケーションを取りながら、一緒に原画作成をしています。でき上がった原画をもとに、デザインパターンやフォントの構想を相談し合いながら、取引先や企業、自治体などが使いやすいパブリックデータに仕上げていきます。デザイナー自身の遊び心なども随所に取り入れながら共創して作成できることも、大きなモチベーションになっています。

最近ですと、取引先から、オリジナルでアートの制作を依頼いただくこともあります。作家さんのモチベーションにも繋がり、採用案件ができると作家さんのご家族にも喜んでいただけます。連携している障がい者支援事業所の新しい仕事にもなっています。

京都のさまざまな障がい者支援事業所にも連携を広げたことで、京都市と京都市観光協会の後援をいただくことができました。少しずつ京都でのネットワークを広げています。

この活動を通して、障がい者に対する固定観念、偏見、そういうのがなくなりました。障がい者施設事業所に行くと、「京都ふおんと」を共通言語に「コミュニケーション」が広がり、自分自身が変わった感じがあります。

## 「京都ふおんと」の採用事例

### (1) 宝グループ環境活動REPORT 2024

同社が所属している宝グループは、京都ふおんとにも寄与することから冊子誌面への京都ふおんと使用を提案したところ、採用となった。目次部分のあしらいと、本文ヘッダー部分に京都ふおんと「水玉シリーズ・小川」を採用いただいた。

### (2) 京都済生会病院一〇〇周年ロゴマーク

京都ふおんととのサポーター企業である「京都済生会病院」の一〇〇周年のロゴマーク。京都ふおんと「おいらのフォント」で制作を行った。







(3)ワコールアインテック コーポレートWebサイト  
障がい者の雇用促進と活躍機会の創出を目的として二〇一八年二月一日に設立された会社で、京都ふおんのサポーター企業でもある。コーポレートWebサイトを提案する際に京都ふおんを用いた提案を行ったところ、採用となった。「暁の窓辺」を全ページにわたり採用いただいた。





なにわおんと

運営…株式会社大通

大阪府に本社を置く同社と、東大阪市にある障がい者生活介護事業「アトリエライブハウス」がタッグを組んで、二〇二四年春から仲間入りした「ご当地フォント」。関連会社のスター出版から、『うちの子には障害があります』という絵本を出版したことをきっかけに、会社の一事業として取り組みを始めました。

「なにわおんと」公式ウェブサイト

<https://www.k-daitsu.co.jp/naniwa-font/>



## 「なにわおんと」に取り組む意義

社員一同、障がい者支援事業所に行くのは初めてで、不安もありましたが、いざ行ってみたら、その作品の量とレベルの高さは圧倒的！ 訪問した全員が「すごい」「面白い」と興奮ぎみでポジティブな気持ちを抱きました。行く前に感じていた不安はなんだったのかと

いうくらい、「こんなことをしてみたい」「あんなこともできそう」と、次々とアイデアが浮かんできて、今もそれがずっと続いています。

まずは取引先に配布する自社ノベルティに「なにわふおんと」を使ってみました。楽しみながら企画やデザインに取り組んで、みんなのモチベーションも上がります。

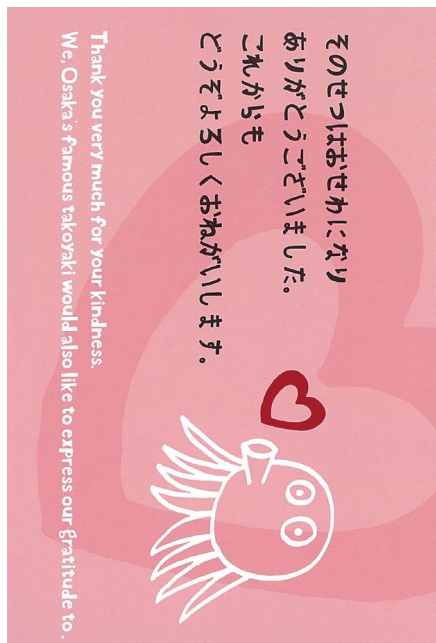
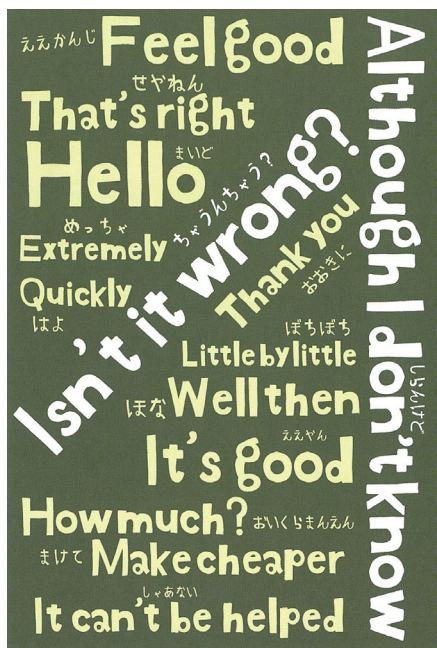
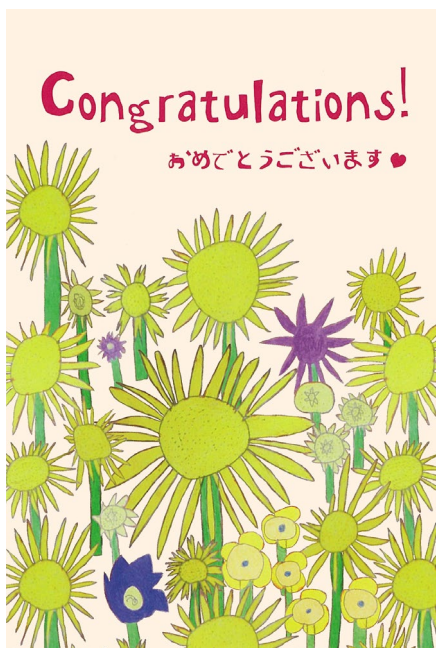
取引先には機会あるごとにいろいろご提案しています。が、「なにわふおんと」を利用した提案は、取引先の上層部にお話が繋がりがやすく、とてもリアクションが良いです！いつもサービスを利用している生命保険会社に、逆に私たちから提案して採用されたのは嬉しい実績です。関西はとくに価格交渉が厳しいのですが、「なにわふおんと」は得意先の反応がとても好意的です。

「デザイナー自身も積極的に、どんどん「なにわふおんと」を活用したアイデアを形にし、楽しみながら、やっています。」

このプロジェクトに関わる前は、障がいのある人への気の毒で、気やすく触れてはいけない存在だと思っていたのですが、施設を訪問したり、他のエリアの「ご当地フォント」のメンバーと交流したりして、障がいのある人に対する壁が低くなったように思います。

## 「なにわふおんと」の採用事例

(1) 住友生命×なにわふおんとオリジナルポストカード  
もともと会社同士でお付き合いがありました。「なにわふおんと」リリースのタイミングでいち早くサポーターになっていただき、「なにわふおんと」を使用できる案件を探していただきました。そんな中でお客様にお渡ししているポストカード（メッセージカード）の使用率が若い社員の中で低いとの話があり、全世代の社員が使えるようなデザインのポストカードを作ろう！と社内でアンケート調査をしてくださり、製作が決まりました。同社の大阪統括部と四つの支社で使われています。







(2) 会社ノベルティ（リングノート、キーホルダー）  
前述の「アトリエライプハウス」が運営するアトリエを利用する双子のご兄弟、弘光さんのパターンと、優功（ゆうぐ）さんの文字をコラボさせた「なにわふぉんと」オリジナルの商品。ご兄弟のお父様が経営されている運送会社のノベルティとして採用された。

(3) 高槻アートチャレンジのチラシ（タイトル部分）  
前述の「アトリエライプハウス」からの依頼案件。  
最初は「Takatsuki Art Challenge」の文字だけの採用だったが、ご担当の方が、「なにわふぉんと」の「Gouki Font」を気に入ってくださり、サブタイトルにも使用いただいた。





高槻在住の方を中心とした  
障がいのあるアーティストによる展覧会

※昨年度の展示会場

2025年  
**2/13<sup>木</sup>～16<sup>日</sup>**  
10:00～17:00(最終日は15:00まで)

# Takatsuki Art Challenge

ソウゾウするチカラ2025

**入場  
無料**



多彩な感性と表現力で描かれた魅力あふれるアート作品をお楽しみください。

**同時開催**

**たかつきまるしえ** 2/15<sup>土</sup>～16<sup>日</sup>  
開催時間 10:00～15:00

市内の障がい福祉サービス事業所による  
手作りお菓子などの販売会を開催します。ワークショップも!  
問合せ先/高槻市障がい福祉課(TEL: 072-674-7164)

**フクローじいさんとベル子ちゃん** 2/16<sup>日</sup>  
年輩や障がいの有無に関わらず楽しめる演劇。  
ノンバーバル(=言葉に頼らない)な  
メルヘンチックコメディー!!

入場無料  
要事前予約  
先着順

開演時間/①11:00 ②13:30 ③15:30  
会場/南館 サンフレックホール  
問合せ先/国際障害者交流センター ビッグ・アイ(TEL: 072-290-0962)

詳細はこちら



©レンジピクチャー

会場/高槻城公園芸術文化劇場 南館1階 スタジオ

主催/高槻市、(公財)高槻市文化スポーツ振興事業団  
協力/アトリエライブハウス、たかつき授産事業共同受注ネットワーク  
お問合せ/高槻城公園芸術文化劇場 大阪府高槻市野見町6-8  
Tel.072-671-1062(10:00～17:00) ※月曜日休館(祝日を除く)

**文化**

阪急「高槻市」駅から  
徒歩約8分  
JR「高槻」駅から  
徒歩約13分



北館  
南館

高槻城公園

タイトル/なにわ●ふんど(Gouki Font)





# 2

## Real Fiction Story

リアルフィクションストーリー

学生・デザイナー編

「では、次のアート作品です。これは、ふたりペアになって、ひとりが投影されているアートを言葉だけでペアに伝えていただきます。じゃあ、始めましょう!」

それは、浅田真弓が通うデザイン専門学校の授業の一環で行われた『対話型アート鑑賞』の時間中だった。『対話型アート鑑賞』とは、これまでの知識を与えるだけの美術教育とは一線を画した自発的で能動的な鑑賞法らしい。知識や常識、先入観などにとらわれず、作品を見て気づいたり、想像したりしたことを自由に語り合うことにより、「創造的思考力」「観察力」「チームビルディングの力」などを養うことができると言われている。

今日は学校の講師の磯村が、進行役・ファシリテーターとなって、『対話型アート鑑賞』を進めていた。

ふたりずつペアになり、前方のスクリーンに背を向けてひとり、その向かい側にもうひとりが座る。つまり、ペアの片方はアートを目にし、もう片方にはアートが見えていない。

「では、これからスクリーンのアートに向き合っている方は、見えていないペアの方にこれがどんな絵であるのかを五分間で説明してください。そして、見えていない側の方は、その説明でイメージする絵を簡単でいいので手元の紙に描いてみてください。では、スタート!」

こんな無茶振り、たった五分で絵を正しく説明するなんて、とてもできる気がしない。

説明する側を担当することになった浅田は、最初から及び腰になったが、とにかくやるしかない。

「えーと、中央には大きな巨人が立っています。その巨人の足元には、スクランブル交差点かな? 四方に横断歩道が広がっていて……それで、胴体になぜか渋谷って書いてあって……」

五分間は、あつという間だった。

時間が来て、ペアがだいたいイメージを描いたら、皆でスクリーンに向かい、それがどんな絵であったのかを改めて見る。

「どうでしたか？ ペアの説明から感じたイメージと、実際のアートを見て、何かギャップはありましたか？」

講師の磯村が質問を投げかけると、さまざまな声上がる。

「巨人って言われたから、体全体を描いてしまいました」

「巨人の足が、とんがっているところまでは、描けなかったな」

浅田は、磯村からやってみてどうだったか感想を求められた。

「説明するって、意外に大変だったことがわかりました。まず、どこから説明したら良いものか迷いますし、同じ説明でも取り方によって全く違うし。みんながイメージしたものと、こんなにギャップがあるというのに驚かされました」

磯村によれば、アートを言葉で説明するためには、じっくり観察しないといけない。それこそ、隅から隅までじっくりと見て、言語化しないといけない。それは、デザインにおいても同様で、商品を使うユーザーの振る舞いや行動をしっかりと観察しないと良いアイデアが出てこないにも通じるのだという。この対話型アート鑑賞は、デザインの演習として行つたと磯村は語った。

「見たものを、言葉にする。大変だけど、こういうことを習慣づけると、デザイナーとして大切な観察力が鍛えられますよ」

浅田は偶然自分が説明することになったアートは、見る人によって、目を付ける場所によって、全く違ったイメージを喚起することに魅力を感じた。すると磯村がアートの解説を始める。

「そして、この『対話型アート鑑賞』で鑑賞するアートは、すべて障がいのある人から生まれたものです。さて、こんな風に障がいのある人が描いた文字やアートを素材にしてフォントやパターンにデザインし、パブリックデータとして公開して渋谷区のおみやげを作り出そうというプロジェクトを進めています。選択制の授業ではこのアートのデザイン作業に携わることができるので、もし興味があったらぜひ参加してください」

磯村が進めている『シブヤフォント』というプロジェクトに浅田は興味を持った。

彼女はこの学校に進学する前、工業高校で産業デザインを専攻していた。

油絵や工芸といったいわゆる『ど真ん中の美術』の一部であるデザインとは少し趣の違う、社会に貢献するデザイン、つまりソーシャルデザインを手がけたいという思いがあったのだ。もしかしたら、この『シブヤフォント』には、何か自分の力が活かせるのではないだろうか。

『シブヤフォント』を作るという選択制の授業の講師は、ライラ・カセム。ライラは、まず学生をチーム分けし、来週そのグループでそれぞれ担当の福祉施設に行き、アーティストたちがどのようにアートに向き合っているかを見てくるようにと言った。

「あれ？ みんな、何か動揺してる？ 今まで障がいのある人とか、福祉施設とは縁がなかった人が多いのかもしれないけれど、別に堅くなる必要はないから。自分と同じだと思って、一緒に遊ぶみたいな気持ちで行っ



てきてください」

授業後、チームを組むことになった中村めぐみと一緒に帰途についた。地下鉄に乗ると、中村が心配そうに言う。「あのさ、来週福祉施設に行くって、大丈夫かな？ あたし、こんなこと言っちゃなんだけど、ちよつと障がいがある人って怖い。なんか昔、近所にそういう人が住んでいたんだよね。それで、道を歩いていて急に大声を出したりとか、うちのお母さんには、あの子には近づいちゃいけないよ」って言われていて……」

浅田は、小中学生のときには、いわゆる支援学級のようなクラスにいる生徒たちと、友達のような感覚で接する機会があった。ただ、彼らは同年代であったので特に気負うことはなかったが、施設のようなところにいる人は、たぶん自分とは年が離れているだろう。うまくコミュニケーションが取れるかどうかが不安だった。

\*\*\*

一週間後、浅田は中村と渋谷区内にある福祉施設にやってきていた。

「支援員の田中です。今日はようこそおいでくださいました。ご案内しますね」

明るい印象の女性で、ホッとする。

「ここが、アーティストたちが作業する部屋で、まあ、みんなそれぞれその日の気分があるのでね、思い思いに過ごされてますけど……、あ、カズキさん、今日はお客様がいろいろな画材を持ってきてくれたんだよ。それを描くの？ クレパスにする？ 色鉛筆？ ああ、絵の具ね……」



初日のその日は、まず色鉛筆や絵の具、クレヨンといったもののほかに、機織り機があると聞いていたので、毛糸など画材になりそうなものをいろいろ持って行った。

「あの……、これいろいろ画材を持ってきたんですけど、何か好きなもので動物とか描いてみてくれませんか？」

カズキさんと呼ばれた男性は、浅田の言葉が聞こえているのかいないのか、手元にあった水彩絵の具で一心に画用紙にグルグルと円を描いている。ひとつ描くと、また新しい紙に円を。

一見、どれも同じ円に見える。もちろん手描きだから正円ではない。微妙にはみ出しているのが、味と言える。ただ、違う色の絵の具を重ねて塗るので、円はだんだん暗い色になっていった。

何を言ったら良いかわからなくて、浅田がじっと見ていると、あっという間に円の描かれた画用紙が机いっぱいに広がる。

「円、好きなんですか？」

浅田はせっかく来たんだし、これから自分がこの作品をデザインしなければいけないんだから、と思い切つて尋ねてみた。だが答えはない。聞こえていないのか？　むしろ、あえて無視されているようにも感じられた。

自分は拒まれているのではないか。

急にわけのわからない部外者がやってきて、迷惑だと思われるに違いない。

自分がこの方の立場だったら、知らない人とはあまりしゃべりたくないと思うだろうし。

「グルグル、好きなんだよねー。なんか、これ描いてると落ち着くっていうかねー」

傷ついたような表情の浅田を、田中がフォローする。

ふと、周囲を見回すと、思い思いに絵や文字を描いている人がいる。

「ああ、カズキさんは、今日は気分じゃないみたい。みんなね、自分の気持ちに忠実なんですよ。私たちみたいに良い子になろうとか、忖度とかめんどくさいこと考えるのは無駄だってわかっているから」

田中はそう言って明るく笑った。

この明るさは何だろう。

そして、この「アーティスト」たちを、誰も邪魔させないとばかりに作品に向き合わせ、集中させているものは、いったい何なのだろうか。

福祉施設訪問一日目は、ただアーティストの様子を見るだけで終わってしまった。

こんなことで、大丈夫なのだろうか？

こんな自分が、障がいのあるアーティストとコラボして、何かを生み出すことが本当にできるのだろうか？福祉施設からの帰り道、浅田も中村も自分たちがほとんど何もできなかったことに意気消沈し、言葉少なだった。

\*\*\*

翌週、浅田はあえて明るい色の水彩絵の具だけを持って施設に出かけた。

今日も、カズキはグルグルと円を描いている。

正直、同じような大きさ、同じような形で、こんなにいくつも描いて飽きることはないのだろうか？

そんな浅田の心中をまるで読んだかのように、田中がこっそりと言う。

「どうしていつも同じような円を描いていて飽きないんだろうか？　って思うでしょ？　私も最初はそう思ったの。でもね、私たちには同じ円に見えるんだけど、彼らにとってはすべて違った円なのよ。これとこれは同じだよ？　なんて言ったらわかってない！　って思われちゃう。よく見ると、ひとつひとつ違っていて、味があるのよね。とはいえ、浅田さんはこれをデザインしなくちゃいけないわけだから、何か希望があったら遠慮なく言ってくださいね」

浅田が気になっていたのは、円の形ではない。“色”だった。

カズキはどんな色を重ねて円を描いていくので、大抵が黒やグレーや茶といった暗い色になってしまう。もちろんデザインによる加工で明るくすることはできるが、それではダメなのだ。カズキの描く明るい色の円で、アートをデザインしてみたいという気持ちに浅田はなっていた。

思い切って、話しかけてみる。

「あの、今日はこういう色を持ってきたんだけど、明るい色はどう？　黄色とか？」

それまで黙っていたカズキが、「嫌い」と一言だけ言った。

強い拒否の言葉が出て、思わず臆してしまった浅田を田中が励ます。

「嫌いって言うってても、パレットに黄色の絵の具を出してみると、意外に使ってみようと思ってくれることも

あるから。ここに出してみて」

言われたとおり、レモンイエローの絵の具をパレットに出してみた。

カズキは、おもむろに違う色の絵の具のついている絵筆を、レモンイエローの絵の具につけた。

（あつ！ 絵の具が混ざって色がきれいにならない！）

浅田は、つい制止の言葉が出そうになったが、すんでのところで止まる。

これでいいんだ。何がきれいかなんて、感じ方は人によって違うのだから。私は、カズキさんの作品をいかに活かすかだけ考えればいいんだ。

カズキは、少々濁ったレモンイエローの円をグルグルと描き始めた。

描いてみると気に入ったのか、さらに自分で絵の具をパレットに広げた。

そして、微妙に色合いの違うイエロー系の円がどんどん増えていった。

その円の集積に、いつの間にかなんとも言えない美しさを感じている自分に気づく。

（ああ、いいんだ、これで。いや、これがいいんだ。これがカズキさんの絵、これがカズキさんのアートだから、私はこれを活かしたデザインをするだけ）

もしかしたら、できるかもしれない。

浅田は、カズキの描いた円をひとつずつスキャンし、タブレットに取り込んでいった。

色も形も微妙に違う円を、バラバラに並べていく。

この円は、こっちがいいかも？ あ、でも、ここにはこの色が欲しい……。

ふと気づくと、背後に人の気配があった。驚いて振り返ったら、そこにカズキがいた。興味津々といった様子で、浅田の作業している画面をのぞき込んでいた。

「これ、カズキさんが描いた円です。どう？　こうやって並べるときれいだよね？」

カズキは返事をしないが、表情に嬉しさが滲んでいるような気がした。

かと思うと踵を返し、自分の作業スペースに戻っていった。

今度は、ピンク系の絵の具をパレットに絞り出し、円を描き始めた。

「前はピンクなんて絶対に使わなかったんだけど、浅田さんのデザインを見て、刺激されたのかしら？　不思議ね……」

田中が驚いて呟く。

（障がいのある人とはコミュニケーションが取りにくいなんていうのは、私の思い込みだったんだ。ほんの少し勇氣を持つて働きかければ、思いは伝わる……）

浅田は、「障がいのある人だから」と壁を作ってしまったのは自分であること。そして、障がいのあるなしではなく、まず人として関わるのが大事なのだということに気づかされた。

中村はどうしているだろう。周囲を見回すと、中村が女性の描いている絵をのぞき込み、熱心に話しかけていた。

彼女が向き合っていたのは、リノさんという女性。リノさんは中村が持ってきた画材の中から色鉛筆を

選び、縦の直線を描き始めた。長かったり短かったり何本も。何本も。

「リノさんは、割とこういう真っ直ぐな線が好きなんですよ。私たちも驚いちゃうぐらい、真っ直ぐに描けるから……。リノさん、今日はお客様が来てるから、何か他のもの描いてみようか。猫好きだったじゃない？猫、描いてみて」

田中が促すが、リノもやはり線が好きなのか、線だけを描いている。

「でもさ、この線、きれいだけどちよつと薄いよね。筆圧が弱いのかな？ だったら色鉛筆じゃなくて、絵の具にしたら良い味が出るかも？」

浅田のアドバイスに、障がいのある人が怖いと言っていた中村が目を輝かせて言う。

「あ、そうだね！ いいかも。じゃあ、リノさん、これで描いてみてくださいか？」

今度は、リノは素直に絵筆を手にとった。

「あのさ、あたしさつき見たんだけど、機械り機あったじゃない？ 一生懸命織っている男性がいてさ。すごかったよ！ ザ・職人！ って感じ。あれ、できたものを見たら、障がいがある人が織ったなんて誰も思わないよ。こういう施設って、老人ホームみたいにみんなおとなしくただ座っているだけかと思ったら、全然違った！ 面白いよ」

いつの間にか中村は、積極的に施設の中を歩き回っていろいろ見学していたようだ。

「へー、そうか、織物か……。あ、いろんな色の糸を織って布にしていくんだよね……。ああ、良いこと思いついた！ リノさんのあの線は、いろいろ重ねたらよくない？ 糸だと思ってるさ」



「ああ、織物みたいに？　そうか！　いいね、それ絶対にいいよ！」

浅田も中村も、アイデアが次々浮かんできて、今までにない高揚感を味わっていた。

「あたし、障がいのある人って怖いって言ったじゃない？　でもさ、それってたぶん、今まで接する機会がなかったからだよね。ここにいる人たちは、別にあたしたちとそんなに違うわけじゃない。むしろ、みんな

“好き”とか“気になる！”っていうものに素直に向き合っていて、すごいよ。自分はそんな風に何かを好きかな？　って考えちゃった。デザインやってるんだから、もっと真剣に取り組まなきゃだめだね」

中村の言葉に、浅田も強く同意する。

リノの描く線は、縦横に組み合わせられてチェック柄のパターンにデザインされた。線の組み合わせの中に顔のような造形が挿入されているのは、リノが線を描く合間に、時々顔の絵を描いたからだ。

「これ、せっかくだから入れようよ。可愛いしもつたいたいからさ」

中村のアドバイスもあって、リノが描いた顔も入れ込むことにした。すると平面だった線の世界が、急に表情を持ち立体的になった。

「すごいね。なんてことのない線とか顔かと思ったら、こんな作品になっちゃうんだから。浅田さんのデザインセンス、素晴らしいよ、あたし真似できない」

中村が褒めてくれるのは嬉しいが、これは浅田ひとりでできたことではない。

「何言ってるの？　これは、中村さんがいろいろアドバイスをくれたからだよ。っていうか、そもそも、リノさんやカズキさんのアートがあったからできたこと。学校の授業で座って聞いているだけでは得られなかった体

験だよ。ここにきて良かった」

「ほんとだね。あたし、デザインの力つてものをここにきて感じた。もっとデザインの勉強一生懸命しなきゃだ」

\*\*\*

カズキのアートは、カズキのイニシアルを取って“Kドット”、リノのアートは“line & check”と名付けられ、それぞれシブヤフォントのパターンとして公開された。

「浅田さん、すごいね、美しいよ、このパターン！ よくできたね」

作品を見たクラスメイトが歓声を上げた。

「ありがとう。うん、最初はちよつとどうしたらいいかわからなくて悩んだんだけど、結局私たち、同じ人間なんだよね。当たり前のことだけど。障がいのある人って、できないことが多くて、私たちが助けなくちゃって思ってたけど、違った。助けられたのは私の方。一緒にものを作るって、すごい楽しい。共創感があつて、これから自分のやりたいことが見つけれそうな感じ。力をもらえたよ」

浅田は、このプロジェクトに関わる前と、後では、明らかに自分の気持ちに変化が起きたことを感じていた。

「そうなんだ、なんかさ、浅田さん、最近変わったよ。すごく積極的になった感じ」  
クラスメイトたちにもそれが伝わっていたようだ。

その後浅田は、このできあがったフォントやパターンを発表するイベントに参加した。

アーティストや学生デザイナー、サポートする施設の支援員、そしてシブヤフォントを採用した企業などが一堂に会するイベントだ。

どのような経緯でフォントやパターンが生まれたのかを、学生と支援員が共同で発表するので、フォントやパターンのデザイン性だけでなく、誕生の背景まで知ることができる。

さまざまな企業を招待しているのは、このような制作過程に共感してもらい、シブヤフォントの採用に繋がろうという意図からだ。

学生デザイナーや支援者は、障がいのあるアーティストに寄り添いながら、共に新しい原画を生み出し、それがフォントやパターンになっていく。

そこには、単に学生が福祉施設を訪問して、原画をスキャンしてデータ化するだけに留まらない交流、ストーリーがある。そのストーリーに企業は共感し、ひいてはデータの採用に繋がるのだろう。

まだ学生の浅田にとっては、企業に直接プレゼンする機会など、なかなかない。イベントでのプレゼンはとても緊張したが、この経験を通して、今後社会に出て行くに当たって必要な実践的な力が身についてきた感じがした。

浅田は、このシブヤフォントのプロジェクトに関わったことをきっかけに、その後もたびたび福祉施設を訪れるようになった。自分の手がけたパターンがある施設の窓に採用されたと聞いたときには、友人を誘って

見に行ったこともある。

「みんな障がいがある人っていうと、自分と違う存在のように思うけど、私たちと全然変わらない。福祉施設って全然特別な場所じゃなくて、私たちの生きてる場所と地続きだし、ひとくちに障がいがある人って言っても、みんなひとりひとり違うんだよ。たぶん障がいのある人と関わって理解するというのはこれから続いていくんだと思う」

障がいのある人を特別視する友人に、浅田はこのように説明した。

そして、現在はユニバーサルデザインコーディネーターの資格を取り、地元の団体に登録し、プロボノとして活動している。

浅田は広告のグラフィックの仕事になんとか憧れを持って、デザインの専門学校に進学したのだが、自分の作り出すもの、自分がデザインしたものが社会をよくするために、誰もが生きやすい世の中作りのために役立つような、そんな仕事をしたいと考えるようになった。

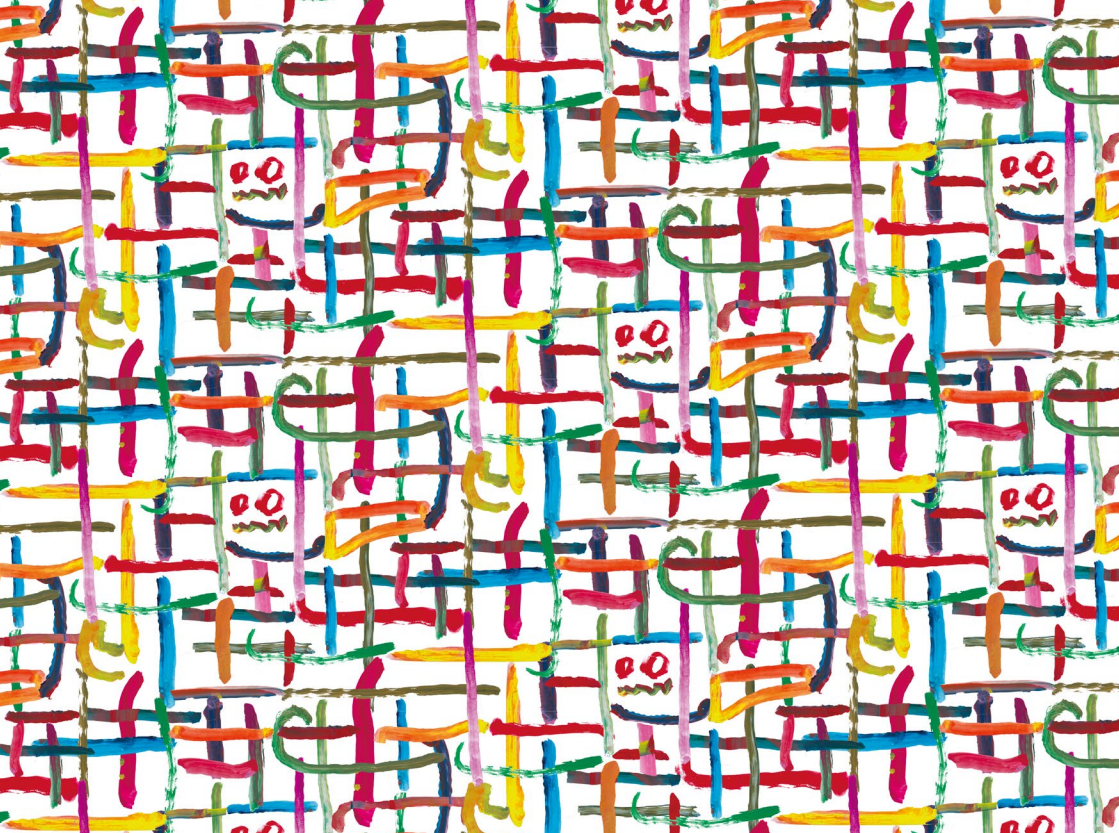
未来の見通しが明るく変化した浅田だった。



# COLUMN 2

学生・デザイナー編





## 実際に制作されたパターン

### 作品タイトル : line & check

アーティスト : りさ

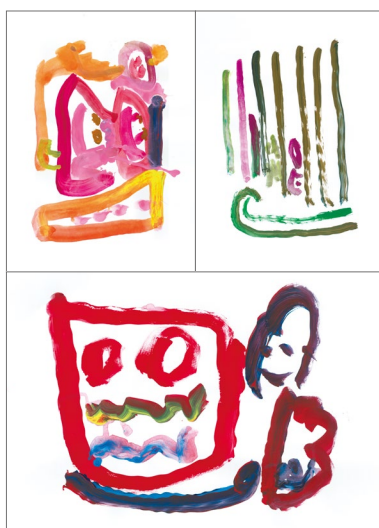
デザイナー : 馬瀬日向子

障がい者支援事業所 : 福祉作業所ふれんど

文中、リノが水彩画で描く線を  
縦横に組み合わせたパターン。

ご当地フォント公式ウェブサイトより、  
500円でダウンロードできます。

<https://www.gotouchifont.jp/downloads/linecheck/>



もととなった原画



このパターンのお話は、NHKのドキュメンタリー  
「ハートネットTV」で紹介されました。  
その短縮版をYoutubeにてご覧いただけます。

## 作品タイトル：Mdot

アーティスト：みずき

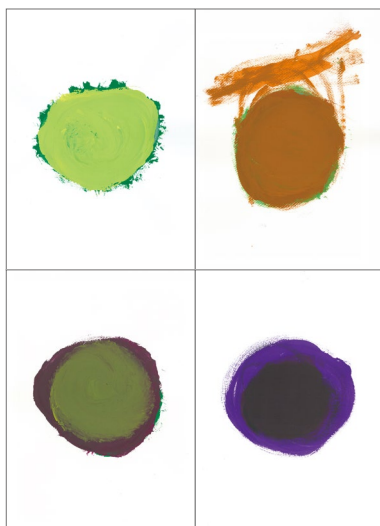
デザイナー：馬瀬日向子

障がい者支援事業所：福祉作業所ふれんど

文中、カズキが水彩画で描いた丸を  
組み合わせたパターン。

ご当地フォント公式ウェブサイトより、  
500円でダウンロードできます。

<https://www.gotouchifont.jp/downloads/mdot/>



もととなった原画

## シブヤフォントに参加した学生のコメント

「今まで障がいのある方と接点がなくコミュニケーションを取る事ができなかった。でも実際に接するとそれぞれに個性があることがわかった」

「綺麗で形が整っていないものにもたくさんのおもしろさがあり、デザインに関わるものとしてたくさんの方のアイディアに触れて刺激を受けました。障がいのあるなしに関係なく、テーマに沿って素材をどのように引き出して活かしていくのか考える過程もとても勉強になりました」

「作業のために施設に通う中でだんだんと心の距離も縮まっていくのを感じ、ふたりでひとつのものを作り上げていく共創感は授業の中では味わえない難しさとおもしろさを感じた」

「障がいのある人は、守るべき存在なのではなくて、一

緒に社会を動かしていく存在なのだと感じた。障がいのある人との共創を通じて、本人たちの今でできることを活かせる事柄がもっと増えたらいいなと思った」

「障がいのあることが一番前面に出てしまい注目されがちだが、まずは人間として、誰しもが持っている悩みや過去のトラウマなどがあることがもの作りの活力やエネルギーになっていると思う。それは人それぞれだと思う。障がいがあるのではなく、その人自身を知ることがシブヤフォントをやっていく中で掴むことができた」

## ご当地フォントに参加したデザイナーのコメント

「以前は障がいを持つ方ではできないことが多く、助けが必要な方が多いと思っていた。私が関わった方はご自身でやりたいことがたくさんあった。私たちがそれをどう活かすかを考えることは、デザイナーとして成長するきっかけになったと思う」

「実際に福祉施設でお話を伺う中で、アーティストさんの背景を知ることができ、どんどん仲が深まっていた。それで障がいのある人としてだけでなく、人として関わっていくことができたことが印象に残っている」

「私のデザイナーとしての未来を変えるでしょうみたいな気持ちでいる。正直、資格とかにはあまり興味がなくて、実績だと思っていたのだが、学ぶ機会を設けられたのが大きな変化。接する相手のことをもうちょっと理解しようという気になった」

「小学生の頃から福祉活動に参加してきましたが、楽しかったこともありましたが、テーマの暗さにしんどいと思うことの方が多かったです。でも、ご当地フォント活動に参加するようになってから福祉は楽しく広められることを知りました」

「自分のデザイン力の向上と社会貢献を同時にできるのに参加してよかったと思っています。自分がデザインしたものを実際に見て頂いたときに大変喜んでくださ

り、とても嬉しかったのを覚えています。別のご当地フォントの見学をした際に、その施設の障がいのある方たちが本当に楽しそうに過ごされているのを見て、こういう楽しい場所がたくさん増えたらいいなと感じました」

「デザイナーとして、自分にはない発想に出会えることがまずワクワクしました。そして障がいのある人の描く絵に期待もしていました。その絵に自分が加工する立場として関わることが嬉しくて『ご当地フォント』に参加しました。作品を作ったのは、こんなにも制作活動は楽しい（人の作品を扱うという良いプレッシャー）とずっと良くしたいという意欲」ということでした」

## 専門学校桑沢デザイン研究所 本田圭吾氏からのコメント

シブヤフォントは、二〇一六年度、渋谷区内の専門学校桑沢デザイン研究所の学生たちとの連携で生まれたプロジェクトです。同校にて、シブヤフォントの推進、継続に尽力頂いている本田圭吾先生からコメントをいただきました。

「いま、学校は学生への学びの機会を提供するにとどまらず、地域連携、社会貢献としても大きな役割を担いつつあります。また、デザインの役割がより社会課題解決に向かう大きなトレンドがある中で、渋谷区に立地する専門学校桑沢デザイン研究所として、このようなプログラムの授業を設置することはとても重要です。学年や分野を問わず参加できる選択制授業としてシブヤフォントのプログラムをスタートしました。

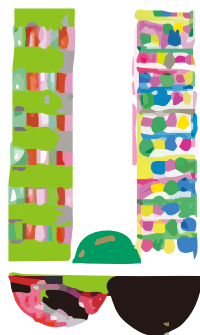
毎年二十数名の参加があり、なかには三年連続でこの授業を選択するなどモチベーションを持って取り組む学生も出ています。

デザイン専門学校として、こうしたソーシャルデザイン、ひいては地域や社会とのつながりをもつ授業の展開を今後も継続したいと思っています」

桑沢デザイン研究所公式ページ「シブヤフォント 共創から生まれるパブリックデータ」には、シブヤフォントが生まれるまでの経緯が紹介されています。

<https://www.kds.ac.jp/community/archive/shibuyafont/>











# 3

## Real Fiction Story

リアルフィクションストーリー

企業経営者編

「そうか、とうとう僕は障がい者になってしまったのか」

影田は天井をみつめ、深いため息をついた。

三度目の脳梗塞で倒れ、このリハビリ専門病院に入院したのは半月ほど前。

一度目と二度目の脳梗塞では、リハビリを行って間もなく社会に復帰することができた。

しかし、今回は身体の麻痺はともかく、視力に障がいが残ることがわかった。もしかしたら、職場に戻れたとしても、同じ仕事はできないかもしれない。

すべてにおいて前向きな影田も、さすがに今回ばかりは希望を失い焦燥感にさいなまれていた。そんなとき、病院の社会福祉士が訪ねてきて、こう言ったのだ。

「影田さん、障がい者の申請をして、国や自治体の支援を受けることをお勧めします」

それを聞いた影田は、寒い荒野にひとり立たされた気分になった。

自分が障がいを持ってしまったことというより、むしろ障がいがある者として、社会から隔絶されたことに絶望したのだ。

——こんな未来が来るなんて、思ってもみなかった。なあ、お前、こんなことが起こるなんて、想像していたか？  
かわいそうな自分を笑いとばしてみようとする。しかし、左頬に引き攣れのようなものを感じて、なんだかうまく笑えない。これも障がいのせいかな。

「影田さん、おはようございます！ 今日外は良い天気です。気分新たに頑張りましたよ！」

そう言つて病室に入つてきたのは、理学療法士の鈴木だった。

「気分新たにね……、確かに障がいがある人という烙印を押されれば、気分も新たにならざるを得ないよな……」  
影田がこれまで二回脳梗塞で倒れ、この病院に入院して厳しいリハビリに耐え、社会復帰を果たせたのは、明るく前向きな性格によるところが大きい。

それを知っている鈴木は、いつになく意気消沈している影田の様子を見て、今までとはアプローチの仕方を変えなければいけないかもしれないと感じていた。

「影田さんは体力も根性もあるし、大丈夫ですよ。視力だって全然見えないわけじゃないです。リハビリ次第で、まだまだ回復しますよ！ さあ、一歩ずつでも前に進んでいきましょう」

影田には高校受験を控えた中学生の息子と、小学生の娘がいる。妻の美代子とは職場結婚で、美代子は結婚後も仕事を続けていたが、娘が生まれて仕事を辞めて一時期専業主婦になった。タイミンで復職し、順調にキャリアを積んでいる。

しかし、娘が小学校高学年になり、育児にあまり手が掛からなくなったタイミングで復職し、順調にキャリアを積んでいる。最近では責任ある仕事を任されるようになり、やりがいを持って楽しそうに働いているのを、影田自身頼もしく感じていた。

そんな矢先の、影田の三度目の闘病生活の始まりだ。

「気分はどう？ 顔色は悪くなさそうね。何か持ってきてほしいものとかはない？」

今日も面会時間になって間もなく美代子が病室に顔を出した。

半休をとって、毎日のように面会に来てくれる彼女には、申し訳なきしかない。

家事に仕事に、影田の看病だ。肉体的にも負担は大きいはずなのに、たぶん無理に笑顔を作ってくれているのだろう。

美代子は、子どもたちのことや、ご近所の噂話、自分の仕事のことなど、自宅で毎晩子どもたちが寝て、ふたりだけになったときと同じように会話を続けた。ただ、その日の影田の反応は薄く、厳密に言えば「会話」にはなっていないかったのだが。

「じゃあ、そろそろ私、帰るわね。また明日来るわ。あ、そういえば加藤さんから連絡があったの。面会に行きたいんだけどって。どうぞって言うて良い？」

「いや、今はまだちょっと……。体調が落ちてきたら、こちらから連絡すると伝えておいてくれ」

加藤は、影田の直属の上司だ。入社直後は教育係として、その後も何回か離れたことはあったが、断続的にずっと上司・部下の関係で三十年近い付き合いになる。

子どもたちの教育費もしばらくは必要で、まだ自分は仕事を奪われるわけにはいかない。とはいえ、果たして目が見えなくて仕事に復帰できるのか？

障がい者の烙印を押された自分は、もう元には戻れない。たとえ復職できたとしても、周囲に気を遣われ、助けられ、果たしてそれで本当に幸せを感じることができるのだろうか？

疎外感に襲われる。涙が頬を伝った。入院して初めて影田は涙を止めることなく泣いた。

\*\*\*

リハビリ専門病院に入院して、一ヶ月がたった。

あつという間だ。日々はルーティンで過ぎていく。

朝食。午前のリハビリ。昼食。午後の一回目のリハビリ。休息して午後二回目のリハビリ。夕食。就寝。

毎日同じことの繰り返し。

そして、身体はだいぶ動くようになってきたものの、視界は狭くゆがんでいるのが改善しない。焦りばかりが募る。

こんなはずじゃなかったのに。僕はもう障がいのある人間としてしか生きられないのか。まだまだやりたいことはあった。もうそれは叶わないのか。

その日、昼食を摂りに食堂に行くと、珍しくテレビの前の席しか空いてなかった。影田は昼時のうるさい番組があまり好みではないので、テレビから遠い席を選ぶことが多かったのだが、仕方なく前方の席に着き、食事 시작했다。

ふとテレビから“障がい者”“アーティスト”というフレーズが聞こえてきて、影田は思わず画面に目を向けた。このところ、自分は“障がいのある人間”になってしまったのだという疎外感に、ずっととらわれていたから、その単語が耳に飛び込んできたのかもしれない。

それは、東京・渋谷区で始まった、障がいのある人とデザイナー志望の学生がコラボするアートプロジェクト

トを紹介する番組だった。

たとえば、障がいのあるアーティストAさんは、水彩絵の具を絵筆に浸し、グルグルと円を描く。ひとつ描くとまた画用紙を変えて同じような円を描いた。延々と同じような円を描き続ける。

別のアーティストBさんは、ひたすらアルファベットの文字を描いている。力強さを感じる筆致だ。

これらの障がいのある人の手による文字やアートを素材に学生デザイナーがデザインし、フォントとして公開したり、アートを商品にしたりするプロジェクトが、渋谷で生まれた「シブヤフォント」だというのが、

影田はハツとして目がテレビ画面に釘付けになった。

「障がいのある人」が、「アーティスト」になり、彼らの生み出したものが、デザイナーの手を経て商品になって、社会の役に立つ。その報酬をアーティストたちは受け取っているのだ。

それは、国や自治体からの「支援」ではない。自分たちが作り出したものに対する純然たる「報酬」だ。

この「シブヤフォント」は、障がいのある人を支援するのではなく、彼らがアーティストとしてもものを生み出し、それを世に出して報酬を受け取るための「場」を提供しているのだ。

なんてよくできた仕組みなんだろう。

障がいがあっても、社会からはじき出されない。どんな人もみんな共に生きていく。「シブヤフォント」とは共生のシステムなのだ。

このところずっと沈んでいた心に、熱い思いがこみ上げてくるのを感じた影田だった。

その日の夕方、いつものように医師の青山が病室を訪ねてきた。



「影田さん、ご気分はいかがですか？　ところでね、今日もひとつ相談なんですけれど……」

青山の訪問の目的は、影田の診察ではない。

影田は、勤務する企業では人事部に所属し、社員のスキルアップを目的とした研修などの企画に従事していた。中でも影田が主に担当していたのは、状況認識や意志決定、チームビルディングといった、すべての仕事・職種に対して汎用性があり、企業人として身に付けておきたい“ノンテクニカルスキル（状況認識やチームビルディングなどの見ることも触ることもできないスキル）”。それは、医療の世界でも重視され、研究が進んでいた。

ふとしたことから青山とそのスキルの話になって意気投合し、今では医師はもちろん看護師や療法士が、何かと影田の病室を訪ねるようになり、そこはある種のたまり場となっていた。

「青山先生、実は僕、今日とても良いものを見たんですよ」

青山の相談事が一段落した後、影田はシブヤフォントがいかに素晴らしいシステムであるかを話し始めた。「へえ……それはすごいな。誰もがみんな自分の持つ力を活かしながら共に生きていく。私たち医師もそういう考えを前提に医療に向き合わなければいけませんね。影田さんのチームビルディングのノウハウも、そういう共生のシステムに活かさない手はないですよ！」

そうか。そうだ。

障がいのある・なしにかかわらず、どんな人も持っている力を活かして、社会にコミットしていけるような、そういう人を作り出していけるようなチームを作る。それはまさに、今の自分の力を活かせることなのではな

いか。障がいを持ってしまったけれども、いや、障がいがあるからこそ、どんな人の立場にも立つことができる。その頃から、影田は起業を考え始めた。

\*\*\*

それから三ヶ月後、影田は左半身に若干麻痺は残るものの、杖をつきながら歩くことはできる状態で退院することになった。

会社は休職扱いで、今後どうするかは上司との面談で相談ということになっている。

「ちよつと、折り入って相談があるんだけどさ」

夕食後、クッキーをつまみながら影田は妻の美代子に切り出した。それは、影田が数日前にシブヤフロントのアーティストたちのいる福祉施設を訪ね、買ってきたクッキーだ。

「実は会社、辞めようかと思ってるんだ。あ、もちろん、まだ身体に麻痺が残る状態では働けないとか、そんな理由じゃない。起業しようかと思ってるね」

美代子は、一瞬目を見開いたが、ふっと息を吐いて言った。

「なんとなくわかってた。これでしょ？」

と、クッキーをかじりながら言う。

「例の『シブヤフロント』に触発されたんでしょ？ 障がいのある人たちのアートに出会ってから、なんだか

目の色が変わったなって思っていたのよ。まあ、いいんじゃない？ 私も仕事は順調だし、あなたも好きにしたら良いと思う。大事なのはお金じゃないわ」

影田は、長年人事部で人の能力を見る仕事をしてきたが、障がいのあるアーティスト、彼らが生み出すアート作品に出会うことによって、自分のそれまでの知見は、狭いものだったことに気づかされた。

「障がいがあるというと、今まではとにかく失うものばかりだと思っていたんだ。だから、障がい者手帳を交付されて、国や自治体から援助を受け、会社にも居場所を与えられたら安心だと。でも、それは間違いだった。『シブヤフォント』に関わるアーティストたちは、アートを生み出すことによって報酬を得て、社会と繋がっている。それは援助ではなく、自分が自分の力で得たもの。同様に僕だって、自分が今まで培ってきたノウハウで社会に貢献することができんだ。そのための会社を作ろうと思ってる」

「そうね、それこそあなたしかできないことだわ。私も応援する」

起業を決め、退職の意向を伝えると、加藤はもちろんのこと同僚からも強く慰留された。

「まさか、障がいを持ったからって自棄になってるんじゃないだろうな？ まだ、身体も本調子じゃないんだろう？ 何も今、無理しなくてもいいじゃないか。もう少し力を蓄えてからでも遅くはないと思うぞ」

「もちろん、会社の仕事が嫌になったわけじゃないですよ。でも今、めちゃくちゃやりたいことがみつかったんです！ だから心配しないでください。大丈夫です！」

てつきり落ち込んでいると思っていた影田が、目を輝かせて熱い気持ちを吐露するのに、上司や同僚はいったい何があったんだ？ と目を白黒して驚くだけだった。

\*\*\*

起業を決めた影田は、会社名のロゴは、病で顔れそうになっていた自分を立ち上がらせてくれた“シブヤフォン”で作ろうと考えた。

シブヤフォンに連絡を取ると、いくつか候補となるフォンを紹介してくれた上で、まずアーティストの制作現場の見学をするというとアドバイスを受けた。その福祉施設は偶然にも、影田がクッキーを買いに訪れていたアサガオだった。影田の会社への思いをぜひ直接説明するようにと言うのだが、クッキーを買いに行ったことはあっても、施設の内部に足を踏み入れたことはない。果たして自分などが行つて、うまく説明できるのだろうか？

入り口で、シブヤフォンの件で訪れたことを伝え、アート支援員だという渡辺が出てきて案内してくれることになった。

「影田さん、よくクッキーを買いに来ていただいていると聞きました。でも、施設の中に入るのは初めてですか？ まあ、なかなか一般の方はなじみがないですからね。でも、だからなのか、こういう施設を住宅地などに作るという、わけもわからず反対運動が起きることも多いんですよ」

施設に入ると、みんな思い思いの場所で、思い思いの姿勢で、それぞれの能力を活かした作業に向き合っ

ていた。

「城田君、今日は城田君の作品をぜひ見せてほしいという影田さんが見えているのよ」

渡辺が話しかけると、城田は恥ずかしそうに照れて、再び一心に画用紙の上に文字を書き並べはじめた。

「私が会社を作ろうと思ったのは、誰もが、城田さんのように持っている能力を活かしてコミットしていけるような、そんな社会をチームで作りたいというような動機なんです。僕も病で障がいがあります。城田さんの描く文字は、そんな僕に勇気を与えてくれる文字なんですよ」

「確かに城田君の文字には、意志の強さみたいなものがあって、ブレない感じがしますね。実は城田君、文字もいいんですが絵も描くんですよ」

影田は、目の前で画用紙をじっと見つめて集中している城田が絵も描けると知って、もうひとつ頼みたいことを思いついた。

「実は、私の会社が大事にしたいことのひとつに “チーム” という考え方があるんです。ただ、これがなかなか言葉では説明しにくくて……。絵のようにぱっと見でみんなが理解してくれるといいなと思っていたんです。城田さんにそんな絵を描いていただくというのは難しいでしょうか？」

影田がダメ元でと思いつきながら尋ねると、渡辺は笑顔で言う。

「ああ、いいじゃないですか！ 大丈夫ですよ。ここにいるアーティストたちは、私たちなんかよりよっぽどコミュニケーション能力が高いんです。言葉ではなく、心や研ぎ澄まされた五感を使って物事の本質を掴みまします。影田さんの思いを語っていただけたら、きっと一目でその世界が理解できるような絵を描いてくれますよ」

渡辺が城田に確認をすると、城田は「やってみます。」と応えた。

影田は、自分は今までどんなことを大事に思ってきたのか。これから作る会社では、どんな世界を作り出したいと思っているのか、言葉を尽くして説明した。

時間にして三十分ほど。一切口を挟まず、じっと耳を傾けていた城田の頭には、今どんな絵が思い浮かんでいるのだろうか。

会社の社名ロゴばかりか、目指す社会のコンセプトを表す絵まで描いてもらうことになり、ワクワクする思いで、影田が施設をあとにしようとしたそのとき。

「失礼ですが、影田さんですか？ 私、この施設の山口です。今日はどうでしたか？ 満足のいく会社ロゴはできそうですか？」

背後から話しかけてきたのは、施設長の山口だった。温厚そうな笑顔の中に意志の強さが見える鋭い視線の持ち主だった。

「ええ、城田さんの文字はもちろん、アーティストの皆さんの作品はどれもこれも力強い生命力にあふれていますね……。これがデザイナーの手によって世に出されていく。素晴らしいと思いました」

「そうですね……。いや、そう言っていただけでも嬉しいんですが、彼らが描いているものが、まさかアートだなんて、私は当初思ってもみなかったんですよ」

山口によれば、施設に通ってくる障がいのある人の中には、一枚の絵を描き切ることなく、特定の形や文字

だけを描くことに執着する人もいるのだという。

「アートに向き合う時間は週に一回、三時間程度。でも、ただ紙が積み上がっていくだけで、これがいったい何になるんだろう？」と思ってました。そうこうしているうちに、学生さんが「素敵ですね！」って盛んに言うんだけど半信半疑でね」

影田にも山口の気持ちはわかるような気がした。自分も障がいを持つことがなければ、障がいのある人の作品に出会うことはなかっただろうし、彼らの底知れぬ力に気づけなかったのではないか。そして、安定したサラリーマン生活を捨て、起業するという人生は選ばなかったはずだ。

「そういえば、先ほど渡辺さんから聞きましたけど、こういう福祉施設を作ろうとすると周囲から反対運動が起こるって、本当ですか？」

「ええ、本当です。みんな障がいのある人と接したことがないものだから、不安に思うみたいなんですよ。小学校の近くに、そんなものを建てるな！とかね。いやいや、小学校の近くだからこそ、多様性を学ぶために必要なんじゃないかって私は言うんですが、誰も聞く耳を持ちません」

先ほどの自慢げな様子から一転して、山口の表情が陰りを帯びる。

「そうですか……、なんとかできないものですかね……」

影田は、そんな周囲の無理解は問題だと思ったが、答えはすぐには見つかりそうになかった。

\*\*\*



影田がシブヤフォントに出会い、起業を決めて会社ロゴや企業理念の説明図を、障がいのある城田のアー  
トを元に作って約一年がたった。

クッキーを買いに行くのはもちろんのこと、何かあれば施設に足を運び、アーティストや施設職員と関係  
を深めていた。

ある日、施設長の山口から連絡が入る。

「影田さん、聞きましたよ。小学校でうちのアーティストの絵を題材に鑑賞会を開催したとか。親御さんが  
近所の小学生の男の子から“すごい楽しい絵だった！”って絵の感想を聞いたらしく、とても喜んでま  
したよ」

「え？　そうですか。どの子だろうな。そんな風に感想を言うなんて、よっぽど楽しかったのかもしれないで  
すね。やって良かった。それにしても、なるほどそんな風に繋がりができていくんですね……」

山口の言う鑑賞会とは、障がいのある人の描いたアートを題材とした“対話型アート鑑賞”のこと。これ  
までの美術教育とは一線を画した自発的で能動的な鑑賞法で、知識や常識、先入観などにとらわれず、作品  
を見て気づいたり、想像したりしたことを自由に語り合うことにより、「創造的思考力」「観察力」「チームビル  
ディングの力」などを養うことができると言われている。

シブヤフォントでは、そのアート鑑賞をリードするファシリテーターを要請する講座を開設しており、影田  
は講座を受講して資格を得た。

地域の人々に障がいのある人への理解を深めてもらいたいと考え、先日近所の小学校で子どもたちを対象に

“対話型アート鑑賞”を行ったのだ。

「それでね、その小学校の生徒たちが、ぜひアーティストの制作現場を見たいと、今度見学に来るんですよ。影田さんもいらつしゃいませんか？」

山口の誘いに、影田は一も二もなく駆けつけると返事をした。自分が行った『対話型アート鑑賞』を子どもたちがしっかりと受け止めてくれたのが嬉しかったのだ。

冷たい冬の空気の中、影田はまず小学校に行き、生徒六十名と共に「アサガオ」へ向かった。彼らの表情には、不安と期待が入り混じっている。

「障がいのある人とどう接したらいいかわからないよ」

「いきなり話しかけたら、迷惑じゃないかな？」

子どもたちのそんな戸惑いの様子が窺える。

影田はあえて何も言わず、子どもたちと共に施設に足を踏み入れた。

緊張していたのは、子どもたちだけではなかった。施設の職員たちも、設立から十八年の間、外部の人々との交流は初めてで、小学校から訪問の打診を受けた当初は躊躇する声もあったという。

「子どもたちが万が一利用者さんに怪我をさせたら、どうしたらいいんですか？」

あからさまに反対する職員もいたが、それでも山口は「やってみよう」と決意した。

施設を訪れ、最初はぎこちなかった子どもたちも、利用者に話しかけられると次第に心を開いていく。

「話しづらいと思ってたけど、全然そんなことなかった！」

「街で障がいのある人を見かけたら、助けたいと思うようになった！」

そんな言葉が、子どもたちの口からこぼれ始める。

一方、施設の利用者たちも新たな一面を見せていた。普段はあまり言葉を発しない人が子どもたちには積極的に話しかけたり、張り切って施設を案内して回ったりする姿もあった。

それを見て、職員の高杉が言う。

「なんだかみんな、小学生たちの前では“お兄さん” “お姉さん” という立場になれるそうですね。だからこそ、一生懸命自分たちのことを伝えようとしているんだと思います」

高杉自身も、最初は不安だったが、小学生の訪問を受け入れてみて良かったと実感しているようだ。

「外部の人を入れるのは、怖かった。でも、交流を通じて、利用者さんの新たな一面を知ることができました。今まで絶対に部外者を寄せ付けようとしなかったある方が、孫を見るような気持ちで接していたのには、本当に驚きましたよ」

福祉関係者の間では、障がいのある人にどの程度介入したらいいのかといった“介入の度合い”がよく議論のテーマになる。「介入」のバランスは難しい。強すぎても押し付けがましくなるし、弱すぎると交流の機会を逃してしまう。

影田は、高杉の言葉を聞いて、介入の度合いには、○か一かといった単純な正解はない。○・一がよい場合もあるし、○・八がよいケースもある。グラデーションのように、その場に応じた適切な関わり方がよいのだろ

うと考えた。

「アサガオ」を去る頃になると、口々に感想をもらす小学生たちの目には、確かに新しい世界が映っていた。

「障がいのある人との関わり方がわかった！」

「職員さんがずっと笑顔で接していてすごいと思った！」

「障がいのある人の毎日がつまらないと思っていたけど、そうじゃなかった！」

“適切な関わり方”とは何か。

それは、一回の経験だけで答えが出るものではない。しかし、今日のように子どもたちや利用者たちとの交流を続けることで、少しずつ見えてくるのではないか。

次の交流の場ではさらに良い架け橋となれるように、影田はその答えを探し続けようと思った。

帰り際、山口に呼び止められた。

「で、折り入ってなんですけれど……」

山口が急に改まった口調になったので、影田は少し身構える。

「影田さん、企業の経営者として毎日お忙しいのは重々承知してはるんですが、あえてのお願いです。うちの施設の理事になってくれませんか？ そのアート鑑賞教室などもそうですが、あなたなら施設と地域との繋がりを作ることができる。適任ですよ！ どうかお願いします！」

山口の予想外の申し出に、影田は面食らった。自分が福祉施設の理事に？ もちろん、福祉施設の重要性はわかっているし、最近施設を置く場所に困っている事業者が多いことも山口から聞いて知っていた。しかし、

自分はいったい何をすればいいのか。アート鑑賞会を主催することはできるが、それだけで良いはずはないし。「いや、ちょっと待ってくださいよ。山口さん、私は小さな会社経営者ですよ。しかもまだ船をこぎ出したばかりだ。私には荷が重すぎる」

影田は必死に固辞したが、山口も福祉施設の長だけあって、なかなか押しが強い。結果は山口の粘り勝ちだった。とにかく一緒にこの地域を盛り上げていきましようよ！ という殺し文句に負け、影田は理事を引き受けることになった。

思えば不思議な出会いだった。病に倒れ不幸のどん底に叩きつけられたのに、希望は、そんな病の中にもあったのだ。

これからどんなことが起きるのだろうか。何が起きようとも、自分を含め、どんな人も取り残さない、外にはじき出さない社会を作っていこう。そう決意を新たにする影田だった。

こんな未来、こんな人生が待っているなんて思ってもみなかった。それは、三度目の脳梗塞に倒れ、重い障がいを持ったときにも思ったことだが、全く逆の意味合いで今影田の中に、深い感慨が芽生えていた。

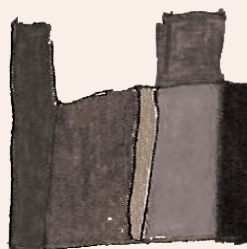






# COLUMN 3

企業経営者編





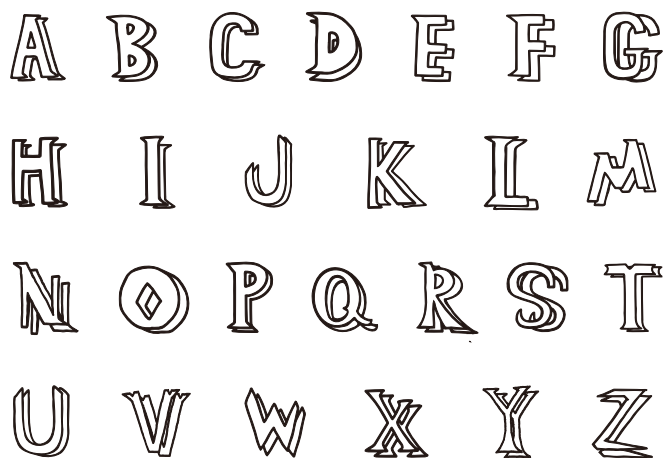
<https://www.trustwalk.co.jp/>



Trust Walk

## 実際に制作されたロゴ

文中、影田の会社名としてシブヤフォントが採用されたロゴ



勇者フォント（上図のロゴに採用されたフォント）  
アーテイススト…田代和裕  
デザイナー…井上智絵  
障がい者支援事業所…工房はれっと



<https://www.gotouchifont.jp/downloads/3012/>

## 実際に制作されたアート

チームメンバー全員がパズルのピースに見立てられ、誰が欠けてもチームが成り立たないことを表している。



## シブヤフロント、ご当地フロントにおける採用企業のコメント

「シブヤフロントに関わったことで業務において障がいのある人をより意識するようになりました」

「人と関わることの大切さや人が持っている可能性に気づかされました」

「障がいは、誰もが持っている個性のひとつであり、常にポジティブにとらえるべきものと、障がい当事者の方々との交流も通じ、従来以上に考えるようになりました」

「人は多くの可能性を秘めていると考えるようになり、他者理解も自己理解もこれまでの概念を超えて少しずつ深まっていると思います。豊かな人生とはどのような人生なのか、家族で話をするようになりました」

「名刺交換の際に必ず『素敵なデザインですね』と反応があります。シブヤフロントにはデザイン性だけ



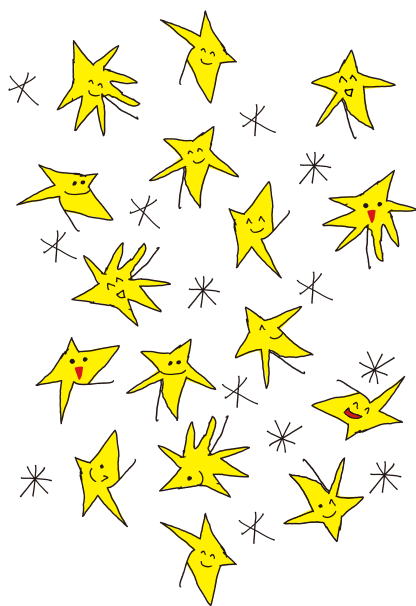




シブヤフォントは商品、サービス、住環境など様々な分野への採用が進み、  
採用企業は累計100社を超え、採用点数も1,000種以上にまで広がっています。

でなく、作品ひとつひとつにストーリーがあるのでとても話が盛り上がります」

「障がいのある子どもたちに対話型アート鑑賞をした時、子どもたちは会話がスムーズにできなくとも自分ができることを最大限活用して感想や考えを伝えようとしてくれました。彼らのそのあり方はコミュニケーションするとはどういうことなのか、原点から見直すきっかけとなる経験となりました」



## 「施設コンフリクト」について

文中の福祉施設の建設における反対運動は「施設コンフリクト」といい、特定の施設（例えば福祉施設、商業施設、工場など）の設置や運営に関して、地域住民や関係者の間で発生する対立や意見の不一致を指します。これは、都市計画や地域開発において頻繁に発生する問題のひとつです。その中でも福祉施設に対する反対運動は、地域住民と障がいのある人との直接交流の少なさが、その要因だと言われています。

出典元…施設コンフリクトと啓発活動

(1)ー施設コンフリクトとはどんな現象かー  
一般社団法人部落解放・人権研究所

[https://bhrri.org/old/info/koza/koza\\_0006.htm](https://bhrri.org/old/info/koza/koza_0006.htm)

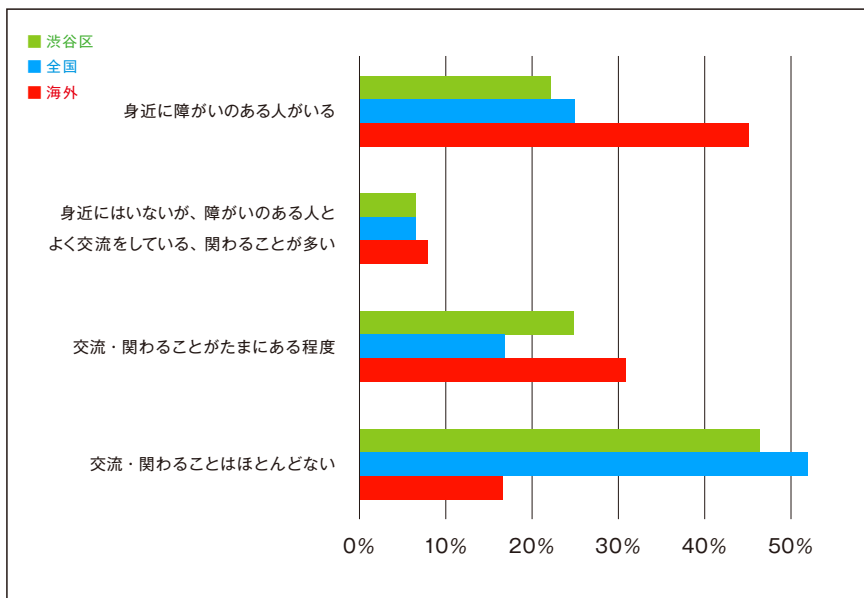
## 障がいのある人との交流の現状について

日本では社会的に良いとされることに対し、本音を隠し建前を優先する傾向があり、障がい者支援事業所の建設も表向きは否定しにくいのが、実際には反対が多い。意識調査では、自宅隣への建設賛成は二一・六%にとどまり、反対や「どちらともいえない」を含めると約八十%が消極的だった。他国と比較しても低く、不安の主な理由は「危険ではないか」という漠然とした恐れである。知識として障がいを理解していても感情面では受け入れにくく、特に日本は障がい者との関わりが少なく、五一・九%が経験なし。そのため、施設建設の合意形成には、障がい者と住民の関係を築くことが必要である。日常的な関わりがなければ偏見は消えず、教育の在り方も見直す必要がある。

図は海外（スウェーデン、アメリカ、中国、インド）、日本全体、渋谷区（\*）との比較表です。日本は、障がい者と交流・関わるのがほとんどないが五十%以上を占めています。

出典元：「差別はよくないけれど、障害者施設建設には反対」―「施設コンフリクト」をどう乗り越えるか。  
<https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/413a5e2005eb839414096276ae01ea363d94dc>

（\*）渋谷区と一般社団法人シブヤフォントによる調査結果より





## 渋谷区内の小中学校の探究学習向けの 取り組みについて

二〇二四年度、シブヤフォントを鑑賞する対話型アート鑑賞が渋谷区内の小中学校の探究学習に採用されました。「代々木山谷小学校」では、対話型アート鑑賞を通じて多様性理解や創造的思考力を体感し、障がい者支援事業所「ストライドクラブ」と連携し障がい者との交流を実施。「神宮前小学校」では障がい者支援事業所「はあとびあ原宿」への訪問を実施。「広尾中学校」では「国際福祉機器展」のワークショップをサポートし、障がい者支援事業所「工房ぱれっと」と「ワークセンターひかわ」と連携して施設訪問・交流を実施。シブヤフォントを活用した学びが広がっています。









# 4

Real Fiction Story

リアルフィクションストーリー

施設支援員編

「亮太君、もつと自分の思ったことを発言していいんだからね」

朝礼の直後、ベテラン支援員の田中千春にそう声をかけられた佐藤亮太は「はい」と小声で頷いた。

すると「もつと自信持つて」と田中が亮太の背中を叩く。

今度は「はい」と返事をすることもできず、亮太はただ頭を下げて逃げるようにしてその場を後にした。

亮太が福祉系の専門学校を卒業し、福祉作業所ひまわりに就職したのは、ちょうど一年前の四月。二年目になり仕事にはだいぶ慣れたが、未だにこうしたアドバイスをよく受ける。

「はあ」

ため息をつく、亮太は今日の作業のための準備を始めた。

東京渋谷区にある就労継続支援B型事業所ひまわりは、知的障がいのある人たちが通所しながら、生きていく力を養っていく施設。

施設ではヨガやダンスなどの運動の他、手芸や裁縫、音楽、絵画など、利用者の特性にあわせながらさまざまな活動をしていて、亮太たち支援員はそのサポートをする。

今日は絵画の日だ。

時間になり、続々と集まってきた施設利用者たちが作業部屋に入ってくる。

「おはよう、マサトさん。今日は水彩画にチャレンジしてみますか？」

亮太はニコニコと笑顔で出迎えて、ひとりひとりに声をかけていく。

アートセラピーという言葉があるように、絵を描くという行為は、身体的にも精神的にもストレスを軽減

するだけでなく、自己表現によって自己肯定感を向上させたり、創造性を発揮させたりする効果がある——と、亮太は専門学校で学んだ。

とは言うものの、理想と現実は違うということを、亮太は社会に出て初めて体感した。

施設利用者の中には、絵を描くどころか、一箇所にじっとしていることが苦手な人や、絵筆や色鉛筆をうまく使えない人もいた。また描ける人でも、何を描いているのかわからない抽象的な絵がほとんどだ。

絵画の時間が終わり、亮太はみんなが描いた大量の絵を片付けていく。

「はあ」

あんなに一生懸命に声をかけて描いてもらった絵も、描き終わってしまえば、もう二度と見返されることもなく、部屋の隅の段ボールの中に溜まっていくだけ。そう思うと、ルーティン化したこの作業にどんな意味があるのだろうと、むなしくなってしまうため息がこぼれてしまう。

「ため息をつくと幸せが逃げていくって言うよ！ 笑って！ 笑って！」

いつの間にか近くにいた田中が亮太の背中をバシバシと叩く。

「田中さんは、悩みがなくていいですね」

つい嫌みのような口調で言ってしまったてからはとずする。

しかし、当の田中はそんなことを気にする素振りもなく「いいでしょう？ 私って根っからのポジティブ思考なの」と笑いながら、絵を次々と段ボール箱に入れていく。

面倒見がよくいつも笑顔の田中は、ひまわり開設当初からの古株で、みんなのお母さん、相談役のような存



在だ。実際、亮太の母親と同世代だそうだ。

亮太は特別繊細というわけではないが、何をするにも「どうしてだろ」「どんな意味があるのだろう」と考えながら行動する。一方の田中は、考えるよりも先に行動というタイプ。

亮太はそんな自分とは真逆の田中のことが少し苦手だった。

できれば放っておいてほしいと思うのに、その経験値からなのか、亮太が何も言わなくても心の中のぼやきを見透かしたような言葉をかけてくる。それはまるで「お前は、まだまだだ」と言われているようで、余計に亮太を落ち込ませた。

そして田中が見ていると思うと、次は何を言われるのだろうと萎縮してしまい、思っていることの半分も行動に移すことができずにいた。

ひまわりのような福祉施設は毎年採用があるわけではなく中途採用も多い。そのため亮太には年齢の近い同僚はおらず、こうした不満や悩みを共有できる相手はいない。

亮太は、胸のうちにくすぶるモヤモヤを抱えたまま、黙々と片付けを続けた。

そんなある日。

ひまわりは渋谷区の事業「シブヤフォント」に参加することになった。

「シブヤフォント」は渋谷区オリジナルのおみやげを作るというプロジェクトで、渋谷区内の障がい者支援事業所に通う障がいのある人たちが描いた文字や絵を、渋谷区内のデザイン学校の学生たちがデザインして、



フロントやパターンにするものだ。

「パターンって何？」

「私たちは何をすればいいの？」

施設長の説明に、支援員の間から次々と質問の声が上がると、田中が声を上げる。

「面白そうじゃない！とにかく、やってみましょうよ！」

何をやるのかもわからないのに無責任な、と亮太は心の中で毒づくが、反論などできるわけもなかった。

\*\*\*

施設長から説明があつてから一週間後、シブやフロントのクリエイティブディレクターのライラ・カセム、そしてデザインを担当するというデザイン学校の学生数名がひまわりにやってきた。

まずはいつもどおりに絵を描いてほしいということだったが、普段と違う状況にみんな緊張してしまい、思うように創作が進まない。

いつもは積極的に絵を描くマサトも、今日は落ち着かない様子で部屋の中をウロウロしている。他の利用者たちもソワソワと落ち着かない様子だ。

その様子をデザイナーの学生たちが緊張した面持ちで眺めている。

フロントの場合は、文字を書けばいいのだろうが、パターンを作るので絵を描いてほしいと言われても漠然

としすぎている。だいたい、何を描いているのかわからないような絵を売り物になってできるわけではない。亮太が早くも諦めモードに入っていると、ライラが部屋の隅にあった段ボール箱から、書き溜めてあった絵を持ってきて作業台の上に並べ始めた。

「あ、この模様は面白いねえ。こっちのイラストは何だろう？ 色使いがとっても素敵」

と、それぞれの絵の特徴を的確に掴んで指摘していく。

最初は遠巻きに見ていた施設利用者たちも、自分が描いた絵の感想を言われて興味を持ち始めたようだ。自然にライラの回りに集まって、口々に何か言っている。

「そう、このきれいな動物はあなたが描いたの？ これは何を使って描いたの？」

ニコニコと笑顔で次々に質問を投げかけるライラと施設利用者たちのやり取りを呆然と見ていた亮太に、学生デザイナーが話しかけてきた。

「普段は何かテーマを決めて描いてもらうんですか？」

「テーマを決めても、そのとおりに描けるわけじゃないんで、基本的には好きなものを描いてもらいます」

亮太が答えると、別の学生から別の質問をされる。みんな熱心にメモを取っているので、亮太の返事も自ずと熱を帯びる。

ふと、視線を上げると田中が笑いながら亮太を見ていた。

「な、なんですか？ 僕、間違ったこと言いました？」

不安になって尋ねると、田中が予想外のことを言った。

「ううん。亮太君、みんなのことよく見てるなーと思って。アキオさんが絵を描きたがらないのは、直線がうまくかけないことがコンプレックスだからだなんて、気づかなかったよ」

「それは、たまたま……」

まさか褒められると思っていなかったで、亮太はしどろもどろになる。

「それは苦手じゃなくて、その人らしさですね。アートの世界では線は真っ直ぐである必要はないので、それを活かした絵を描いてもらいましょう」

いつの間にか、亮太たちのやり取りを聞いていたライラがそう提案してきた。

「その人、らしさ……」

「個性があるからこそ、オリジナリティのあるパターンができるはずですから、皆さんの個性をよく知っている支援員さんたちは、ぜひご協力ください。お願いします」

学生のひとりがそう言っ頭を下げた。

フォントやデザインのことはよくわからないが、自分にもやれることがある。みんなの絵を生かせる場所を作れるかもしれない。そう思うと、亮太の胸は自然に熱くなるのだった。

\*\*\*

フォントとパターンの制作に取り組み初めてから三年。いつもの朝礼で亮太たち支援員は、シブヤフォント

がグッドデザイン賞に選ばれたことを知らされた。

「やったー！」

亮太が叫ぶと、すかさず田中がハイタッチをしてきた。

シブヤフオントは毎年、少しずつバージョンアップして、今年は協働してくれるメーカーが現れ、オリジナルのタオルを作ることができた。自分たちが描いた絵がデザインされたタオルを見たときは、普段はあまり感情を表さない施設の利用者たちも、嬉しそうだった。

何より、今まで目的もなく描いていた絵が、ひよっとしたらシブヤフオントに採用されるかもしれないということは、絵を描くモチベーションに繋がっていると亮太は感じていた。

そして、デザイン学校の学生や協働してくれるメーカーの人など、普段は接点のない人たちが施設を訪れるようになった。彼らが、ひまわりのメンバーに興味を持って接してくれるせいか、今まであまり言葉を発しなかったメンバーが、少しずつ話すようになったり、ハイタッチなどの非言語コミュニケーションが活発になったりといった変化も見られるのが、嬉しかった。

変化といえば、一番大きいのは、亮太と田中の関係だ。

「ねえねえ、こういう絵が今はバズってるんでしょ？」

田中が亮太に何やら雑誌を見せてくる。

「バズってるものは、飽きられるのも早いですし、みんな興味ないと思いますよ。それよりも、前にアキオさんがテレビを見て興味を示していた花火大会の動画、見つけたんですよ」

そう言つて亮太がスマホの画面を開く。

「亮太君も私にはっきり意見を言えるようになったんだねえ。前は怖がつてたでしょ？ 私、知つてたんだから」

田中に指摘されて亮太は目を白黒させる。

「怖がつてなんてないですよ、ただ……」

「ただ？」

「ちよつと苦手だっただけです」

思わず本音をこぼすと、田中が作業台に突つ伏した。

「うわー傷つくなあ」

「ああ、ごめんなさい！」

以前は年齢の離れたベテランの田中とうまくコミュニケーションが取れなかったが、今ではシブヤフロントという共通の話題ができて、いろいろな話ができるようになった。

田中が知らないことを亮太が教えることもあるし、互いに「これがフロントに使えるんじゃないか」と話し合うこともある。

「私だつてさ、こう見えて気を遣つてたんだよ。イマドキの子は打たれ弱いから、あまり言い過ぎると辞めちゃうかなとか、パワハラって言われるかなあと思つてさ」

思わぬ田中の本音に亮太は驚く。

「全然、気づきませんでした。すみません」

こうして軽口を言えるようになっただけでも、亮太にしたら大進歩だが、それだけではない。最近渋谷区内の障がい者支援事業所の担当が集まるシブヤフォントの会議に、亮太もひまわりの代表として参加している。

そのおかげで、最近は他の施設と横の繋がりもできて、さまざまな悩みや情報を共有できるようになった。

「亮太君、変わったよね。オープンになったっていうかさ。明るくなったよ」

田中にそう言われて、亮太は自分でもそう思うと返す。

「前の僕は、デザインやアートのことなんて全然わかってなくて、どうせみんなに絵を描いてもらっても、誰にも見てもらえないって諦めてたんです。でも見てもらえないのは僕が閉じてたからなんですよね。シブヤフォントに関わるようになったら、アートとか他の施設の人とか、いろんなことに興味が湧くようになって。そうやって自分がオープンになったら、どんどんシブヤフォントのアイデアも湧いてくるようになったんですよ」

気づくと田中がキョトンとした目で亮太を見ていた。熱弁を振るいすぎたようだ。

恥ずかしくなって「なんて」と言って頭を掻いて誤魔化すと、田中はなぜか目に涙を浮かべた。

「なんで泣いてるんですか？ 苦手って言ったからですか？ すみません！」

「違うよ。私もさ、諦めてたんだよ。障がい者アートをちゃんとした収益に繋げるなんて無理だと思ったの。なのに亮太君が、みんなが描いた絵を大事そうに片付けているのを見て、自分はいつからこんな風に諦めるようになったちゃったんだろうって申し訳なく思ってた」

そこまで一気に話すと田中はそばにあったティッシュで鼻をかむ。



「田中さん、泣いてる場合じゃないですよ。来年は渋谷スクランブルスクエアですからね！」

渋谷みやげのプロジェクトは着々と進んでいて、ついには渋谷スクランブルスクエアに常設の販売スペースができるという。そこでは、シブヤフォントを使ったタオルやタンブラー、Tシャツなどが販売される。その準備に向けて、ひまわりの支援員たちは大忙しなのだ。

でも、その忙しさは決して苦にならない。なぜなら、シブヤフォントのおかげで事業所の枠を飛び越えて社会との繋がりに発展したことで、亮太自身の世界も広がり、充実感を得ているからだ。

「ライラさんからメールで、今年度のスケジュールが来てました。またどんな出会いがあるか楽しみですね」  
亮太はそう言うと、学生に見てもらうため、みんなが描いた絵を大切そうに一枚一枚ファイルにまとめはじめた。



# COLUMN 4

施設支援員編



## シブヤフォント・ご当地フォントに おける支援員のコメント

「デザイナーさんが入ることで、キレイな作品を作ることが重要ではなく、もっと自由でいいと思えた」

「描き続ける中で、その人のスタイルがどんどん決まってきた。神戸フォントをきっかけにアート事業を本格化させたが、『この人の色はこれだよ』『この人の線の太さはこれだよ』というのが少しずつ出てきて、絵を通してその人のアイデンティティが垣間見えるようになった」

「プロダクトにしやすいもの変わっていくのがすごいなと思った。大きな絵の中の一部を……とか職員も一緒に相談するが、いろいろな使いやすいものにパッと変わっていくのを間近で見ているとマジックが起きているなと思う」

「いろいろな企業さんに使ってもらえるという流れ

が、自分の中での未来が広がっている感じがする」

「それまで関心のなかった支援員さんが『これフォントに使えるかな』『この人の絵は面白い』と私たちに持ってきてくれるようになった。普段から絵や文字を書かない利用者さんも、書いてみようかなと試してみたり、みんなやってみようという雰囲気になっただことが嬉しかった」

「パターンとかフォントを作ったことで、今までデザインなどではできなかった職員が、それを使って簡単なチラシのデザインをしやすくなった」

「以前はただやっているだけだったのに、今は『頑張ったらまた出してもらえ』と多くの人に見てもらいたいという意欲に溢れており、『次は何を出す？ 何なら使ってもらえる？』と話しているの  
で、すごく嬉しい」

「どんな人でもいいところがあるという発想が持て

るようになった。だから描くことが苦手な人でも、自分たちの支援がはまっていなくてもいいところがあるのだろうと頭でなく実感レベルでわかるようになった」

「『このデザイン素敵だね』『この人が描いたんだよ』『こういうものに使われているんだよ』と教えてくれたりする。それによって世界が広がり、『こういうやり方もあるんだ』と思ったりしてワクワクする」

「最初は皆が手探り状態で戸惑いながら活動していた部分があるが、年数を重ねることにだんだん施設職員としての役割は『こういうことかな』とわかってきた。利用者についてよくわかっていく立場からわかっていくことを提示するだけでなく、学生さんや企業の人、お客様に対しては『こういう一面もこういう一面もあって』といういろいろな面があるということを見せていくことが私たちに求められていることなのだとわかってきた。それはシブヤフォントの活動を通して得た気づきであり、ノウハウだった」



「真つ直ぐに線を描けないことでそれまで絵を描くことをコンプレックスとしていたメンバーが、自分の描く線が強みであることに気づき一緒に体験できた」

「施設内の作業では力が発揮できなかったメンバーが、アートで認められるようになった」

「渋谷区の施設に来て様々な施設が手を取り合って協力する姿勢やシブヤフォントの活動で利用者の可能性を広げてゆくを見て、日々の支援の中でも利用者の能力をこちらで決めず少しでもチャレンジできるように促すことが増えたと思います。シブヤフォントを通じてシヨウガイはヘンシンできるという言葉を胸に刻みました」

「携わった利用者さん、支援員、デザイナー共に意識が少し変わったように感じますし、共通言語としてひとつのワード（ご当地フォント）ができ、可能性が広がったように感じます」

「普段ならすぐに飽きてしまい離席するメンバーさんも相手の様子を窺いながら期待に応えようとしている様子は日常的な場面ではあまり見られないので新しい一面を発見できたと感じました。半面、非日常に不安を感じるメンバーさんにとっては何が行われているのか分からないことも多かったと思うので、そのようなメンバーさんへはもっと時間をかけて継続的に働きかけていく必要があるのかなと感じました」







# 5

## Real Fiction Story

リアルフィクションストーリー

アーティストと家族編

「うあ、今日もこんなにたくさんあるの？」

桑田洋子は、息子がテーブルの上に広げた画用紙を見て歓声を上げる。

洋子が「これは何？」と聞くと、息子の和樹は自分が今日施設で描いた絵の説明を始めた。

和樹は以前から絵を描くのが好きだったが、描いた後の絵には興味がないようだった。しかし最近では、こうして自分が何を書いたのか、どんな風に考えて描いたのかを説明してくれる。

これも絵を描く目的ができたからだろう。

それを聞きながら和樹とお茶を飲む時間が、もっかの洋子の楽しみだ。

桑田家は、洋子と夫の健治、二十四歳になる長女のすみれ、そして二十歳の長男和樹の四大家族。

和樹に知的障がいがあることがわかったのは三歳のときのことだ。

二歳の頃から周囲の子どもたちとは何かが違うという感じはあった。しかし、そのときはまだ「うちの子は発育がのんびりしている」程度の違和感でしかなかった。

しかし三歳になる頃、「安心のためにも、一度、調べてもらったら？」という知人のすすめで、大学病院で検査をしたところ、自閉症と知的障がいと診断された。

実際に診断がくだっても最初は事実を受け入れられず、夫婦で近所の神社にお参りをして、和樹の障がいが治りますようにと祈ったりした。

今振り返れば、それは現実逃避だったのだろうと洋子と思う。

そんな中、ある事件が起きた。

\*\*\*

和樹の幼稚園の入園式のことだ。

親と新入園の児童が整列する体育館の後方で、夫婦はハラハラしながら和樹を見守っていた。

案の定、式の途中で和樹が泣き出した。初めての場所で親と離ればなれになり、見知らぬ人に囲まれて不安になったのだろう。和樹は泣き止むどころか、その声はどんどん大きくなる。

仕方なく健治が園児の列に近づき、泣きじゃくる和樹を抱いて体育館の外に出ようとした。その様子を見ていた園児の祖母だろうか、年配の女性がじつと健治と和樹を睨みつけるように見ていた。

入園式の帰り道、泣き疲れて眠ってしまった和樹を背負いながら健治がぼつりと呟く。

「躰がなつてない……って思ったんだろな、あのおばあさん」

さつき、凄い形相で健治たちを睨んでいた女性のことだと、洋子はすぐにわかった。

「幼稚園には事前に和樹のこと、説明してあったんだけどね。きつと、和樹がどうして泣いたのか、知らなかったんだよ」

洋子はそれ以外、かける言葉を思いつかなかった。

「うん、わかつてる。でも俺、一生あの目を……大事な入園式を台無しにしてって責めるようなあの目を忘れられないかも……」

どんなときも愚痴や弱音を吐かない健治が初めてこぼした弱気な言葉に、洋子は何も言うことができ

なかった。

その後も、決して苦勞がなかったわけではない。

たとえば、すみれが通う小学校の特別支援学級に和樹が編入することになったときのことだ。

全校集会で和樹を紹介してくれることになった。

児童の視線が集まる中、校庭の朝礼台の上に立った和樹は、自己紹介のためにマイクを渡されると、しばらくじっとしていた。恐らく緊張していただろうし、マイクに興味津々でもあったのだろう。いきなりマイクに口をつけて「ボーっ」と大声を出したのだ。

一瞬の静寂——やがて大爆笑が起きて、和樹の存在は学校中に印象づけられた。

そうした、他の子どもとは明らかに違う行動をとってしまうたびに「それはダメ」と、本人に言っただけで聞かせたのだが、同時に洋子と健治は、和樹を「普通」という枠に無理矢理はめ込むことの難しさも感じていた。

幸い、編入後の学校では周囲の理解があり、幼稚園の入園式の一件のように辛い思いをすることはなかった。

長女のすみれは弟思いで優しく、家族は平和に暮らしていた。

だから、洋子も健治も忘れていたのだ、あの入園式のときの気持ちを。

\*\*\*

「すみれ、ちょっと聞いてもいいかな」



「なに？ お母さん」

土曜日の午後、洋子と一緒に夕飯の支度をしていたすみれに話しかける。

「和樹に障があるって、すみれはいつからはつきり認識してた？」

和樹の障がいについて、直接言葉にしてすみれに説明をしたことはなかった。大切な家族を「障がい者」という単純な一言で定義づけたくなかったからだ。

すみれからもあえて聞いてくることはなかった。だから、いつかすみれが大人になったら、きちんと話そうと思っていたのだ。そのすみれも来月二十歳を迎える。今なら、ちゃんと話せるのではないか？

しかし、予想に反し、すみれはニンジンを手にしたまま固まってしまった。

コンロにかけた鍋からは温かな湯気が上がっている、そして……

「え……すみれ？」

父親似のすみれの黒目がちな瞳から、ポロポロと涙があふれ出す。

洋子はすみれの手からニンジンを受け取りコンロの火を消すと、ダイニングの椅子に座らせた。

「ごめんね、急に変なことを聞いて」

すみれの背をさすりながらそう言うと、すみれが顔を左右に振った。

「わ、わたしこそ、ごめん……ちよつとびつくりしちゃって……」

しばらくして落ち着くと、すみれはゆっくりと話し始めた。

「なんとなく、最初からわかってた……障がいつてという言葉は知らなかったけど、和樹が他の子とはちよつと

違うなって……でも、それが和樹の個性だって思ってたの。でも、あの和樹が小学校に転入してきた日……マイクをちゃんと使えなかった和樹をみんなが笑って……」

そこでまたすみれは声を詰まらせた。洋子は黙ってすみれの背をさする。

「和樹がみんなに笑われてると思ったら、すごく悲しくて、悔しくて……だから、お母さんたちに言えなかった」  
今まで和樹の障がいについて、何も聞いてこなかったのは家族のことを思ってたのだ。すみれは小さい頃から、ずっとその小さな胸に悲しい思いや、悔しい思いをため込んでいたのかと思うと、不憫でならない。そして、洋子は大切な娘にそんな思いをさせていたことが申し訳なくて仕方がなかった。

\*\*\*

そんな桑田家に転機が訪れた。

和樹が通う福祉作業所ひまわりが渋谷区の新しい試み「シブヤフォント」に参加することが決まったのだ。渋谷区が推進する「渋谷みやげ開発プロジェクト」の一環で、当初は渋谷らしいおみやげを開発するという事だった。しかしその企画が発展し、渋谷区内の障がい者支援施設と区内のデザイン学校の生徒が協力して「シブヤフォント」というオリジナルのフォントやパターンを開発。そのフォントを使ったさまざまな商品を渋谷みやげにするという。

そこで早速、渋谷区内のデザイン学校に通う学生たちが、ひまわりにやってきた。

普段は一人で通っている和樹だが、今日は洋子も見学のために付き添っている。

今日の和樹はなぜか絵の具でグルグルと、円ばかりを描いている。

「円、好きなんですか？」

浅田という学生デザイナーのひとりに話しかけられた和樹は、まるでその声が聞こえていないかのように、画用紙に一心不乱に円を描き続ける。

それでも浅田は気を悪くした風でもなく、ずっと和樹の様子を見守っている。

「お名前を教えてください」

今度は名前を聞かれ、ついに和樹は作業部屋から出て行ってしまった。

部屋の中には学生たちだけでなく「シブヤフォン」のアートディレクターや区の関係者など、普段見慣れない人たちがたくさんいる。

繊細な和樹は環境の変化だけでなく、みんなが何かを自分にさせたがっている、そうした微妙な空気を感じとったのかもしれない。

しばらくして落ち着いた和樹は作業部屋に戻ってきて、他の施設利用者と一緒に絵を描き始めたが、最後まで一度も浅田と話すことはなかった。

しかしその後も、浅田はひまわりにやってきて、絵筆を動かす和樹を見守り、根気強く話しかけてくれた。和樹は普段から絵を描くが、そのモチーフはさまざま。そのときの気分で絵の具やクレパスを使い、画用紙に好きなものを描いていく。一見、無造作に描いているようにも見えるが、選ぶ色や形には和樹なりのこだわり

りがあるようだった。

そのせいか、

「あの、明るい色はどう？ 黄色とか？」

と、浅田が提案すると、黙っていた和樹が「嫌い」と一言だけ言った。

浅田は和樹のそんなこだわりを眺めながら世界にひとつだけのフォントを作り出そうとしていたが、コミュニケーションがとれないため、なかなか簡単にはいかない。それでも浅田は施設に足を運び、返事をしない和樹に話しかけた。

そんなある日、浅田がレモンイエローの絵の具をパレットに出して「これで描いてもらえますか」と和樹に話しかけた。すると……

「いいです……」

と言って、絵筆をレモンイエローの絵の具にひたした。

「ありがとうございます！」

浅田が笑顔でお礼を言うと、和樹も嬉しそうに笑った。

レモンイエローの絵の具を付けた筆でグルグルと円を描く和樹に浅田が「いい感じ、いい感じ」と声をかける。すると今度は和樹から浅田に「ピンクをください」と使いたい色をリクエスト。

その後もふたりで、いくつもの円を描き続けた。ときには二色以上の色を混ぜたり、色を重ねたりして、和樹オリジナルのカラフルな円が次々とでき上がっていく。

洋子は和樹が人と協力しながら何かを生み出している姿に胸がいつぱいになるのだった。

\*\*\*

その後、和樹が描いた色とりどりの円を浅田がデザインしたパターンが完成。親から見れば、どれも同じに見えた円の中から、浅田がとっておきの円を見つけ出し、それをドット柄のパターンにしてくれたのだ。和樹のイニシアルをとって「Kドット」と名付けられたパターンは正式にシブヤフォントとして登録された。

さらにKドットはJ R恵比寿駅近くの工事現場の仮囲いアートに採用されたり、農林水産省が推進する農福連携イベントのビジュアルデザインに使われたりするなど、洋子たち家族が想像もしていなかったような展開を見せる。

その後シブヤフォントはさまざまな企業に採用され多くのメディアで紹介されるようになった。そしてついには渋谷区を飛び出し全国規模へと拡大。ご当地フォントとして、さらなる進化を遂げている。

そんなある日、桑田家にある依頼が舞い込む。

シブヤフォントの生みの親のひとりでもある磯村から、シブヤフォントのイベントの一環として、フォントに関わったアーティストのご家族にインタビューをしたいという依頼だった。何かの役に立てるならと、桑田家は喜んでその依頼を受けた。

「和樹は昔も今も私の自慢の弟です。Kドットがいろいろな場所に使われるようになって、和樹のことをみんなに自慢したいです。和樹と家族で幸せです」

イベントホールの片隅、インタビュで磯村に和樹をどう思うか聞かれ、すみれが何の迷いもなくそう答えた。それを聞いた洋子は、ハンカチで目頭をぬぐう。

かつて、すみれが和樹のことで我慢してきたのではないかと不憫に思ったこともあった。

でも、すみれは不憫な子ではない。

こんな風に堂々と胸を張って弟を自慢できるすみれは、言葉の通り、本当に幸せだと感じてくれているのだろう。そんな和樹とすみれの親である自分も幸せだと、洋子はまた嬉し涙を拭う。

「僕も和樹のことを自慢の息子だと思います。ただ、和樹の幼稚園の入園式で、事情を知らない人から凄く睨まれたことがあって。それがトラウマってわけじゃないですけど、なんとなく自分から子どもに障がいがあるとは言わないようになっていました」

今度は健治がインタビュに答える。

「大抵の人は、息子に障がいがあるという話をする、驚かれたり、気を遣われたりする、あえて自分からは話さないようにしていました。でも、シブヤフォントに関わるようになってからは、親バカじゃないですが、和樹のフォントのことを自分から話して自慢したりしてますね」



そう照れたように言って健治が頭をかく。

「社会と関わる機会が増えて、和樹の環境が変わったというのも大きいですが、私たち家族も、シブヤフォントを通じて、いろんな方と出会うことができました。Kドットをデザインしてくれた学生さんも、真摯に和樹に向き合ってくれて嬉しかったですね」

洋子がそう言うと、健治とすみれも笑顔で頷いた。

それまで桑田家の人々は、障がいのある人間は、世の中に合わせてあらゆることを我慢しなくては、社会で生きていけないと思いつ込んでいたと、健治は懐かしそうに過去を振り返る。

「でも、シブヤフォントで和樹のありのままを受け入れてもらって、僕たち家族は和樹は無理に変わる必要はない、今のままの和樹で十分なんだという気持ちに変化できたんですよねえ」

そう健治がしみじみと話したところで、誰かが大声で叫ぶ声があった。

今日のイベントに参加している福祉作業施設ひまわりの支援員、田中千春と佐藤亮太だ。

「桑田さん、みんなで記念撮影しますよー」

田中が大声で叫んでいる。

磯村は洋子たちに礼を言ってインタビューを終了した。

「磯村さん、あとひとつだけ」

ICレコーダーをオフにした磯村に洋子が話しかける。

「はい」

「私、最近、すみれと和樹が私たち夫婦のもとに生まれてくれて、心からありがとって毎日思ってます。ふたりがいてくれるおかげで、シブヤフォントの方とか、いろんな人に出会えて。そういうことを幸せだな、これからも一緒に楽しいことをいっぱい重ねていこうねと思うんですよ」

そう言った洋子の目には一点の曇りもなかった。

磯村はICレコーダーをポケットにしまいながら、そっと目頭を押さえるのだった。

\*\*\*

暦の上では立春を過ぎたものの、まだまだ寒い日が続いていた。

しかし、渋谷の街を歩きながら、東急プラザ原宿へと向かう健治の足取りは軽い。

そこには「シブヤフォントラボ」と呼ばれる、シブヤフォントの拠点がある。ビルのエントランスを抜け、七階のラボに向かうと中から明るい声がした。

「健治さん、いらっしやいませ」

応じたのは磯村だった。彼は一瞬驚いた表情を見せたが、すぐに微笑んだ。

「びつくりしました。シブヤフォントでボランティアしてただけなんです。とっても嬉しいですよ」

健治は頷いた。以前からシブヤフォントに興味があったし、何か自分にもできることがあればと思っていたのだ。磯村は嬉しそうに続ける。

「ちょうど今、和樹さんが通っていた原宿前小学校で、子どもたち向けの対話型アート鑑賞や、障がいのある人と交流する共同創作など、さまざまなプログラムをやっているんです。どうでしょう？ そちらのボランティアなど、いかがですか？」

健治は少し考えた。子どもたちとアートを通じて対話する——それは今まで経験したことのない世界だった。でも、なぜか心が動く。新しい何かを始めるのに、これほどぴったりの機会はないかもしれない。

「ぜひ、やらせてください」

そう答えると、磯村は満面の笑みを浮かべた。シブヤフロントでの新しい挑戦が、ここから始まるうとしていた。





# COLUMN 5

アーティストと家族編

## MoDo+が採用された展開事例

文中のシブヤフォントのパターン「Kドット」(実名・MoDo+)は、農林水産省が主催する「ノウフクの日」制定記念イベントのグラフィックに採用されるなど、社会にどんどん広がっています。

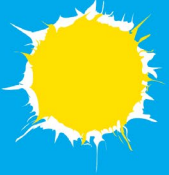
イベントのポスター(次図)は、障がいを持つアーティスト「みずきさん」が描いた絵を元に、デザインを学ぶ学生によって創作されたパターン「MoDo+」を農作物に見立てて、空をイメージした水色と、人が環境を耕していくことをメッセージとした茶色とを組み合わせて、自然の恵みに感謝をこめた広々とした景観をデザインしたものです。

みずきさんは知的障がいを持ち、都内の就労継続支援B型事業所に通う二十九歳の男性です。ノウフク・アワード二〇二三チャレンジ賞を受賞した「夢育て農園」(世田谷区)において農福連携にも参加しています。青い空の下で、大好きな畑で、仲間たちと野菜の種まきや収穫などを行う経験を重ねることで、自分の想いを言葉にできるように、毎日の作業にも積極的に関わられるようになったといえます。

全ての人が生きる力や可能性を最大限に発揮できる社会の実現に向けて、これからも農福連携の取り組みを推進していきます。



本エピソードのもととなった澤田さんご一家(中:アーティストのみずきさん)



# 11月29日は ノウフクの日

「ノウフクの日」制定記念イベント  
サステナブルな食と地域に向けて

開催日時・場所  
12月2日[月] 11時～17時  
SHIBUYA QWS スクランプルホール  
東京都渋谷区渋谷二丁目24番12号 渋谷スクランブルスクエア[東横]15階



無料イベント  
予約不要  
入場自由

共催：農福連携等広域コンソーシアム  
(一社)日本農福連携協会  
農福連携全国都道府県ネットワーク

農福連携(ノウフク)とは、農業と福祉が連携し、障害を持った人をはじめとする多様な人たちが、農業で活躍することを通して、自信や生きがいを持って社会参画することを実現する取組です。本イベントでは、企業の農福連携への参画、農福連携での働きがいのある職場づくり、高品質な農産物の生産など、企業価値向上に資するさまざまな取組をご紹介します。



Main Artist: Mizuki (RISHIBUYA FONT)



## シブヤフォント・ご当地フォント におけるご家族のコメント

「シブヤフォントに参加するために、自宅でも主体的にデザインを考えたり描いたりすることに喜びを感じている様子里に本人なりの成長を感じています」

「作業所で活動した日は、今日は何を書いたか、どう考えて書いたかなど本人から話が出るようになりとても楽しんで活動している。自宅でも絵を描いたり文字を書いたり集中して取り組む姿勢がみられます。アート活動で表現することで自信を持ち、社会参加することにも積極的になったと思います」

「シブヤフォントが始まって最初のころ、障がいのためまっすぐな線が蛇行してしまうことであまり図形を描くことがなかったのですが、その蛇行する線が素敵なデザインになり、たくさんの方々にお褒めの言葉を頂いたことには本人も家族も驚きました。その後の活動に意欲的に取り組むきっかけになったと思います」

「印象的だったのは、『僕のRというのがいいって褒められた』『僕のRはすごくカッコいいみたいだ』というふうに自分から話をしてくれたこと。私たち親からは全部同じに見えるというか、そこにひらめきや輝きは見つけられないのだが、数多くある字の中の『そこがいい』と褒められて、自分を認められているという気持ちを持てた」

「子どものころから『これを何回もやって行けば上手になる』とか『これを積み重ねていくと、今の社会の中で生きやすくなる』ときちんと書く努力や積み重ねを求めていることが多く、それによって苦手意識が生まれてしまいうこともあったが、シブヤフォントとの出会いで『今のままでいい』ということに気づけた」

「自分の表現をプロのデザインというところから形にしていくことで、個性が世の中に知られていくというのは、それこそ交流ではないけれど、形が変わっていくというのがすごくいいと思う。違う人たちが関わってくることでもまた変わっていくのかなと思う。いろいろな人たちが関わることで、変わっていくのかもしれない」

FAMILY  
ARTIST

「僕（の字（なんとという字だったかは忘れてしまいました）が）がすごく良いんだって」と嬉しそうに話してくれた」

『アート』『デザイン』の世界に対しての見方が変わりました。一部の美術的センスのある人たちが作り上げているイメージがありました。もっと多様で自由であるのだと思います。表現した素材（ここでいうと障がい者がデザインしたもの）を専門性のある人たちが形にしてくれる世界は温かい共生だったリインクルーシブだと感じました」

「学生さんは、一生懸命向き合ってくださいました。障がい者とどう対処したらいいかわからないような彼女（学生）が真摯に向き合い、最終的に二人でmonoと名前のついたパターンを作り出した。そのうちそれがハンカチになって売られるようになった。SOC千駄ヶ谷コミュニティセンターも隈研吾さんがデザインされたと聞いたが、まさかのコラボレーション。うちの子の絵が、隈研吾さんにほっこり感や温もりみたいなものを感じていただけたのかもしれないと思う。以来、家の

中では『ミズキ先生』と呼ぶようになった。本当に持っている内なる良いものを発掘していただけたことが嬉しく、心から感謝している」

「（息子に対して）何もしなくてもそのまま十分なのだという気持ちに自分に変化した。そのままそんなにいいのだということに気がついて嬉しくなった。ここに参加することで気がつくことができたので感謝している」

「こんなことがあるのかとすごくビックリした。それは個人の力では不可能で、シブヤフォントの力だと思う。障がい者の力を引き上げるといふか世の中に出していくことが素晴らしいことだと感動した」

「自宅で『今まで絵を描くの嫌いだっただけど皆が褒めてくれるから好きになったんだよな。次描くのはハートだな』と大きな声で独り言を言っていました」

「今まで子供を褒めることはあまりなかったのです

が、シブヤフォントの活動の中で、色々な方に褒められて嬉しそうにしている姿を見て、褒めることの大切さに改めて気づかされました。色々な方に褒められ、自信を持つことができ、笑顔も増えたと思います」

「シブヤフォントの活動への参加によって、『可能性』というものがひとつではなく、幾つもあることを娘が実感できたのではないかと感じます。自分の作ったアートがいつかそうした商品に使われたら嬉しいと語っていたので」

「主人が娘の障がい話を話すきっかけ作りになり力ミングアウトしやすくなったように思います」

「娘の働いている作業所のことや展示されたアート作品・場所を友人知人に宣伝するようになった。以前は限られた友人にのみ話していた内容を、より多くの方に知ってもらいたいと思うようになった」

「姉の絵がシブヤフォントとして役所の方々が名刺に

活用してくださり、名刺交換時に話題になって広がり、親としては誇らしいですし、親も活用させていただき感謝しております。旅先の箱根や河津で自分の作品と出会うと嬉しそうで（旅の方たち・宿の方にも）自分の作品をアピールしています。そこでも話題となることで『生きがい』を感じているようにも思います」

「私自身も、娘の中に秘めていた絵や美的センスについてびっくりもし、本人の能力を見直した、見直しつつある、といった現状かと思っています。そのために本人が望めば、なんでも協力するよ、といった気持ちです。家族が全員娘のことを見直したということで、今までの苦労が報われた!! と思いました。行動変容があったかという？ ですが、支援スタッフには改めて感謝の念を抱いております」

「障がい理解の活動をするときに、＼なにわふおんと＼の取り組みを伝えると、障がいの理解をしてもらいやすくなったこと。息子の『できること』をたくさんの人に知ってもらえました」









# 第二章

へんしんの舞台





# 1

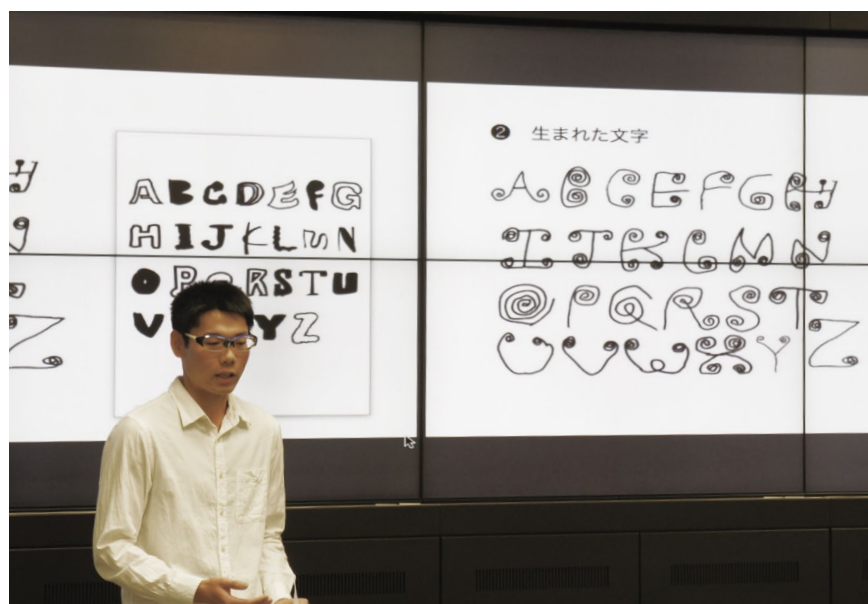
シブヤフオントとご当地フオントについて

## 共創が生み出す新たな価値

シブヤフォントとは、産官学福の多様な団体、人々による共創であり、地域共生社会の実現に向けて大きな成果を上げてきました。ここでは、シブヤフォント・ご当地フォントが生まれた経緯をたどります。

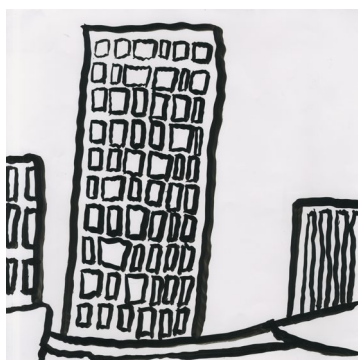
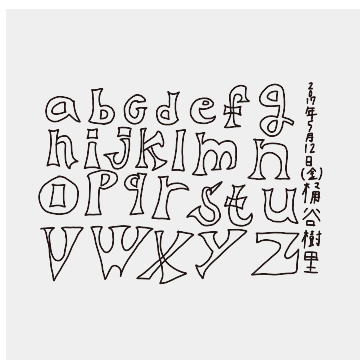
二〇一六年、渋谷区長の「渋谷土産を作ろう」という呼びかけのもと、同区内の障がい者支援事業所と専門学校桑沢デザイン研究所の学生たちが連携し、「障がいのある人の文字をフォント化する」というアイデアが生まれました。この試みは、単なるお土産開発の枠を越え、多様な関わりを生み、障がいのある人の表現を社会に広げるプロジェクトとして発展していきました。

フォントはデータとして残るだけでなく、多くの日常的な場面で利用されるため、福祉の世界の創造物を社会に浸透させる手段として最適でした。そして、障がいのある人の絵を活用し、デザイン性を高めた総柄パターンも追加され、企業への採用促進が図られました。



桑沢デザイン研究所の学生によるシブヤフォントの提案プレゼンテーション

障がいのある人の原画



学生によるデータ化



採用された商品



二〇一七年から、渋谷区は株式会社フクフクプラスに「シブヤフォント」事業を委託し、障がい者支援事業所と連携しながら、障がいのある人と学生の協働創作によるフォント・パターンの利活用を通じて障がい者の工賃向上と多様性理解の促進に取り組みました。

そして同年、クリエイティブディレクターにライラ・カセムを迎え、障がいのある人と学生がより深く共創できるフィロソフィーを現場に導入していきましました。シブヤフォントは、障がいのある人が描いたものを単にデジタル化するプロセスで終わると思われがちなのですが、障がいのある人と学生が直接交流し、創作の過程で相互に学び合うプロセスを設計したのです。

このプロセスでは、支援員と連携しながら、障がいのある人の特性に寄り添い、それぞれに適したアートの制作方法を模索しました。例えば、筆圧が弱い人には水彩画を活用して作品がより鮮明に表現されるよう工夫し、集中が続きにくい人には折り紙や粘土など異なるアプローチを提案。また、スパッタリング（筆で

絵の具を散らす手法）を取り入れ、楽しみながら表現を広げる方法も生み出されました。

こうしたプロセスの工夫によって、障がいのある人と学生との交流がより自然に深まり、お互いの個性を理解し合う環境が醸成されました。この取り組みを通じて、学生はデザインの枠を越えたソーシャルデザインの実践を体験し、障がいのある人にとっては新たな表現の可能性が広がりました。またこれが、単なる作品制作にとどまらず、障がいのある人と学生の相互理解を促進し、多様性の尊重と共生の意識を高めるきっかけとなっていくのです。

そして、障がいのある人の収入支援と社会理解を目的に、フォント・パターンのライセンス事業を開始。フォント・パターンが単なるデータとして消費されるのではなく、障がいのある人に実際に経済的なメリットをもたらす仕組みが整備されました。

フォントは、共生社会を体现しうるアートといえます。

障がいのある人とデザインを学ぶ学生によって生み出されたフォントは、使う人がダウンロードし、その文字を自由に並び替えて、ボールドにしたり、色を変えたり、さまざまな文字列に変化させることができます。そうしてタイプされた文字群は、障がいのある人、学生、使う人という三者による共創クリエイティブといえます。

こうして作る人、使う人が一緒に作り上げるプロセスが包含されているフォントというアートは、共生社会の象徴といえます。この概念に沿って、パターンもラインナップする際に、使う人が並べて使う、色を変えられるなど、フォントで再現できていた作る人・使う人による共創が生まれるようなデータ形式とライセンス体系を採用しています。

## 共創を叶える新たな組織体制

二〇二一年四月、シブヤフォントの取り組みをさらに強化し、持続可能な形で運営するため、渋谷区内の障がい者支援事業所の施設長、渋谷区障がい者福祉課長、

桑沢デザイン研究所非常勤教員（兼任）株式会社フクフクプラス代表）が理事となり、完全非営利型の一般社団法人シブヤフォントが設立されました。同法人が株式会社フクフクプラスから、事業を継承し、自主運営を開始。地域社会との産官学福の連携を強化しながら、より大きな社会的インパクトを生み出すことを目指しました。この法人設立により、産官学福の体制が整い、経理の透明性が実現し、ガバナンスが機能して、さまざまな方々がフラットに関われる体制が整いました。

シブヤフォントの成功は、渋谷区内の障がい者支援事業所が横断的に協力し、柔軟な連携を築いたことによって実現しました。プロジェクトの開始時から、施設間のコミュニケーションが活発であり、アートの著作権や制作方法、工賃への還元などの課題を共有しながら進めることができました。

また、シブヤフォントの活動で生まれた十一施設のフォントやパターンは、各施設が自由に活用できる体制が整えられており、リソースを共有しながら渋谷区全体

で成長するモデルが築かれています。この横のつながりがあったからこそ、産官学福の強固な協力体制が実現し、シブヤフォントがより大きな社会的インパクトを生み出す基盤となりました。

増え続けるフォントやパターンデータの管理を効率化するため、クラウド型のデータベースを導入しました。このシステムにより、採用案件ごとの障がい者支援事業所への支払い計算や、実績の履歴管理がスムーズに行えるようになり、データの管理運営体制がより整備されました。これにより、透明性のある運営が可能となり、障がいのある人々への適正な利益還元が確実に行われる仕組みが構築されています。

シブヤフォントは、専門学校桑沢デザイン研究所においても重要な役割を果たすようになりました。二〇二二年には、夜間部のカリキュラム改変に伴い、昼間部の自由選択科目「ソーシャルデザインプロジェクト」として正式に開講されました。これにより、シブヤフォントは単なる課外活動ではなく、学術的にも体系化された教育

プログラムとして確立されることになりました。

この授業の担当教員には、二〇一七年からシブヤフォントのデザイン制作を統括しているライラ・カセムが就任。有志の学生たちによる活動から発展し、より多くの学生が学べる場となりました。これにより、シブヤフォントはデザイン教育においても、ソーシャルデザインのプロセスを実践的に学べる貴重な機会となりました。二〇二四年からは夜間部の聴講生制度が認められ、さらに多くの学生がこの授業に参加できるようになり、学びの場が一層広がりました。この取り組みは、デザイン教育と社会課題の解決を結びつける新たなモデルとなり、学校法人としても地域社会への貢献を強く意識したものとなっています。

このように、シブヤフォントは単なるデザインプロジェクトを超え、教育・社会・福祉の分野を横断する意義深い活動へと発展しています。





第2回 ご当地フォント発表会

## ご当地フォントの誕生と広がり

シブヤフォントの成功を受け、全国の企業、自治体、障がい者支援事業所から「同じ取り組みをしたい」という要望が多数寄せられるようになりました。これを受け、日本財団の通常助成に申請し、採択されたことで「ご当地フォントプロジェクト」が正式に始動しました。

初年度には全国五地区をモデル地区として選定し、運用を開始。そこで得られた知見や経験をもとに、プロジェクトの運営体制を確立しました。さらに、毎年新たなご当地フォントチームを募集し、全国各地での展開を促進。こうした取り組みにより、地域ごとの文化や特色を反映したフォントが次々と誕生し、障がいのある人々の創作活動の幅も広がっています。以降、各地域の障がい者支援事業所とデザインを学ぶ学生、地元企業が協力し、それぞれの地域の特色を生かしたフォントを制作する動きが広がっています。

二〇二五年時点で、北海道から九州まで二十二地区で

ご当地フォントが制作され、地域に根ざしたデザインが誕生。ご当地フォントは単なるデザインデータにとどまらず、地域の活性化や障がい者支援の新たな形として注目を集めています。

## 共創のその先へー 交流が生む新たな価値

障がいのある人にとってデータ採用は嬉しいものの、実感が湧かず、やりがいを感じにくいという課題があります。例えば、商品販売では、自ら商品を作り、お客さんと直接交流し、販売し、お礼を言われることで働きがいを実感できます。そこで、障がいのある人と区民や観光客が交流できるイベント「アートコネクト」を開催し、新たに開設された「シブヤフォントラボ」では、障がいのある人が実演販売を行うなど、障がいのある人が多様な人々と交流し、働きがいを生み出す機会を提供しています。そして、同施設において、イベント、ギャラリーなど、さまざまな企画を運営し、障がいのある人々、学生、デザイナー、企業、市民が交流し、新たな共創の可能性を探る場としています。

「シブヤフォントラボ」のオープン記念イベント「インクルーシブファッションショー」は、まさしく多様な共創を体現するものとして開催されました。障がいのある人、障がい者支援事業所の支援員はもとより、デザイナー、学生、スタイリスト、ヘアメイクアーティストなど、多種多様な人々との連携によって、新たなショーを作り出したのです。これは、シブヤフォントの共創の第二ステージとなるマイルストーンになりました。

同施設のオープンに合わせ、ミッションステートメントを再定義しました。それが、「ショウガイはへんしんできる。共創するクリエイティブ集団」です。シブヤフォントやご当地フォントを通じて関わる人々は、行動変容や内的変化を経験しています。皆さんが読んだエピソードからも、その変化を感じ取れるのではないのでしょうか。

このように、障がいのある人々との関わりを通じて、私たちはまさに「変身（へんしん）」してきました。その過程で、「障害者」という固定的な捉え方にとらわれるのではなく、多様な解釈を受け入れる「ショウガイ」





（あえてカタカナ表記）という概念を打ち出しました。

そして、シブヤフォントのプロセスは、多様な人々との共創によって築かれ、それを通じて新たな社会的価値を生み出しています。私たちは共創の力で、「障害」という固定観念を超え、新たな変身を遂げていきます。

このプロジェクトは単なるフォント制作にとどまらず、多様な価値観を持つ人々が出会い、共に創り、社会とのつながりを築いていく場となっています。障がいのある人々の表現をデザインとして昇華し、その価値を広く社会に伝えることで、多くの人が新たな気づきを得る。さらに、フォントとして商品や広告、空間デザインなどに活用されることで、障がいのある人々の収入向上や社会参加の機会も生まれています。

次に、シブヤフォントとご当地フォントの誕生から現在に至るまでの歩みを振り返り、その社会的インパクトについて詳しく紹介します。

#### ■障がいのある人々の表現の場の拡大と収入支援

・五六の障がい者支援事業所、四八七名の障がいのあるアーティストが制作に関与（シブヤフォント・ご当地フォント）

・制作されたフォント・パターンデータ数：二〇一八種（シブヤフォント・ご当地フォント）

・シブヤフォント・ご当地フォント採用商品・サービス二〇〇〇点以上

・シブヤフォント・ご当地フォント採用企業二三五社

・年間四〇〇〇六〇〇万円を福祉施設に支払（シブヤフォント）

#### ■デザイン教育の場としての進化

・桑沢デザイン研究所の正式な授業として開講

・学生にとつて企業との実践的なコラボレーションの機会を提供

#### ■国内外での評価と受賞歴

・シブヤフォントはデザイン界でも高く評価され、国内外の多くの賞を受賞している。

・二〇一九年 グッドデザイン賞

・二〇二〇年 東急グループ環境・社会貢献賞、AUDD国際デザイン賞（金賞）

・二〇二二年 ソーシャルプロダクツ・アワード（最高位大賞）

・二〇二三年 日本オープンイノベーション大賞（内閣府 選考委員会特別賞、読売福祉文化賞）

・二〇二三年 SDGs ジャパンスカラシップ岩佐賞、ゴールデンピン・デザイン賞（台湾）

・二〇二四年 グッドデザイン賞（二回目）、IFデザインアワード（ドイツ）

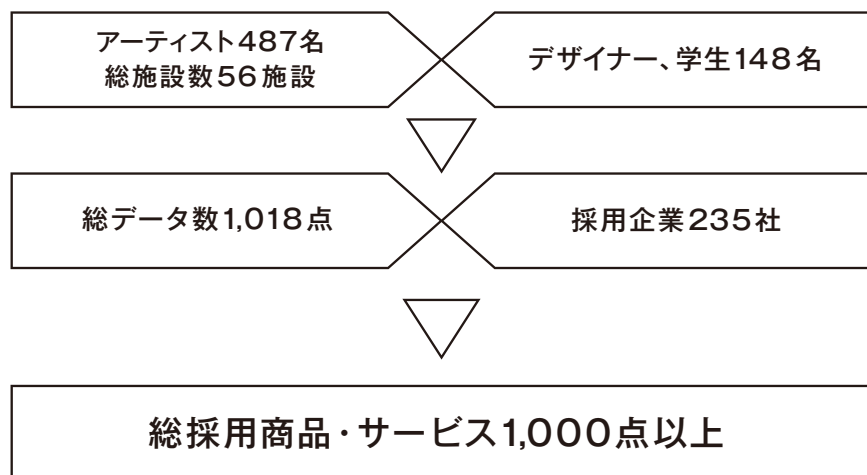


「シブヤフォント」公式ウェブサイト  
<https://shibuyafont.jp>



このプロジェクトを通じて、障がいのある人々の創作がより多くの人に届き、社会がより包摂的で多様性を受け入れるものになることを目指し、私たちはこれからも活動を続けていきます。シブヤフォントとご当地フォントの挑戦はまだ始まったばかりです。デザイナーの力を通じて、すべての人が自分らしく表現できる社会を目指し、私たちはこれからも歩み続けます。

## シブヤフォントとご当地フォントの社会的インパクト[総チーム数：22地区]



シブヤフォント・ご当地フォントの関係者と実績の数値(2025年4月時点)

さっぽろ  
ふぉんと

OTARU  
FONT

OTARU FONT



仙台ふぉんと

MITO FONT

水戸フォント

やまがた  
フォント

日の本  
フォント

川エドフォント

KOTO FONT

SHIBUYA FONT

SETAGAYA FONT

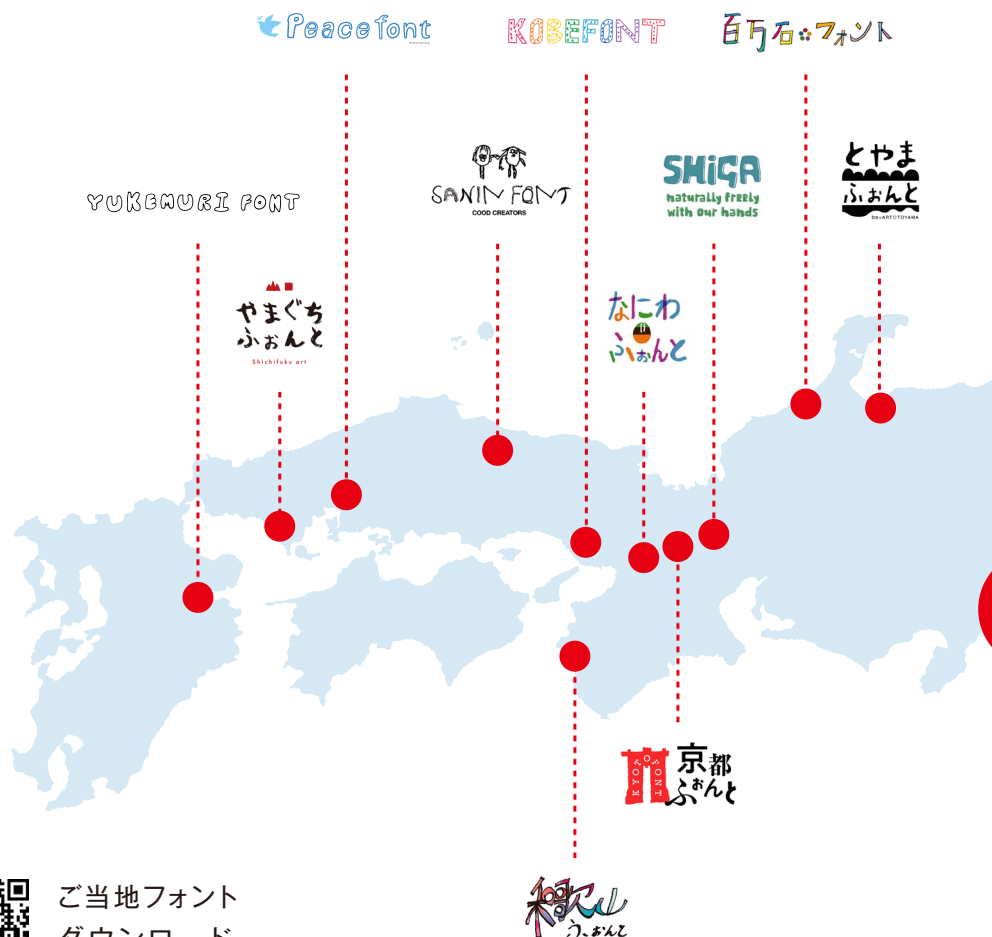
YOKOHAMA  
FONT



# GOTOUCHI FONT

Produced by  SHIBUYA FONT

2025年時点での広がり



ご当地フォント  
ダウンロード

[illegible]

# 2

福祉の  
関係人口  
について

## シブヤフォント・ご当地フォントが生み出す新たな関係人口

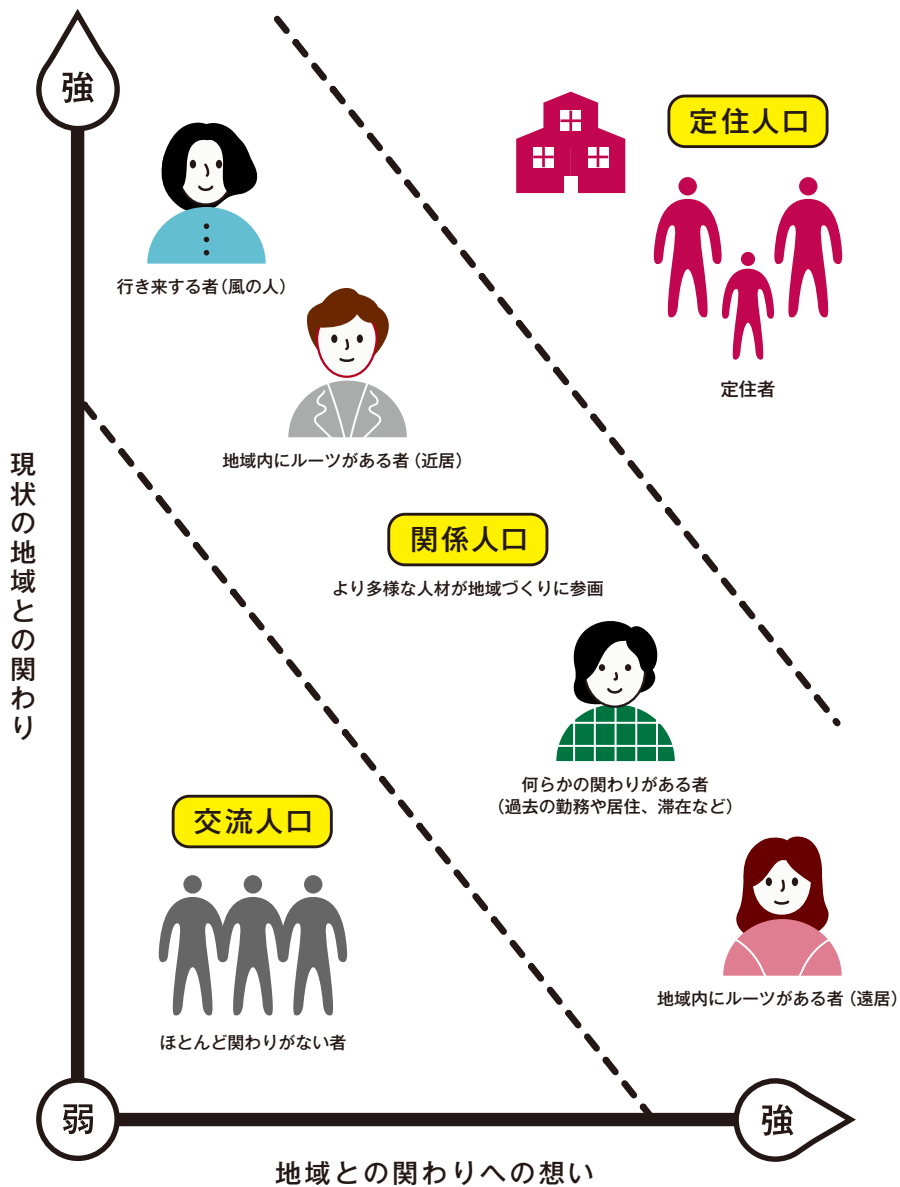
シブヤフォント・ご当地フォントは、障がいのある人のアートを社会に広げる革新的な取り組みとして、多くの関係人口を生み出してきた。この活動を通じて、障がいのある人と社会との「見えない壁」を取り払い、共生社会の実現を目指している。ここでは、その関係人口について紹介する。

## 社会に存在する「見えない壁」

私たちの社会には、障がいのある人との間に見えない壁がある。たとえば、障がい者支援事業所の設立のために物件を探すと、不動産のオーナーがネガティブな反応を示したり、事業所行きのバス停を設置しようとしたら、近隣住民から反対運動が起こるケースもある。差別は良くないとわかっていても、自分ごととなると感情的に反発してしまうのだ。

実際に、障がいのある人の関連施設の建設の二十五%が、地元住民から反対されるという調査結果があり、こうした事象は「施設コンフリクト」と言われている。この事象を研究する大阪公立大学の野村恭代准教授によると、「施設コンフリクト」の解消には『差別はダメと言ったり、障がいについての知識を増やしたりすることでは十分ではなく、実際に日常の中で接することで感情的に理解する機会をつくっていくこと。『良い関係性』を築くことをゴールにして、その機会を提供していくこと』が肝要だという。

障がいのある人と「良い関係性」を築くにはどうしたらいいのか。そこでキーワードとなるのが「関係人口」という言葉である。「関係人口」とは、移住した「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域や地域の人々と多様に関わる人々のことを指し、総務省が進める地方創生における評価指標のひとつとされている。これは、そのまま福祉にも当てはまるのではないかと考える。



地方創生における関係人口について

地方創生には、地方への移住を促し、その地域の定住人口の増大を目指す必要がある。とはいえ、都会生活者にとって地方移住はすぐに決断できるものではない。田植えの季節に地方に訪問して仕事を手伝い、少しずつ知り合いが増えれば、やがてその地方を好きになる可能性がある。このようにその地域に定住はしていないが、関わりを持つ人々のことを「関係人口」と呼び、そんな地域外の人材が地域づくりの担い手となることが期待されるというのが、総務省の考えだ。

関係人口は、定住人口を増やすためのものではない。交流を受け入れる地方の人にとっては、都会生活者との交流自体が楽しみであろうし、加えて都会生活者からの情報やアイデアは、ひよっとしたら、その地方を活性化する新たな取り組みにつながる可能性がある。

これを福祉に置き換えてみれば、「定住」は、たとえば障がい者支援事業所に就職することかもしれない。「交流」は障がいのある人の関連施設で作られたものを買ったたり、イベントに参加したりすることになるだろうか。では、福祉における関係人口はどのような人のことを言うのか？

## シブヤフォントによる関係人口の作り方

シブヤフォントは、障がいのある人と学生が共創し、アートワークによって障がいのある人の仕事を生み出す画期的な仕組みだ。障がいのある人が描いた文字や絵をオープンフォントとして社会に提供し、企業や団体に使ってもらうことで、渋谷を元気にするシティブロモーションとなっている。この障がいのある人のアートのデザインを担っている、桑沢デザイン研究所の学生たちは、福祉の「関係人口」と言えるのではないだろうか。

シブヤフォントのクリエイティブディレクターを務めるライラ・カセムは、学生に対して「まずは障がいのある人と仲良くなるう」と呼びかける。学生は障がい者支援事業所に行つて、障がいのある人の隣に座り、一緒に絵を描いたり、描いて欲しいことをリクエストしたりする。最初は戸惑っているが、徐々に「障がいのある人」を理解するのではなく、「その人自身」を理解しようとするようになる。これは、直接、交流しないと生まれ得ない感情だろう。





障がいのある人と学生との共創の様子

そもそも今の多くの子どもたちは、中学校から障がいのある人との交流が途絶えているのではないだろうか。そして、そのまま大人になり、近隣に障がい者支援事業所ができるともなれば、自らの数少ない経験や情報での固定観念で障がいのある人を判断し、「施設コンフリクト」の総論（差別ダメ）賛成、各論（身近に施設）反対になるのかもしれない。だから、シブヤフォントの取り組みによって障がいのある人との交流が生まれ、関係人口となっていくことが重要なのである。

## シブヤフォントのソーシャルインパクト

二〇二三年九月、十一万人が来場した「国際福祉機器展 & フォーラム」で、シブヤフォントの展示を行った。展示メインとなる全高四・五メートルの円形トラスの内側には、障がいのある人、学生、支援員、企業などシブヤフォントに関係するさまざまな人々の、シブヤフォントに対するコメントを展示した。

障がいのある人の「私はシブヤフォントのアーティ

ストです」というコメントは、あるイベントでの発言なのだが、シブヤフォントが彼のアイデンティティになっているのだろうということを感じさせる。

「毎回、施設に行くのが楽しみだった」とは学生の嬉しいコメントで、障がいのある人、施設、学生が、共に価値を享受していることを表すと同時に、本事業の持続維持において大切にすべきこととして肝に銘じる必要があるだろう。

支援員のコメント「学生さんはひとりひとりの隣に行き、絵を通して皆さんの話を聞き取ろうと、向き合ってくれました」は、障がいのある人との交流のみならず、誰にとっても、そして地域共生社会の実現のための素晴らしい示唆を私たちに提示してくれている。

企業のコメント「『新しいチカラ』を生んでいる」は、社会貢献を超えた共感と共創につながる新たな企業との関係性を示唆している。

学生は「一口に障がい者と言っても、バラバラなんだね」ということをシブヤフォントを通して体感する。

このことは、学生の人生にとっても、そして社会全体にとっても、非常に大切なことなのではないだろうか。

シブヤフォントは、学生との連携、商品化の広がりや評価をいただくことが多いが、こうした内発的発展が、障がい者、学生のみならず、多様な関係者たちにももたらされ、関係人口の広がりに繋がっていることが、シブヤフォントのソーシャルインパクトだろう。

## ご当地フォントで全国規模の ソーシャルムーブメントに

シブヤフォントがプロデュースする「ご当地フォント」事業は、今や全国二十二地区に広がっている。二〇二二年度に生まれた「とやまふぉんと」は県内デザイン賞を受賞し、しっかりと地域に浸透しつつある好事例だ。

シブヤフォントによる関係人口の創出アプローチが、ご当地フォントに参加するそれぞれのチームに展



「国際福祉機器展 & フォーラム」での、シブヤフォントの展示

開されることにより、全国規模で関係人口が増えていくことだろう。こうして障がいのある人との直接の交流が広がれば、冒頭で述べた「施設コンフリクト」もやがて日本社会からなくなっていくのではないだろうか。

そしてさらに、シブヤフォントとフクフクプラスグループが運営する「対話型アート鑑賞」、「アートレנטアル」のご当地化も構想、一部実装されている。「ご当地アートファシリ」は、全国の障がいのある人のアートの鑑賞会を運営するファシリテーターを育成する。「ご当地アートレנטアル」は、全国の障がいのある人のアートを、その地区の企業に飾る。これらを順次、ご当地フォントを進めるチームと連携して、関係人口を作り出す事業を重層化し、きめ細かく交流機会を創出するソーシャルムーブメントを広げていきたい。



# 障がい者支援 事業所と アーティストたち

## 11事業所

くるえびす  
ストライドクラブ  
TENTONE  
はとびあ原宿  
福祉作業所おかし屋  
はれっと / 工房はれっと  
福祉作業所ふれんど  
ホープ就労支援センター渋谷  
アトリエ福花  
むつみ工房  
のぞみ作業所  
ワークまきはた  
ワークセンターひかわ

170人

和弘、瀧田 和、飯沢、寛さん、  
柳川健雄、本田真実、堀口さん、  
仁、堀宮かれん、富山律美、日山  
内田舞之、藤吉知雄、渡邊裕希、  
中島こ、中村如雄、中村裕純、  
藤、大崎、大、村上明子、村  
田、青嶋、山、藤山紀久、川部  
石川さん、石井 広和、菅原一紀、  
塚子、森千奈美、藤田理太、小暮  
小松久子、廣田陽子、菅井さん、  
利、寺本光孝、寺原佑里、市倉  
山口さん、佐藤美来、佐藤彩夏、  
敬至、根本裕一、黒木あゆみ、  
幸、向井雅佑、光孝さん、五十  
子、五十嵐成美、戸部裕光、  
藤、金子正子、京子さん、宮沢  
宮川尊子、前野 翠々子、河合  
加藤直弥、加古博、橋谷勝里、  
一ノ宮 剛大、磯崎功、井上  
山口あや、堂田なつき、ワタル、  
りんご太郎、りゅう、りき、やま  
やすひろさん、もとさん、もう、  
みずき、ミサゴ、みおさん、  
、マツキキ、まいさん、ヒロ、  
はや、ハナカ、のぞみさん、  
、つばき、ふたろう、タロー、  
あか、そけい、しずし、  
、かきもち、コダ、こういち、  
、くにおさん、キヨミ、きょうこ、  
、ニリック、うさださん、ウイ  
の久太郎、いく子さん、あや  
ハムダス、あつくん、あず  
ユコ、あうんさん、あいへん  
130、あい、Yousaku、  
Y.Y.S.Y.O.Y.M、  
creative team、  
Tsuyoshi、TAKA、  
SAYUSTYLE白瀬、  
KAZUHIRO、S.W、  
asa7763、ryutarou、  
ect creative team、  
jeet MUMU、Mirai、  
、Micky、Michiko  
a、M.W、M.K.T.I、  
、LOTUS、Kenya  
KAZ、Julienne、  
K、fucca、Fruits、  
ch friend、Erica、  
、Coloring Time、  
ve team、Chisato、  
team Mura、Ayaka、  
o Murakami、AB、  
A.M、

## シブヤフونت アートディレクター ライラ・カセム

協働するには  
立場問わず遠慮なく  
言い合える関係が  
重要だからこそ  
造形を通してが必須。

言葉ではなく、  
筆やペンを通して  
対話を行ったり  
しながら、デザインの  
元となるアートを  
共に制作しています。

障がいがあると、  
「障がい」という  
印象が先にきてしまう。  
だから何かを  
一緒にしながら  
つながらないと  
その概念は  
永遠に崩れない。

メンバーさんと  
施設と深い  
関係になったからこそ、  
意味と意義のある  
デザインにつながる。

障がいのある人も  
施設のスタッフも  
デザイナーも  
同じ熱量で  
関わらないと  
そもそもやってみる  
意味がない。

人任せにしない、  
それがシブヤフونت。

アートはその人の  
できることを拡張する。  
デザインはそれを  
羽ばたかせてくれる。

施設、メンバー、学生  
それぞれできることで  
関わり学び合える  
仕組みをつくることが  
第一優先。

## KUYA HAYATA KUYA HAYATA 芸桑沢デザイン研究所

63人

岡崎 通香  
孫 丹堂  
西崎 萌花  
吉田 奈々海  
平井 大楓  
橋 岳壽  
WU YUHUAN  
馬瀬 日向子  
岩崎 芽衣  
岩崎 那海  
内田 結那  
吉崎 ひかり  
小嶋 陽奈  
齊藤 さくら  
廣 吉輝  
児玉 彩音  
蔡 佩欣  
小林 大真  
大熊 芹菜  
伴野 由布子  
井上 智絵  
上原 優紀  
小池 彩果  
小池 あゆみ  
小林 夏芽  
末永 岬  
十倉 聖紀子  
吉岡 風美  
吉野 美瑠紀  
秋本 奈美  
岩間 美空  
加藤 唯菜  
佐藤 結里  
寶藤 桜  
寶藤 小宵  
穴倉 花也野  
藤倉 千裕  
福田 綾子  
山口 涼風  
水野 藍子  
水野 弘子  
和田 美月  
栗林 里沙  
手塚 朋子  
真島 萌  
新 貝羽  
田中 西里  
橋本 葵  
平林 麻衣  
西塚 音緒  
永田 河  
横山 みのり  
横山 悠子  
北川 純  
松田 竜太  
西 優紀美  
山千代 航  
齊藤 智徳  
眞木 尚未  
後藤 和樹  
白田 翔  
永田 健人

## 共創 障がい者×学生



支援員も学生と協力しながら  
制作を進める

## 学

アーティストに完成した  
パターンを見せた時  
喜んでくれた。

自分の世界観を  
広げる体験だった。

授業は前期で  
終わっちゃうけど、  
障害のある人って  
世の中になくさん  
いるので、関わりは  
全然終わっていない。  
継続していく感じ。

障がいの方だから  
遠慮していたが、  
ちゃんと伝わった。

自分が  
向き合おうとしたら  
分かり合えた。

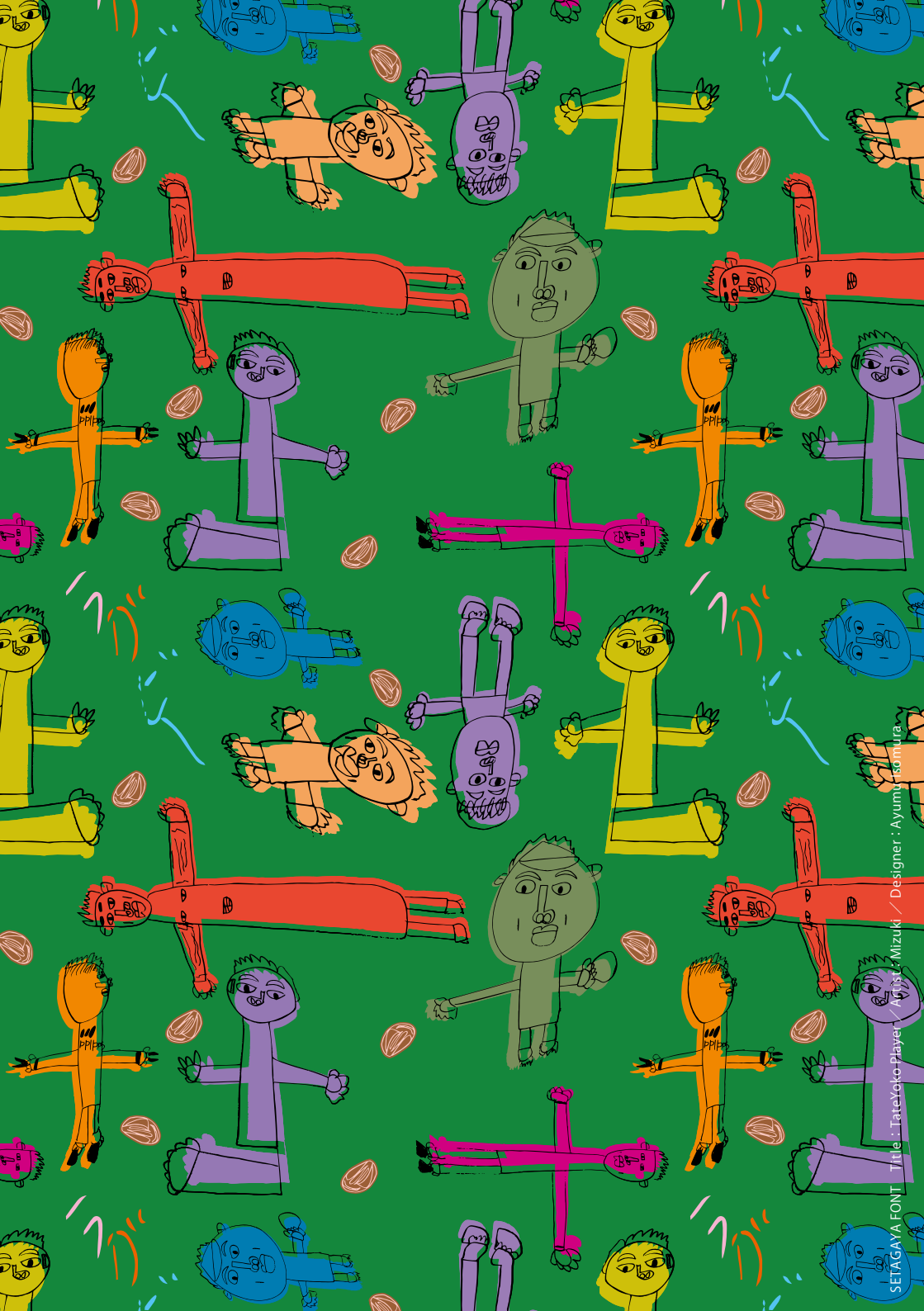
人としての  
コミュニケーション  
の部分が大半で、  
絵はプラスで  
ついてくる感じ。  
人としての  
コミュニケーション  
の一部に  
アートがあった。

毎回、施設に行くと  
のが楽しかった

アーティストも  
そうですが、  
親御さんにも  
喜んでいただける  
うれしい。

学校内では  
得られない  
経験だった。

シブヤフونتに参加した学生





# 第三章

## へんしんの支え方





# 1

## デザインの現場から

ライラ・カセム

## ゆるやかにまぜて広げるコラボレーション

障がいのある人の絵を、一点もののアート作品として扱うのではなく、グラフィックの素材として絵柄を扱い、それをデザイナーとして現場の人々と共に新たな表現にすることに取り組んできたライラ・カセム。二〇一七年より、シブヤフォント・ご当地フォントのクリエイティブの現場をリードしてきたライラから、これからご当地フォントを運営していかうと思っている全国各地の法人・団体やデザイナーの皆さんに向け、障害福祉の現場でのコラボレーションのポイントを紹介する。

## そもそもプロジェクトの意義はどこにあるのか？

「互いが納得いく解決策を探りなさい」。いつも親にはそう言われて育ってきた。日本という異国に住み、互いの立場を理解し調整し合う多文化多人種のカセム家ならではの教訓かもしれない。

特に母が英字新聞の美術記者だったこともあり、障がい者支援事業所（以降、施設）でのアートや創作活動は小さい頃から知っていたし、参加もしていた。高校生になった時にイギリスに戻り母はインクルーシブデザインの先駆者として活躍していて、彼女のワークショップやプロジェクトの手伝いもしていた。だからデザイン社会とコミュニティのためのものだ当たり前に思っていた。

大人になりデザインの道に進むと決めて以来、子供の頃とは違った着眼点でその見慣れた現場を見返し始める。なんでこの現場が「世の中」とつながっていないのか疑問で仕方なかった。もつといえは母に取材で引き摺り回されていた美術館でみる何百年前の名作よりも近所の施設でできている何気ない表現の方が私は一〇〇倍好きだし、そこにいるみんなもどんな人たちよりリアルだと思っていた。だからこそなんでもつと世の中に普及しないのかと思った。

二〇一〇年に大学院で日本に戻って以来、その真相を解明しながら何かできないかを模索し続けていた。

毎週施設に出向き、創作活動をお手伝いしながらデザインの活用方法を研究していた。おかげさまで障がい者福祉の現場や一緒に活動する団体みなさんにも周知していただき、卒業後は大学の研究室で働きながらこつこつと活動を広げていた。

数えきれないほどのワークショップも企画者・参加者ともに経験した。そのたびに思う。ワークショップが終わったあと、この現場はどうなってしまうのだろう？ 私たちが現場を搾取していないか？ 本当に何か変化を起こせたのか？ 打ち上げ花火で終わっていないか？ と考え込んでしまう。

そして現場のみんなはいつも、「デザイナーさん？ すごいですね」と讃えてくれる。すごいのは現場の方なのに。敬意からなのかもしれないが、自分たちなんて……という後ろめたさを感じさせる現場にいつも違和感を持っていた。

デザイナーの中にも、人を助けるために一〇〇パーセ

ント善意でやっている人はあまりいない。常に何かを作りたいくて、新たな表現を追求するために発見と刺激を求める生物。むしろそちらの方が優先順位は高いこともある。グラフィックデザインに関しては、相手が伝えたいメッセージや魅力的な素質を汲み取り、それにあった表現を生み出しつくる。そのために美的インプットは欠かせないし常に分析することも忘れない。だからこそグラフィックは、より人の話を聞き、本心を探ってそれを理性と感性で感じ取れる視覚言語として世の中に送り出すべきではないかと思っている。

でも現実には、グラフィックデザインは資本社会におけるビジュアル製造機のようなもので、近年のテクノロジーの進化もあり、「とりあえずババっとこんなやつて」と、本来の高度な技の極みを知られることはあまりない。そして自動生成デザインが力を増す今、社会におけるグラフィックやデザインの重要性も問われている。

また、多様性を重視する時代になりつつもデザイン現場や教育の現場はまだ十年、いや五十年前とあまり

変わらない。バリアフリーやインクルーシブを謳っていても、当事者とデザインが関わる機会はまだ少ないし当事者のデザイナーも少ない。だからこそ、誰ひとり取り残さないインクルーシブな手法を取り入れた協働デザインの必要性を感じていたし、むしろそれをしてないと文明の終わりになるのではないかと思うほどの危機感を勝手に自分で妄想していた。

そう思っていた最中だった。「ライラさん、来年度からシブヤフォントというプロジェクトをやるのですが、その制作現場を仕切ってくれませんか?」。二〇一六年冬、同じ展覧会に参加していた現・シブヤフォント共同代表の磯村さんに聞かれた。めずらしく直感で「はい、お願いします!」と答えた。何かが動き始める予感がした。

## プロジェクトの軸を探る

まずは徹底的にリサーチして何がプロジェクトの軸かを探ることが大事だと感じた。過去のプロジェクトの事例、現在のコラボする現場など。

軸とは目的ではない。それは別にある。軸とはプロジェクトが思わぬ展開などに突入する時にプロジェクトの全体的な方向性がブレないための大黒柱のような理念に近いもの。

プロジェクトの出発地点はいつも疑問で始まる。私の場合、なぜ障がい者支援事業所の現場でプロジェクトやワークショップは長続きしないのか? 言い換えれば、なぜプロジェクトやワークショップは「打ち上げ花火」で終わってしまうのか? どうやったら持続的に続けていけるものになるのか?

ワークショップや期間が限られているプロジェクトは「〇〇を一緒につくる」というゴールが参加者にある。一〇〇メートルを走るように短時間で全力で駆け抜ける。だからこそゴールにたどり着いた時の達成感と高揚感はすごい。そしてそれを一回味わうとまたやりたくなる。でも考えてみれば一〇〇メートルトラックはそのまま、もしかしたら少し乱れているかもしれない。そしていつもの見なれた運動場の光景に戻る。



今まで訪問した施設や団体関係者は「みんなやりたいことだけやって帰るんだよね」と、よく口を揃えて言った。結局プロジェクト期間が終わったからおしまい、現場はいつもの日常に戻って何も変わらない。この根本を変えないといけないと思った。

渋谷みやげプロジェクトの概要を聞いた時にタイムリミットは三年だろうと思った。このようなプロジェクトはだいたいそうだ。なので三年でシブヤフォントプロジェクトはある程度の成果・実績と可能性を出さなければいけない。プロジェクトを持続的に続けるために不可欠となるのは施設の原動力。やらされているのではなく、自らの行動から、このプロジェクトの成果は実現できていると実感させること。つまり施設（支援員とメンバー両方）が受信者（receiver）ではなく発信者（initiator）になること。これをまず第一の軸にすることにした。自分たちは社会で必要とされていることをシブヤフォントを通して存分に発信してほしいと思った。

一〇〇メートル走の話に戻ると、シブヤフォントでは

施設の皆さんと一緒に一〇〇メートルを走ることは決まっていた。でも大事なはその一〇〇メートルをどう楽しく、達成感を持ってその施設らしく走るか？ もう一回走ってみたいと思えるようにするか？ また、いろんな人に走る楽しさを伝えたい、などと新たな一歩を踏み出そうと思えるようにできるか？ そついう意味で施設が自らの現場とそこにいる人々の可能性を実感し主体性を持つて社会と繋がれること。それが今回のプロジェクトの軸。現場の支援スタッフやメンバーが未来に希望を持ってプロジェクトの原動力となればプロジェクトは打ち上げ花火で終わらないと確信した。各施設のメンバーの活動の幅を広げ、支援スタッフの主体性・自発性と団結力を高めることがこのプロジェクトの持続の秘訣だと思った。

またデザイナーと施設が対等な立場でプロジェクトに参加し協力し合うこともプロジェクトを続ける上で不可欠だと思った。どちらかに重きが置かれると続かない。ちょうどいい度合いで刺激し合う存在であることが協働プロジェクトには必要で、本当の意味でのインクルーシブなプロジェクトとも思った。

## 現場の徹底的なリサーチと表現の創出

インクルーシブの鉄則ともいえるアプローチ。それは現場の入念なリサーチとデザイン的問い（Design Question）をつくること。プロジェクトデザインは特に活用できるリソース（人材・資源）は何かを見極めてゴールへの順路を構築していく。なのでまずは現場、当時参加予定だった六つの施設をじっくり訪問することにした。

現場では「困ったことはなんですか？」と聞かないようにしている。自分も障がい当事者として、デザインプロジェクトにおいてユーザーとして必ず聞かれていた質問で、正直答え方に困る。というのも自分は「困難」や「バリア」というものに立ち向かっているという意識はないからだ。その場その時にどうするかを考えて経験のストックをためていく。これは今まで見て来た支援の現場でも一緒のように感じた。理屈だけでなく感覚で解決するものもある。だから現場の人に聞いても明確に答えにくいかもしれないと思った。私は

まず、現場を観察する。スタッフに現場の一日の流れや普段していることを聞いたりして、じっくり創作の時間を見る。また、自分はここが面白いとしつかり言葉にして支援員や利用者に伝える。そこから課題はこんなところにあたりしますか？ などとこつちから聞くようにしている。現場のリサーチは、それぞれの現場の温度と雰囲気に合わせて言葉を変えるなどして、アンケート調査ではなく、インタビュや対話のようにすることを心がけた。

現場のリサーチから、以下のデザインの問いを立てた。  
「バラバラな現場をどのように団結し持続性のあるプロジェクトを作るか？」

というのも、参加施設の事業形態や造形活動の経験などは、皆バラバラだったからだ。ものづくりや創作に特化した施設もあればそうでない施設もある。でも、皆に共通したことがあった。それは支援員のメンバーの活動の範囲や可能性を拡張したいという強い思い。



成果物に一貫性を持たせるのは難しいけれど、みんなの思いは一貫している。なので持続性をもたらすためにも支援員をプロジェクトのキープレーヤーとして進めるというのではないかと思った。

メンバーの可能性を引き出すのはもちろん、メンバーを職員との対話の中心にし、支援員の自信と活力にも繋がられたらいいなという裏の狙い。私も現時点で五十カ所以上の施設を回ってきて、メンバーが元気な施設では職員も元気というより、職員が元気な施設ではメンバーも元気であることが多い。だから支援員の皆ともフラッシュに話し、仲良くなることも徹底した。

造形活動に関しては、変にアートを目指すことに重きを置かなかった。むしろメンバーの興味や得意とする行動などをもとに広げていった。それぞれの好きなものや興味のあるものをデザインに持っていけば、次への挑戦意欲も高まるだろうし、支援員も変にアートを意識しすぎないで活動できると思ったのだ。

まず、メンバーそれぞれの表現、「らしさ」を引き出すためにひとりひとりの創作風景を見た。もちろんシブヤフォントではテーマ性のあるモチーフを描くこともある。特に初年度は渋谷をテーマにして、様々な媒体向けにパターン化する必要があった。ただそれを全施設に強制はしなかった。経験も違つし無理矢理やらせている感じがあると、それは結果的にデザインにも表れてしまう。大事なものは現場から生まれる、メンバーの何気ない表現、それこそが渋谷の価値になること。

だから職員にもひとつお願いした。「本人の意思を尊重し、本人より先に表現を誘導しないでください」と。花の絵を描いていたとしたら、茎は別に青でも紫でもいい。アートの正しさは無用で、楽しいもので表現する人の新たな側面も見えてくる。

## 成功体験の演出

施設の造形活動支援などは、大学院時代からの専門領域だったため、メンバーの興味や造形特性を活かし



パターンやフォントへと転換していくことはできると確信した。ただしパターンやフォントを活用した渋谷みやげのプロトタイプは年度末に作らなければいけないことは決まっていた。翌年の活用商品のラインナップやコラボレーションの機会を得るため、どのようなものができるかを見せる事例が必要だったのだ。経験がバラバラな施設の皆さんにプロトタイプを作ってもらうとなると品質を揃えるのも至難の業。そこでテクノロジーの力を使い、Fab Cafe Tokyo / Loft workに協力してもらい、レーザーカッターやUVプリンターを活用してプロトタイプを作ることにした。目の前でメンバーたちと作ったパターンやフォントが別の形態に変身していくのを見れば、施設の皆さんも自分たちの現場の秘めた可能性に気づき、これでもできるだろうという希望が持てる気がした。

「SHIBUYA To Go」という生活で活用できるグッズをテーマにし、それぞれの施設で学生チームで作ったパターンやフォントに自主製品などを活用したプロダクトラインを展開することにした。しかし、こういう

ことはダラダラやっても仕方ない。即決力と団結力を高めるため、「SHIBUYA To Go 四十八時間デザインチャレンジ」を開催した。

名前の通り、学生と施設のチームで四十八時間（二日間）かけて、メンバーの作ったパターンとフォントを活用したブランドと商品ラインナップを三つ発表するという内容で、現実性にとらわれず、まずはやってみたいと思うものを存分にやってもらうことにした。

結果はすごかった。職員も積極的に関わり、学生と二人三脚で仕上げたのは高いクオリティのものばかり。施設の自主製品のスリッパのパターンを応用したり、全く新しい商品を作ったり。施設の職員の反応も好感触だった。

プロトタイプができたことで関係者みんなのパターンやフォントの活用イメージがふくらみ、次年度の商品への活用に結びつく道ができた。







「SHIBUYA To Go 48時間デザインチャレンジ」で制作したプロトタイプ

二〇一八年には渋谷ヒカリエにポップアップショップができ、施設のスタッフが施設や障害福祉の販売会以外で、自分たちの商品の実力や可能性も実感することできた。そしてなにより施設のメンバーさんが一歩踏み出せる社会的交流の場も増えた。

## 振り返って、「こうしん」することで 予測もしなかった相乗効果が生まれる

関わり始めの年から必ず続けていることがある。それは施設での年度末の訪問レビュー。その年の制作はどうだったか？ よくできたと思うことと、思うようにいかなかったことをそれぞれの観点から話し合う。会話は常にメンバー中心で、作品のうまいかうまくないかではなく、今年はそのメンバーにとってどうだったかを話すようにしている。

そして来年やってみたいことのイメージを擦り合わせる。常にアップデートの「更新 (update)」とまた施設にメンバーが新たな一歩を踏み出せる「行進 (initiate)」

を考えどんなものを「発信 (communicate)」してみたいかを考える。

メンバーの造形活動以外での変化もあった。コミュニケーション力が上がったとか、新しいことにチャレンジしているなど日常的な福祉 (welfare) での変化も見られた。また、隣に座っているメンバーがシブヤフォントに参加していたから自分もやってみたい、〇〇さんが採用されたから自分もやってみたいというメンバーもいて、数年経つと「もうこのメンバーはいっぱい使われているので、他のメンバーにも機会を与えたい」という施設が増えてきた。

四年目までは学生が採用したいメンバーのアートワークを選んだりしていた。というのも施設の造形活動 (アート) の経験はバラバラで、シブヤフォントを通して造形活動のメンバーらしき、施設らしさを把握しようとしていたため、まずは学生がコラボしたいメンバーを選ぶようにするのがほとんどだった。しかし数年経っているとその選択に偏りが生まれてきた。私もその偏りに気づいていたが、施設に負担を与えたく



ない気持ちもあり、施設が「変えたい」「違うことをやってみたい」と言う時を待っていた。皆にシブヤフォンをやらされているという感覚を持ってほしくなかった。現場で生まれる誘発的な瞬間を次に繋げたいと思った。つまり、主体性と自発性というプロジェクトの軸をブレさせたくなかった。

## 何も言わないと何も変わらない

プロジェクト開始から数年でパターンやフォントも順調に増え、参加施設も十一施設になった（二〇二四年現在）。そして二〇二二年に桑沢デザイン研究所で、シブヤフォントの学生との協働制作の取り組みが、ソーシャルデザインプロジェクトという選択科目の正式授業となった。国内外の賞も数多く受賞。順風満帆？

いや、気がかりなことはまだいくつあった。毎年シブヤフォントの次年度に向けて年度末に施設を回り、前回の年度を振り返って制作や最終デザインについて施設に聞き取り、レビューをしているなかで支援員の気になる一言があった。

「このデザインはちょっとやりすぎだと思います」

「じゃあそう言えばよかったじゃないですか。何がいかよくないか、言わなければデザイナーも何をやっていいかわかりませんよ」

ちょっと言い過ぎたかなとも思ったが、これらデザインは施設を象徴する重要な資源でもある。だからこそはつきり言う権利はあると思う。なぜならデザイナーは逆境に燃える民族。逆に言ってもらった方がデザイナーも助かる。何がほしくて何がほしくないかどんどん言うていきましようともフォローした。

これでようやく、「デザイナーは全ての答えを持っていく」「デザイナーは正しい」という現場の支援員の固定観念が崩れた気がした。デザインは共に積み上げていったものの結晶という感覚がみんなに芽生え始めた気がした。





上：ライラ・カセム

## 学生たちとの関わり

### 一歩引いて率先し合う関係性をつくる

プロジェクトが始まって数年。

施設から素材をもらってデザインするという一方通行ではなく。対等な立場で制作してほしかった。ジャズでいえばセッションをしてほしい。ようやく施設もできるという実感や、やってみたいという向上心も芽生えて、それぞれの施設のスタイルも出てきた。

また、シブヤフォントとしてもパターンやフォントが企業などの様々な商品や媒体で採用され始めた。使ってくださる皆様も色を変えたり切り抜いてデータを編集し使っていたことで、こういう作品がどんなふうに使われるかもイメージできるようになった。

今までは、現場に一緒にいる時にはアドバイスやサジェスションはしていた。でも、それがいつも、これからもずっとできるとは限らない。

学生たちは数年間ボランティアでシブヤフォントに参加していたが、二〇二二年に桑沢デザイン研究所の正式授業となった。そこで、今までのワークショップ的プロジェクトからプロジェクト的授業へと、シブヤフォントの制作プロセスを十五回の授業として構築していく必要があった。

以前は学生にポートフォリオを送ってもらい、ヒアリングをもとに私がいいだろうと思う施設とマッチングしていた。しかし、授業となるとそれができない。また今までは学生がそれぞれの空いた時間に施設へ行っていたので私も同行して的確なアドバイスもできた。しかし、授業となるとそれができない。毎週決まった日と時間に実行することになる。

もうここは一歩制作現場から身をひいて学生と施設を信じるしかない。ディレクションでいけば大事なものは結果をコントロールしすぎないこと。制作者が結果に辿り着けるように見守りながらフォローして自主性を尊重すること。





施設が自分たちの施設の特徴やシブヤフォントの制作でやりたいテーマなどをプレゼンする

授業を作るなかでこの数年を振り返っていた時、自分がひとつの失敗をしていたことに気づいた。それはアートワークというデザインの題材をどう作るかに少し重きを置きすぎていたこと。学生はどこから作品に手をつけていいかわからないことが多い。参加学生は、一年生などパソコンを使い慣れていない学生も多い。だから、どのアートワークを選択するか判断基準は自身の技量を基にしていた。つまり「上手」なメンバーの絵が選ばれる。これでは本当に施設にとって、メンバーにとってフェアとは言えない。

施設もだんだん自分たちのできること、できないことがわかってきたし、何よりやってみたいこと、やりたくないこともわかってきた。ということで施設にひとつのリクエストを与えた。学生たちに対して「自分たちの施設の魅力と願望を売り込んでください」と。

毎年恒例の施設訪問・レビューで、学生にプレゼンするテーマは、新たに各施設で設定することにした。テーマは、それぞれのアート制作でチャレンジしたい

ことやどんな商品や媒体にデザインを活用したいか、デザインはどんなスタイルに挑戦したいかなどを、より具体的に課題として設定する。

たとえば、今までイラストだけしか使われていないのであえて絵を使わず抽象画や端材を使う。施設の自主製品のパッケージに使えるパターンやフォントを作るなど。また、「チャレンジ」といって、施設で今まで使われていないメンバーのアートワークを絶対に使ってほしいものとして必ず設定している。

初回の正式授業はシブヤフォントのオフィスで開催。各施設支援員とメンバーが、各施設のプレゼンをする。そこから学生はコラボしてみたい施設を三つ選ぶ。そして私とスタッフ、時には区役所スタッフも加わって、その場で学生の選択理由を基に決める。

毎月行うシブヤフォントの定例会では学生間でどの施設と制作したいかの選択が多かったか、少なかったかもきちんと施設に発表する。そうすることで、「よし、

じゃあもつと学生に伝えなければ！」となる。学生がデザインの制作で迷っていたら、アートワーク（素材）を無理やりパターンなどにしてない？ もう一回○○さんがどんな人か思い出してみて、ともよく言う。

近年シブヤフォントのデザインのクオリティーはグッと上がった気がする。年数が経ち施設に対して自主的に何が欲しいかを具体的に伝えられるようになったことと、教師という立場になり、学生たちとの距離もより縮まり言いやすいことも増えた。二〇二四年からはデザインの制作を（※）桑沢で初めて実施できるようにになり、友人のデザイナーに外部講師になってもらったりと、学生もより多くの学びの機会ができていく気もする。

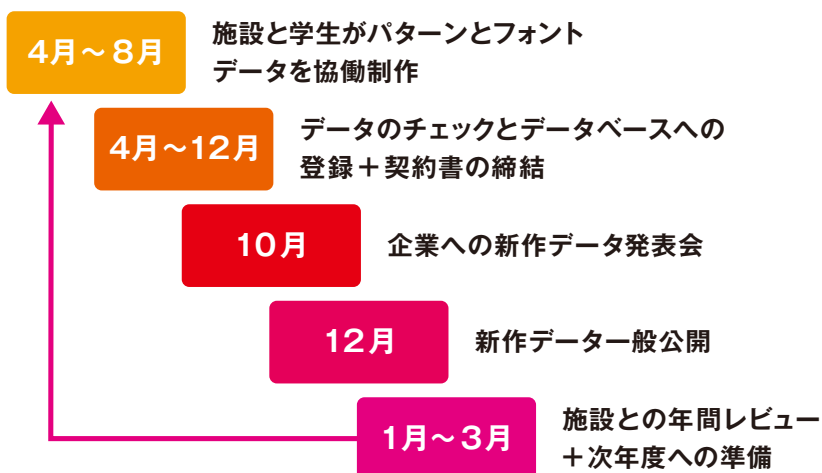
施設同士の横の繋がりも広がり、知見をシェアする動きも出ている。企業への採用事例を見て、「あの施設のデザイン採用されたんだ。うちも頑張らないとな」と、みんなのやる気に火がつき、健全なライバル心も施設間に生まれた。

※今まではシブヤフォントのオフィスや各自オンラインで制作などしていた。



学生と参加事業所メンバーの皆さんとの協働制作の様子

## シブヤフォントの年間スケジュール



## 外部の評価をしっかりと吸収する

シブヤフォントでは、発表の機会を作ることでも大事にしている。学生にも施設にも、自分たちの制作したものが外の世界（一般社会、ビジネスなどの世界）でどう見られ、どう評価されるかを知る機会がとても少ないからだ。

企業発表会は、プロジェクト開始当初から毎年しぶとく行っている。今ではシブヤフォント参加者にとつて、毎年の名物イベントとなった。ファッション、スポーツなど様々な領域から、シブヤフォントを使いたいと思う企業が集い、学生と施設のチームがプロセスを含め共に作ったデザインとその可能性をプレゼンしていく。「参加賞」や「がんばった賞」はなく、ひとつの施設に複数の企業賞の授与があり、受賞しない施設も時にはある。

優しくしすぎることが進歩を止めることもある。だからこそ、このような形式にしている。他者と自らを比較し、外部からの評価を受けることで、自分たちの

長所と短所がわかり、現時点での実力がどんなレベルなのかを実感できる。施設は「来年こそはこういう企業に採用してもらいたい！」と前を向き、学生も自分はどうなデザイナーなのかかわかり、未来を不安ではなくポジティブな視点で見られるようになる。

企業も新たなデザイン表現に出会うことになるのだが、興味深いのは、企業の評価の基準はデザインの技術というより、制作プロセスやデザインそのもののストーリー性にあること。プロセスは力なり、と感じる。そして人を信じ繋げることが継続の秘訣でもあるのだと思う。

## パターン・フォントをつくる「ゴールではなく、出発点」

シブヤフォントが始まって八年弱。パターンやフォントを作ることがゴールではなく、むしろこれから社会に繋がるための通過点であるとわかってきた。

パターンとフォントデータを編集できること＝使用者から新たな使われ方が作者に戻っていく。ただ「障がいがある人と作ったものです、障がいのある人すごい」という一方通行よりも、これが健全で対等な立場でのコラボとクリエイティブの循環ではないか？

シブヤフォントラボという現場ができたことで、自分たちのデザインをどうやって活用し、コミュニティと繋がるかを参加施設の皆は模索している。その意味での通過点なんだと思う。

アートという表現の役割のひとつは、見る人や社会の感覚を刺激し、みんなが自ら問いを立てるのを手伝うことだと思う。そういう意味で、シブヤフォントでの協働デザイン、特にアートワーク（造形活動）のプロセスは、「福祉とは何か？」「福祉という概念は人にとってなぜ必要なのか？」を現場の人々、親御さん、コミュニティの人々、そして社会全般に実感させるためにあると思う。そこにデザインが入ることで、より多くの媒体に反映することで社会に建設的に広がる。

デザイナーにとっては、デザインの素質はなんなのかを自主的に問わせること。デザインが本職の人間がこんなことをいってはいけなかもしれないが、プロジェクトをデザインする上で造形的・機能的結果が一番大事ではなく、優先順位としては、まずどのように関わるプレイヤーみんなの心が動くかを考えプロセスを設計すること。そうすれば自然とデザイン的な解決策が見えてくる。なぜなら、デザイナーはもともとビジュアルで物事を考える性質があるのだからその帳尻合わせができる。大事なのは、戦略的に考えながらもそのデザインを必要としている現場の人々をどうやってその制作過程に巻き込み、必要とされる人材とするか、なのだ。だから、プロジェクトを進めている皆さんには、「制作物」という目的に囚われすぎず、目の前の人の瞳の中を見ることを私はお勧めする。曲がり道や回り道になってしまつけれども、やっていることの本质と意義が見えてくるはずだから。

私は、このプロジェクトの全ての流れを前もって見極め、ロジカルに戦略的に組み立ててきたように見えるかもしれないが、実際はそうではない。常に次の一步を考

え、その一步を進む最中に次の一步、二歩を考えるようにしている。一步進んだ後に考えてしまうと、やり直しができなかったり、プロジェクトの運営の面でもまとまりがつかなくなってしまうたりするからだ。そのため、常にプロセスを分解し、比例と分析を繰り返してどうしたら参加する人、運営する人皆にとってもっと良い結果と経験を作ることができるかを考え実行する。

このプロジェクトの機動力の基盤はなにか。それは「愛」。皆が愛を持っていなければできない。施設はメンバーの魅力をもっと引き出したい、魅せたいという愛。メンバーももっとうまくなりたい、もっと楽しみたい、そして皆に見てほしい、魅せたいといった作品や身の回りの人や自分への「愛」。学生は施設とメンバーの魅力を伝えることのできる最高のデザインを届けたという愛。そしてデザインのディレクションをし、制作プロセスを組み立てる私も、参加している皆がもっと自らの可能性を実感し、広げていってほしいという愛を機動力にしている。そしてその愛を具現化し他者にも伝わる魅力的な媒体として社会に届けること。そ

れがシブヤフォントの仕事だと思つ。そういう意味で、このような他者連携のプロジェクトを始める際にはまず参加する皆の「愛」の基盤がどこにあるかを擦り合わせプロセスを組み立てること。そのためには常に、今いる場所の風景を感じて、見極めながら未来に向けて皆にどんな風景を見てほしいかを冷静に見定めることが大事だと思つ。愛を胸に。









# 2

## 事業運営の現場から

磯村歩

## サステイナブルな事業運営に向けて

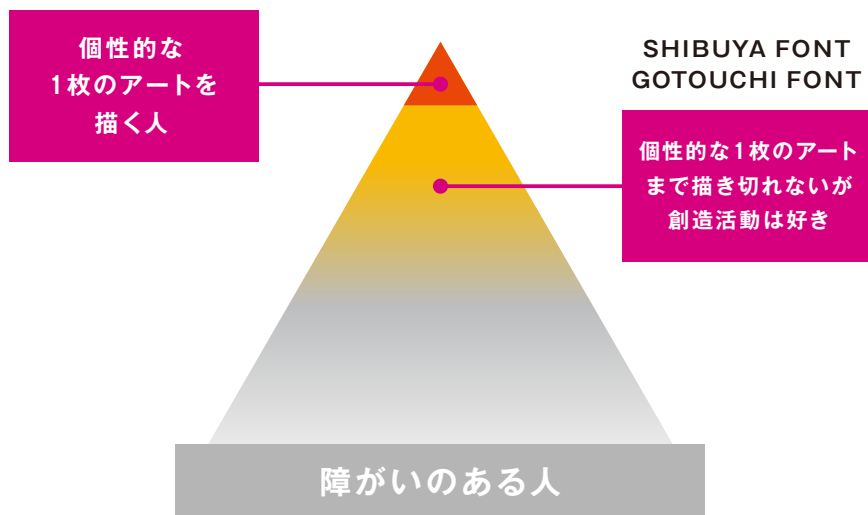
二〇一六年、専門学校桑沢デザイン研究所の学生の発案で生まれたシブヤフォントは、同校の非常勤教員である磯村歩がプロデューサーとして事業化を推進してきた。初期には、渋谷区からの業務委託として磯村が経営する株式会社フクフクプラスにて推進をしたが、その後、渋谷区、障がい者支援事業所と連携し、一般社団法人シブヤフォントを設立し、今に至っている。磯村からは、これからご当地フォントを運営する法人・団体に向け、事業運営上のポイントを紹介する。

## 障がいのある人のあらゆる創造物を社会へ

障がいのある人のアート活動は、全国さまざまな法人・団体で取り組まれています。そして障がいのある人のアートの社会的認知も進んでいます。ただ評価が高くなる一方、一枚のアートを描き切れる障がいのある人は全国的にも限られています。

そうした中、シブヤフォント・ご当地フォントは、一枚のアートを描き切ることが難しい方の創造物（粘土、刺繍、木工で作られたもの）やスケッチブックの隅に描かれた文字や形を、デザインを学ぶ学生、プロのデザイナーとの連携によってデータ化し、広く社会に届けることができます。障がいのある人にとって、商品化の喜びはもちろんありますが、ウェブサイトに掲載されることも大きな喜びです。

そして、そもそも共創に伴うデザイナー、学生との交流も、障がいのある人や支援員にとって新たな気づきを得られる貴重な機会になっています。福祉の日々の営みの中で生まれたアートワークは、とすれば日常的で見慣れたものになり、そこから新たな可能性を見出すのは難しいように思います。しかし、学生やデザイナーの視点からみると、とても新鮮で、魅力的なものが多く、そして障がいのある人、支援員にとって驚くほど魅力的なデータに様変わりしていきます。福祉とは異なる分野からの視点が、福祉の価値を再発見するのです。



## データだからこそ、第一歩を踏み出せる

全国の多くの障がい者支援事業所で自主製品を開発・販売しています。ただし、売れ残りなど、販路開拓が十分でない場合のリスクがあります。フォント・パターンなどのデータならば、在庫リスクなく、ラインナップを増やすことができます。原画の保管場所に頭を悩ます必要ありません。

また障がいのある人の高齢化や精神障がいのある人も増えている中、作業効率をあげての工賃向上が難しい状況が広がっています。シブヤフォント・ご当地フォントならば、制作したデータから恒常的にデータ利用料という収益が生み出されていくので、過度に作業効率を追いつめる必要がありません。こうした導入のしやすさから、シブヤフォント・ご当地フォントに携わる障がい者支援事業所は、今まで取り組んでいた自主製品の製造販売、官公需受託事業と両立させながら、取り組んでいる。



## データのバリエーションが強力な営業マンに

今では百社以上の企業に採用されているシブヤフォントにおいても、初期には採用が進みませんでした。しかし、五十種類以上のフォント・パターンが揃うようになってから、企業の担当者の評価が高まり、商品採用が進むようになりました。魅力的なバリエーションがあつてこそ、商品化の意思決定が促されます。

そして、そのデータのラインナップは強力な営業マンとなり、新たな描き下ろしのアートの制作依頼など、データ利用料以外の新しい仕事を生み出しています。

自ら商品化するなど採用事例を可視化することも大切です。昨今、ネット注文によるさまざまなプリントサービスが存在しています。まず少量でサンプルを制作し、期間限定シヨップで販売するなど、実例を示しましょう。そうすることで、企業の採用がどんどん進みます。

## 学生・デザイナーともWin-Win

学生、デザイナーにとって、シブヤフォント・ご当地フォントに取り組む意義はどこにあるのでしょうか？ 社会貢献？ いえいえ、得るものが大いにあるのです。

例えば「とやまふおんと」の事例では、日本酒のラベルデザインに採用された際、デザイナーに直接「デザイナーオーダーが入りました。その過程で新たなアートワークが求められ、障がいのあるアーティストによる描き下ろしのアートも採用されました。

一般社団法人シブヤフォントは、データの管理運営による売上加えて、デザイン制作、イベント企画、コンサルティングといった受託業務が全体の売上の四分の三以上を占めています。フォント・パターンが存在するからこそ、そのデータを活用した新たな仕事が生まれているのです。デザイナーにとってフォント・パターンは強力な営業マンであり、自分自身の仕事を生み出してくれる「デザイン資産」なのです。



デザインを学ぶ学生にとっては実践的な学びの場となっています。通常、デザイン学校では Photoshop や Illustrator の使い方、レイアウト方法、コンセプト立案など、主に手法を学びますが、実際の現場ではエンジニア、フォトグラファー、企画者、営業担当など多様な職種と協働しながら制作を進めます。このような実務経験は、学校教育では得がたいものです。

シブヤフォントでは、学生が障がいのあるアーティストとともに創作し、支援者とも議論を重ねながらプロジェクトを進めます。この過程で、学生は自分のアイデアを形にする方法を模索しながら、多様な人々と関係性を築き、ものづくりを進める力を養います。

さらに、障がい者支援事業所を訪れ、障がいのある人々と直接交流することで、ダイバーシティ&インクルージョンへの理解が深まります。こうした経験は、学生にとって貴重な学びとなり、社会的意識の向上に繋がります。

## 地域連携を進めたい学校とも Win-Win

文部科学省は、「社会に開かれた教育課程」を普及推進しており、学校法人に対して地域との連携を強化することを求めています。特に大学は「地域貢献型大学」として、産学官連携や地域振興の役割が期待されています。

これらを背景に、全国各地で産学連携のプロジェクトが数多く進められています。その多くは学生から商品アイデアを募り、企業の商品に採用するものですが、商品化を実現するためには、アイデアの提供のみならず、製造コストやマーケティング上の課題を着実に解決する必要があります。ただ学生にとって、日々の授業課題をこなす中で、こうした商品化に向けての取り組みは容易ではありません。

一方、シブヤフォント：ご当地フォントの取り組みは、商品化前の段階である「素材の提供（フォント：パターン）」をゴールとしているので、学生にとり、負担が少なく、授業としても導入しやすいのが特徴です。専門学校桑沢デザイ

ン研究所は、シブヤフォントの取り組みを選択制の授業とし、地域貢献とアクティブラーニングを両立しています。

そして、地域によっては、商品化といっても、そもそも製造販売している企業との接点が少ない場合も多いでしょう。しかし、障がい者支援事業所ならば、日本全国にあります。制作したフォント・パターンを障がい者支援事業所の自主生産品のパッケージ、さらには商店街や自治体の広報誌などに採用してはいかがでしょう。

ご当地フォントは学校にとって、学生のアクティブラーニングの機会創出、自治体との連携、社会貢献、そして、導入のしやすさなど、さまざまなメリットがあると思います。

## 地域を代表する取り組みで 自治体連携を実現

ご当地フォントを、より多くの方々に利用いただくためには、自治体との連携が欠かせません。一方、自治体は、公共性や公平性を重視するため、特定の施設や企

業に利益が集中することを避けます。そのため、一つの障がい者支援事業所やデザイナーだけのチームで自治体との関係を築くのは難しく、地域全体を巻き込む必要があります。複数の障がい者支援事業所やデザイナーが関わる「地域を代表する取り組み」としてアピールすることで、自治体の協力を得やすくなります。

自治体との連携の第一歩は、自治体が発行する広報誌に採用いただくのはいかがでしょうか？ データ利用料は広報誌のデザイン費の中に計上すれば、個別に予算化する必要もなく、第一歩が踏み出せます。また、自治体が公募する工賃向上やまちづくりの助成金などに応募するのも有効な手段です。採択されれば、自治体公認の事業として、地域内にネットワークが広がり、採用も広がっていくと思います。

また、企業がご当地フォントを運営する場合は、データ利用料の配分につき透明性を確保することが求められます。例えば、障がい者支援事業所への支払額をオープンにしつつ、適切な費用で事業運営を行うことで、関

係者全員が納得できる形を整えることが重要です。

## 工賃向上だけでなく、 多面的な成果を意識する

自治体がこの取り組みに対して予算を計上する際には、単に工賃向上だけを目的とするのではなく、より広範な社会的価値を見据えた設計が望ましいと考えます。

この事業の大きな特徴は、ライセンス料を通じた経済的な還元だけでなく、関わる人々の意識や行動に変化をもたらし、地域共生を促進する点にあります。アーティスト、デザイナー、学生が交流することで関係人口が生まれ、それが障がい者理解の促進や、ダイバーシティ&インクルージョン(D&I)の推進につながります。また、このプロセスを通じて、障がいのあるアーティストが社会と繋がる機会を増やし、自己表現の場を広げることができます。さらに、ライセンス事業によって地元企業との接点が生まれ、単発の取り組みではなく、企業と障がい者支援事業所・アーティストとの継続

的な関係構築が可能になります。企業側にとっても、D&Iの視点を事業活動に取り入れる機会となり、CSR(企業の社会的責任)やブランディングの強化に繋がります。また、地元の教育機関やデザイン関連の専門学校などと連携することで、学生が実際のプロジェクトに関わりながら学ぶ場を提供できる点も重要です。これにより、地域全体での共創の機運が高まり、新しい価値の創出が促されます。

関係人口の拡大によって、地域住民の障がい者理解が深まることも期待されます。例えば、地元の商店街が障がい者アートを活用したデザインを取り入れることで、日常の中で自然と障がい者の表現に触れる機会が増え、社会の多様性を受け入れる土壌が育まれます。その結果、地域全体が支え合う社会へと発展し、障がいの有無に関係なく誰もが活躍できる環境が整っていくでしょう。

自治体における予算化は、工賃向上だけでなく、D&Iの理解促進、地域共生の推進、企業・教育機関との連携強化、さらには地域経済の活性化など、より包

括的な成果を明確に定義することが不可欠です。その上で、これらの多面的な成果が実現できるような事業計画を策定し、適切な支援を行うことで、持続可能な仕組みへと発展させることが重要です。

## 地域の人みんなで担ぐ神輿を作る

シブヤフォントは、障がい者支援事業所、自治体、学生、企業がそれぞれの立場で関わることで成り立つプロジェクトです。このプロジェクトが単なる一企業の活動として進められるのではなく、地域全体で支える仕組み「みんなで担ぐ神輿」にしなければならぬのは、シブヤフォントが生み出す価値が、特定の誰かのものではなく、関わるすべての人々にとっての「自分ごと」となるべきものだからです。しかし、当初のシブヤフォントの運営は、渋谷区から株式会社フクフクプラスへの業務委託という形で進められていたため、特定の企業が主導しているように見られがちでした。

### 一般社団法人シブヤフォントの組織概要

|       |                                                                                      |
|-------|--------------------------------------------------------------------------------------|
| 設 立   | 2021年4月                                                                              |
| 法人種別  | 非営利型一般社団法人                                                                           |
| 社 員   | 渋谷区内 障がい者支援事業所 理事長・施設長 6名                                                            |
| 理 事   | 渋谷区内 障がい者支援事業所 理事長・施設長 6名<br>渋谷区内 デザイン専門学校教員 兼 障がい者アートマネジメント会社 代表1名<br>渋谷区障がい者福祉課長1名 |
| 監 事   | 税理士1名                                                                                |
| 所 在 地 | 東京都渋谷区神宮前 6-31-21 原宿スクエア(東急プラザ原宿「ハラカド」)7階                                            |

また事業の進展と共に、ライセンス料の管理や経理の透明性の確保、Googleのような海外企業との高度な契約締結、単年度では完結しない長期的な契約や継続的な管理など、シブヤフォントの発展において不可欠と考えられる業務に対応せざるを得ない状況が生まれていました。こうした業務は、単年度の業務委託の範疇を超えており、今後の持続的な運営を見据えた際、柔軟かつ継続的に対応できる体制の構築が不可欠であると判断し、新たな法人を設立することになったのです。

「みんなで担ぐ神輿」としての法人を実現するためには、まずガバナンスの強化が不可欠でした。新法人では、渋谷区障がい者福祉課長、渋谷区内の障がい者支援事業所の施設長、フクフクプラス及び桑沢デザイン研究所の教員（磯村）が理事に名を連ねることで、産官学福の多様な立場による経営を実現しつつ、意思決定が特定の団体に偏らない仕組みを整えました。また、シブヤフォントの商標権を渋谷区が保有し、一般社団法人シブヤフォントが使用許可を受けることで、公的な管理のもとで運営されているという信頼性を確保し

ました。もし一般社団法人シブヤフォントが不適切な経営を行った場合、渋谷区は商標の貸し出しを取りやめることができるなど、ガバナンスの仕組みが機能するようにしたのです。さらには、理事の任命権を有する法人の社員（株式会社という株主に相当する立場）を障がい者支援施設の理事長・施設長に限定することで、民間企業による経営支配を防ぐ体制にもしています。これにより、シブヤフォントが地域全体の共有財産として機能するようにしたのです。

資金調達の多様化も、「みんなで担ぐ神輿」を支えるために欠かせない要素です。従来、シブヤフォントは渋谷区からの委託費に依存する部分が大きかったのですが、新法人では補助金・助成金、ソーシャルセクターに対する支援制度など、多様な財源の確保や支援プログラムを利用できる体制にするため、完全非営利法人としました。完全非営利法人とは、国税庁が定める規定に沿って、剰余金の分配の禁止、解散時は剰余財産を公共機関や公益法人に帰属させるなどを定款に定め特定企業への利益誘導を防いでいる法人のことです。

当社は完全非営利法人にすることで、公益財団法人日本財団、独立行政法人福祉医療機構、日本NPOセンター等の助成、IT系企業が提供するさまざまな支援サービスを利用することができるようになりました。さらには、桑沢デザイン研究所との連携により、シブヤフォントの授業化を進め、学生が継続的に関わられる体制にもしました。

こうした新法人の設立によって、シブヤフォントは「地域のみんなで担ぐ神輿」になっていったのです。今後も、この神輿をより多くの人が担ぎ、地域の誇りとして発展させ、シブヤフォントを地域社会の一部としての役割を果たしていくものにしていきたいと思っています。

## 採用企業のオリジナリティも共存できる

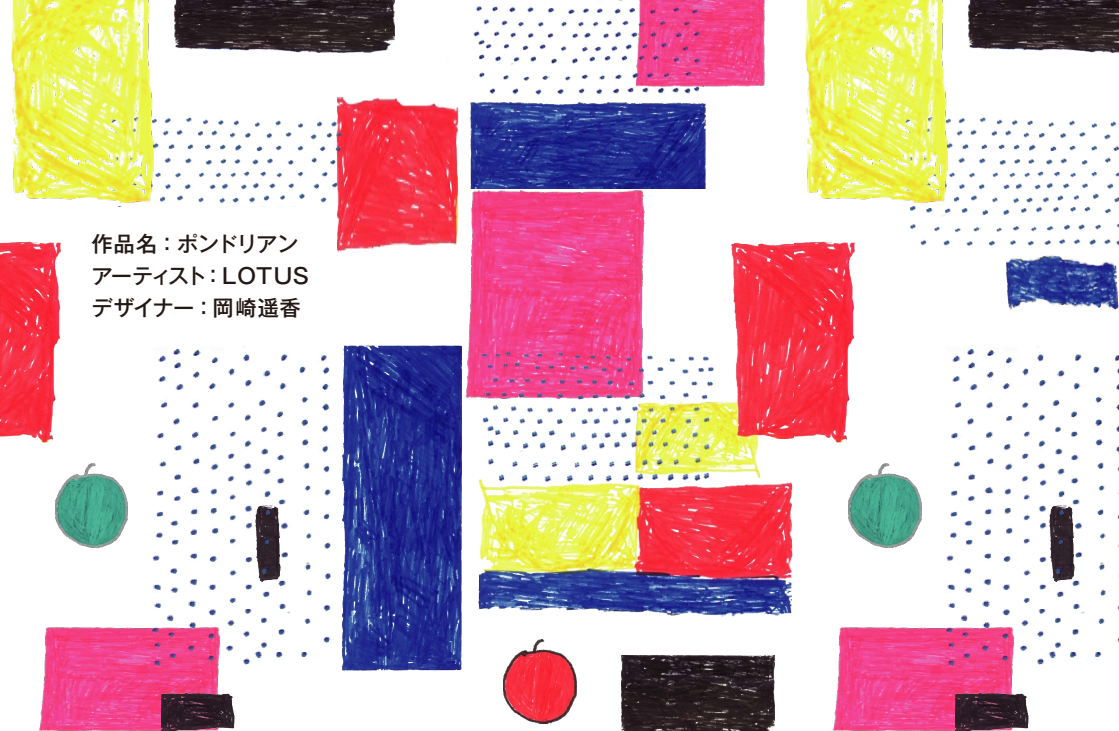
データの利用においては、独占的な利用ができないことに懸念を示す企業も存在します。このような懸念は、特にブランドイメージを大切にしている企業において強く、競合他社が同じフォント・パターンを使用する

## ソフトリングノート × Sooofta × (C)KEM



オリジナルパターン（左上）の背景や要素のレイアウトを調整、  
フォントもアレンジしたリデザイン





作品名：ボンドリアン  
アーティスト：LOTUS  
デザイナー：岡崎遥香

ことで差別化が難しくなることを懸念するケースです。しかし、ご当地フォントは、この課題に対して柔軟なライセンスを採用している点が大きな特徴です。

ご当地フォントのライセンスは、フォント・パターン自体の独占的な使用を許可するものではありません。しかし、企業のデザイナーがその企業の商品やサービスにあったデザイン的な加工処理を行うことを許容しています。このような加工処理が認められることで、同じフォント・パターンを使用していても、企業ごとに異なるオリジナルなビジュアルデザインが生まれるため、実質的には独占的な利用に近い状況を作り出すことが可能です。

例えば、ある地域のご当地フォントを使用して商品パッケージをデザインする際、そのフォントを単に利用するだけでなく、色や配置の工夫によって、独自性のあるデザインが完成します。こうした工夫によって、フォントが持つ独特の個性を活かしつつ、企業独自のブランド価値を高めることができるのです。このよう

な柔軟性のあるライセンス体系を企業に対してしっかりとアピールし、活用を促すことが重要です。さらに、独占利用ができないことが、逆にご当地フォントの魅力を広げる要素ともなります。ご当地フォント公式ウェブサイトでは、個人でも自由に利用できる環境が整えられています。このようなオープンな姿勢が、多くの人々にフォントの存在を知ってもらう機会を提供し、結果的に地域の文化やアイデンティティを広く発信することに繋がります。

個人でも、企業でも、誰でも利用できるというオープンな形だからこそ、ご当地フォントは地域のオリジナルデザインとして、広く共有されるパブリックデータとしての存在意義を持ちます。パブリックデータとしての役割を果たすことで、地域の文化資産としての価値が高まり、より多くの人々に親しまれるデータへと成長していくのです。

このようなオープンな利用形態は、ソーシャルアクションの一環としても重要です。フォント・パターンを通じて

て地域の文化や歴史、アイデンティティを伝え、多様な人々が関わることで新たな価値を創造する取り組みとなります。例えば、地域の小学生が学校の授業でご当地フォントを活用したポスターを制作したり、地元のアーティストがフォント・パターンを用いてアート作品を制作したりするなど、さまざまな活用方法が考えられます。

さらに、企業がご当地フォントを活用することで、地域社会との繋がりを強調し、CSR（企業の社会的責任）活動の一環として位置つけることも可能です。企業が地域の文化を大切にし、地域住民との協力関係を築く姿勢を示すことで、顧客からの支持が高まり、ブランドイメージの向上にも繋がります。

独占利用ができないことは一見するとデメリットのように見えますが、このように、実際にはオープンな利用形態を活かすことで、さまざまなメリットを生むことができます。ご当地フォントの利用形態が、地域社会全体の活性化や新たなクリエイティブな価値創造に繋がる重要な要素であることを、関係者全員が理解

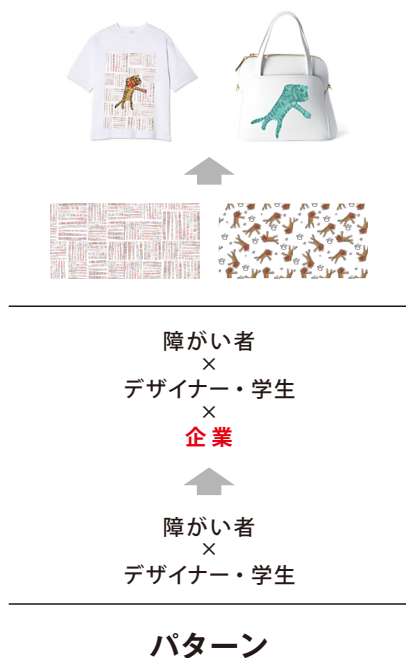
し、共有していくことが大切です。

さらに、データの公開利用が促進されることで、ご当地フォントが持つ社会的な意義も高まります。障がいのあるアーティストが制作に関わったフォントを多くの人々が利用し、その存在を知ること、ダイバーシティ&インクルージョンの理念が社会に浸透していきます。このような取り組みは、単なるデザイン活動にとどまらず、社会全体の意識改革や多様性の尊重に貢献する重要な役割を果たします。

## フォントは共生社会のシンボル

シブヤフォントやご当地フォントは、フォントデータに加えてパターンデータもラインナップに含まれています。それにもかかわらず、「フォント」という名称を採用しているのは、フォントが持つ「誰でも使え、自由に加工できる」という特性を大切にしているからです。

フォントは日常的に使われる最も身近なデジタル



素材の一つです。文章を書く、資料を作成する、広告をデザインするなど、さまざまな場面で利用され、ユーザーが文字を自由に入れ替えたり、色やサイズを調整したりして創作の幅を広げることができます。この柔軟性が、フォントを他のデザインデータとは異なる独特の存在にしています。

ご当地フォントのデータを活用することで、障がいのあるアーティストや学生、デザイナーが生み出したクリエイティブが、ユーザーの手によって新たな形に変化します。その結果、フォントを使用して作成された文字群は、創作者と利用者の共同創作物といえるでしょう。それは障がい者、デザイナー、学生、そして文字を入力したユーザーが協力して作り上げたものであり、多様な人々が社会参加できる「共生社会のシンボル」としての価値を持つのです。

このフォントの特性をパターンデータにおいても活かすため、使用者が自由に加工できるライセンス体系にしました。フォントの持つ柔軟性と拡張性、そして

ユーザーが自由に創作に関わることができることをパターンにも適応し、さまざまな利用を促進しています。

## 地域名を冠するご当地フォントの意義

シブヤフォント、京都ふおんと、とやまふおんとなど、地域名を冠した名称にしている点も、このプロジェクトの大きな特徴です。障がいのある方々のアート活動を支援するうえで、アーティストの名前を社会に届けることは重要です。そのため、ご当地フォントのウェブサイトやシブヤフォントのウェブサイトでは、可能な限りアーティスト名を表示し、社会に発信するよう努めています。

そして、データの総体として地域名を入れていることで、その地域に属する人々からの共感や応援を得やすくなるという効果もあります。「障がい者アートを応援してください」という訴えかけだけではなく、「この地域の障がいのある人、学生、デザイナーの活動を応援してください」という構造にすることで、より多くの地域住民の共感を得ることができるのです。

この地域名とフォント名の組み合わせは、地域の人々が自分たちの文化としてフォントを誇りに思い、積極的に活用する動機づけにもなります。その結果、障がい者アートの支援活動が地域の一体感を生み、共生社会の実現に向けた大きな一歩となるのです。

また、地域名を冠することで、その土地ならではの文化や歴史、価値観がフォント・パターンを通じて表現されるため、地域独自のブランディングにも繋がります。地域のアイデンティティを反映したフォントは、地元企業や自治体のPR活動にも活用され、地域の魅力発信の一助となるでしょう。

このように私たちが地域名をフォント名に組み合わせているのは、地域との結びつきを重視し、地域の文化とともにフォントを育てていくという理念に基づいているからです。こうした取り組みを通じて、地域社会の中で「みんなで支え合う共生の象徴」としてご当地フォントが機能することを目指しています。

## 本業との連動が ご当地フォントを発展させる

企業がご当地フォントを推進する場合、その企業の本業と連動させる工夫が重要です。ご当地フォントの活用が、企業の主要な事業と結びつくことで、継続的な価値創出が可能となります。

例えば、印刷業社がご当地フォントを活用する場合、カレンダー、冊子、カタログなどの印刷媒体に採用することで、既存の印刷業務に新たな付加価値を加えることができます。ご当地フォントを推進している印刷業社の事例では、従来、顧客からのオーダーを受けて指定された仕様のものを納品する「受け身型」の営業から脱却し、ご当地フォントを活用した新たな提案型の営業活動へとシフトしました。このように、ご当地フォントを採用することで、印刷業者は顧客に対して独自の印刷物を提案でき、営業活動が活性化します。

また、この取り組みが「地域貢献」や「社会性」を

伴うものであるため、顧客企業からの評価も向上し、新規案件の獲得にも繋がっています。

また、地域に根ざしたデザイン事務所がご当地フォントを活用することで、さまざまな分野での新しい仕事が生まれる可能性があります。シブヤフォントでも、フォント・パターンのライセンス事業がきっかけとなり、印刷物やグラフィックデザイン、チラシ、イベント企画など、多岐にわたる仕事が生まりました。

従来のデザイン事務所は、クライアントからの依頼に応じてデザインを制作する受託型の営業スタイルが主流ですが、ご当地フォントのラインナップを持つことで、クライアントに対して積極的に新しいデザインの提案が可能になります。これにより、受け身型の営業から提案型の営業へとシフトし、クリエイティブな価値を提供する機会が広がります。

## 新たなプログラム・サービスの創出

ご当地フォントには、さまざまな収益モデルを運動させることができます。当社では、パターンデータを高精細印刷し、額装にセッティングし、アートと見立てて鑑賞する「対話型アート鑑賞」プログラムを企業向け研修として実施しています。参加者が自由に意見を述べ合い、対話を深め、自己肯定感の向上、チームビルディング、創造的思考力の向上などを目的に採用が広がっています。クリエイティブ思考の促進や多様な視点を取り入れた問題解決能力の向上を目的とした研修として、高い評価を得ています。

そして、このプログラムは、渋谷区内の小中学校の探究学習としても導入しています。自治体の学校教育担当と連携すれば、自治体のモデル事業として継続的な導入も可能でしょう。

また、ご当地フォントのチームの中には、パターンデータを額装したものでアートレンタル事業（年四回アート





対話型アート鑑賞

が変わるサブスクリプション型」を展開しているところもあります。企業の従業員が日常的にアートに触れることで、職場の雰囲気が改善され、クリエイティビティが向上する効果も期待できます。また、アートレンタルを導入した企業には、前述の対話型アート鑑賞を研修として導入いただける傾向にあります。

人事部には研修の提案、総務部にはアートレンタルの提案、広報部にはCSR活動の一環として社内報への採用の提案、そして事業部には商品採用の提案など、取引が生まれた企業の複数部署に対してクロスセルを行うことで、売上の拡大が見込まれます。

このように、ご当地フロント事業の収益化にはさまざまな手法があります。単なるデータ利用料の収益にとどまらず、多様な収益源を確保することで、事業の安定化を図ることができます。最終的には、これらの収益化モデルを組み合わせることで、持続可能な事業運営を実現し、地域社会に貢献するご当地フロント事業をさらに発展させることが可能となるでしょう。

## 助成金や補助金の活用

制作にかかる経費、プロモーション費用、契約手続などの初期コストは、地域の助成金や補助金を活用することで賄うことができます。地方自治体や文化庁などの公的機関は、地域活性化や障がい者支援のための補助金や助成金を提供している場合が多いため、これらの制度を活用することで、初期投資の負担を軽減できます。

助成金と補助金は、申請団体が完全非営利法人であることを条件としているものが多く見受けられます。一般社団法人における完全非営利の条件は、国税庁のウェブサイト「非営利型法人の要件」を確認してください。また、過去三カ年の決算書も求められますので、設立してまもない団体は、連携している障がい者支援事業所と相談の上、助成金、補助金の応募要項に沿って申請主体を検討するのによいと思います。

また、社会課題の変化に応じて、審査の基準も変わっ

てきます。助成プログラムの目的に考慮しながら、申請企画をまとめることが必要です。過度な仕様の備品購入、一過性で終わる傾向の単発イベントでは、審査を通過するのは難しい傾向にありますので、ご注意ください。

【参考】一般社団法人シブヤフォントが採択された助成と支援プログラム

|                                                         |                                                                                           |                                                                         |          |
|---------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------|----------|
| 公益財団法人日本財団                                              | 通常助成                                                                                      | 障がい者とデザイナーの協働による<br>フォントデザイン事業の知見の<br>共有と周知                             | 約600万円   |
|                                                         |                                                                                           | 障がい者の文字や絵のデジタル<br>データ化「ご当地フォント」による<br>障がい者理解と地域活性化                      | 約1,700万円 |
| 独立行政法人<br>福祉医療機構(WAM)                                   | 社会福祉振興助成事業(WAM助成)                                                                         | 障がい者と地域をつなぐ<br>対話型アート鑑賞の運営人材育成                                          | 約300万円   |
| 特定非営利活動法人<br>ソーシャルベンチャー・<br>パートナーズ東京(SVP東京)             | 投資・協働                                                                                     | 事業運営全般                                                                  | 200万円    |
| デロイト トーマツ<br>ウェルビーイング財団                                 | コレクティブ・インパクトによる<br>社会課題解決の推進助成<br>Societal Well-being 助成枠<br>Leading Collective Impact 部門 | 福祉と社会をデザインの力で繋げて<br>Well-being 社会を実現する<br>ダイバーシティ&インクルージョンの<br>体現機会創出事業 | 400万円    |
| UBSグループ、<br>特定非営利活動法人<br>ソーシャルベンチャー・<br>パートナーズ東京(SVP東京) | UBSグループ×SVP<br>東京アクセラレーター<br>プログラム                                                        | 事業運営全般                                                                  | 150万円    |
| 日本NPOセンター／<br>テックスープ事務局                                 | TIS×日本NPOセンター・<br>TechSoup協働事業<br>デジタル基盤助成プログラム                                           | シブヤフォント・ご当地フォントに<br>おけるチャットボットQ&Aの<br>仕組み構築                             | 約250万円   |



# 3

## 福祉の現場から

古戸勉

## 福祉をひらくということ

二〇一六年、渋谷区の就労継続支援B型「福祉作業所ふれんど」の施設長・古戸勉氏は渋谷区障がい者福祉課から「渋谷区のおみやげをつくれなにか」と相談され、知人の磯村歩氏に話を持ち掛けた。その後、ご当地フォントの先駆けとなる「シブヤフォント」が誕生。古戸氏は、この取り組みが、自身が考えていた福祉の世界の課題を解決する可能性があると感じるようになった。古戸氏に福祉の世界が内包する問題と、シブヤフォントの持つ可能性を聞いた。

## 福祉の世界の課題

「課題はお金です」

開口一番、古戸氏はそう言った。二〇〇五年に障害者自立支援法（現在は障害者総合支援法）が施行されてから、それまでの「障がいのある人は家族で面倒を見る」といった状況が改善され、無認可の作業所も順次法内化施設に移行され、国の支援の仕組みも大幅に改善された。

しかし、古戸氏はそれだけでは課題は解決されないと言う。

「知的障がいのある方が利用する施設の建設にあたっては、近隣住民から『施設ができる土地の価値が下がる』『怖い』などといった理由で反対運動が起きることがあります。無事に施設ができたとしても、一部の利用者の方には、対応が大変だという理由で、施設の利用を断られることもある。しかし、『怖い』『対応が大変』と言われるのはご本人たちのせいなのか？ 私は実は環境が大きく影響していると思っています」（古戸氏、以下同）

現在、知的障がいのある人たちが利用する障がい者支援事業所の多くでは、ひとつの部屋で十人から二十人の利用者が一緒に時間を過ごしている場合が多いと思われる。

「利用者の方の中には、集団行動、集団生活が苦手という特性を持った人が多くいます。そのため、一部屋に大勢の人がいることに耐え切れず施設の外に出ようとしたり、時には不安から大きな声を出してしまったりして、周囲から怖いと言われてしまうわけです。し



かし、たとえば二十人の利用者がいる施設があったとして、五人一組となり、四つの部屋に分かれて少人数で過ごしたら、彼らの不安は減り、いわゆる問題行動といわれることも減っていくはずだ」

しかし、現実にはスペースや職員の人数の問題から、状況はあまり変わっておらず、それは仕方のないことだと認識されている。

「大事なことは、障がいがあるなしに拘わらず、誰でも自分の思うように生きる権利があるということです。日本国憲法にも書いてある生存権は、もちろん障がいのある人にも認められている権利です。でも、みんな口では障がいのある人の権利と言いますが、実はその権利は意識されていないというのが現実だと思いますよ」

現状の国や行政の支援だけでは、障がいのある人たちそれぞれの特性にあった環境を作るのは難しく、そもそも、そうした改善が必要だという認識すらされていないことが、大きな課題のひとつなのだ。

## 職員の労働環境

古戸氏がふたつめの課題としてあげたのは、福祉の世界で働く人たちの労働環境だ。

福祉の世界は二十四時間、三百六十五日、誰かが助けを必要としている。当然、それに対応できるスタッフが必要となるのだが、今のところ残念ながらそれに見合った労働環境は整備されていない。

「たとえば、うちのスタッフの中には、小さいお子さんがいる女性何人かいますが、改めて思うのは、子育て中の母親に対する社会の要求が異常なくらい多いということです。妊娠出産から始まって、育児だけでも大変なのに、家庭のこと、町内会のことなど、女性はいろいろな役割を押しつけられる。さらに子どもが学校に入ってもPTAだなんだと忙しいわけです」

いくら国が女性の社会進出を推奨しても、現実問題として育児や家事、地域活動、PTAなどはまだまだ女性が担うものという意識が日本の中には蔓延している。

「ですから女性職員が『土日は出勤できません』『五時半で帰らせてください』『残業は無理です』といったことになるのは当然です。働く人たちにも権利がありま  
すし、施設には就業規則もありますから、無理矢理働  
いてもらうわけにはいきません」

最近、「ふれんど」で、こうした労働環境の問題を象  
徴する出来事があつたそうだ。

ある日、地域のケアマネージャーから古戸氏のところ  
に一件の相談が持ち込まれた。認知症の母親を介護  
している女性が骨折をしてしまった。その女性には障  
がいのある子どもがいるため、その家庭のサポートを  
どうするかという内容だった。

「そこで支援に関わる関係者が集まって会議を開くこ  
とになったんですが、全員集まって会議が始まったの  
は午後七時頃でした。こうしたことは、福祉の世界で  
はよくあるんですが、そんな時間からの会議では参加  
できない職員もいるわけです。子どものお迎えがある、  
家族の夕飯を作らなければならない。また、そうした  
理由がなくても、定時を過ぎていたら、無理矢理会議

に参加してもらうわけにはいきません。それも働く人  
の権利ですから」

「ふれんど」の就業規則は労基法に基づいた一般的なもの  
で、定時もあれば休憩時間もある。しかし、先程の例のよ  
うなケースが頻繁に起こる福祉の世界には、一般的な就業  
規則だけでは対応しきれない課題が山積しているのだ。

「先程、障がいのある人の権利の話をしました。が、そ  
れだけでなく、働きたい人の権利だったり、逆に働き  
過ぎない、自分の健康を守るための権利だったり、い  
ろんな権利があるわけです。ところが、今の日本では  
権利に関する理解が低い。障がいのある子どもを持つ  
親は、自分の子どもの権利を当然主張しますが、それ  
を支える職員の権利には意識が向かないことが多い。  
もしかすると、自分自身に権利があることすら、忘れ  
ているかもしれません」

誰にも権利があるが、それぞれが自分の権利を主張  
するだけでは、事態は硬直し物事は前に進まない。さ  
らに労働環境の問題は障がい者支援事業所の在り方に  
も影響を及ぼす。

境を整備する必要があることを忘れてはならない。

## スポンサー制度

「たとえば、ネグレクト（養育や介護をすべき者がその世話を怠る責務放棄）。障がいのある子どもも家庭でも起き得る問題ですが、うちの施設でも、たとえばネグレクトにあった子どもは施設の職員の気を引くためにわざと床に水をぶちまけたりします。それは怒られてでも、自分に注意を向けてほしいという気持ちの表れです。この場合ベースにあるのは、その人の障がいの特性ではなくて、愛情や人との触れあいに飢えているということ。ただ、障がいの特性があるために思ったような自己表現が難しいのです」

しかしネグレクトは家庭のプライバシーにも関わるため、施設の職員が簡単に踏み込むことはできない、とても難しい問題だ。

「ただ、ネグレクトにあつてはいる子どもたちの家庭環境を変えることはできなくても、彼らの居場所をつくることはできるはずです。しかし、今の制度では障がい者支援事業所をそうした居場所にするのは難しい」

障がい者支援事業所を、救いの手が必要な人をいつでも受け入れられる居場所にするには、法律や資金の問題といった課題もあるが、それに対応できる職員の労働環

古戸氏は、こうした問題を解決するために必要になってくるのが、「行政からの支援ではないお金」だというのだ。「行政を責めるわけではないけれども、行政というのは実績主義にならざるを得ないので、新しいことを始めるのは苦手でし、さまざまな手続きが必要なせいか、スピード感がない。やっと支援金が出たと思ったら、その問題は解決していた、などということもあり得ます。それに、行政からの支援だけに頼っていると、税金からお金を出してもらっているという意識からか、卑屈になってしまうこともあるし、何事に対しても『どうせ無理だろう』と諦めに繋がりがやすいんですよ」

そこで、古戸氏が考えるのは行政だけに頼らない障がい者支援事業所だ。

「夢のような話と言われるかもしれませんが、障がい

のある人たちや、障がい者支援事業所の在り方に賛同できる、応援したいという人や企業が施設のスポンサーになり運営できたらいいと思うんです。そして、それが福祉の世界の当たり前になるような社会になってほしい。スポンサーが応援することで、障がいのある方たちが自分の納得のいくように、そして自分の権利が保障されるような生き方をするができる障がい者支援事業所になることが理想です。そのためには、スポンサーが施設の在り方に口を出すのもありだと思います」

障がい者支援事業所にスポンサーがつくことには資金以外にも大きなメリットが考えられる。

「今までの閉塞的な障がい者支援事業所の在り方は、課題に対して民間の知恵が入る余地がないですよね。たとえば、行政の場合は施設の稼働率が悪ければ、すぐに税金の無駄遣いという話になります。それは、行政としては正しい考え方です。でも、そこに福祉でも行政でもない民間の知恵が入ることで、全く違う課題の解決法が見つかる可能性が広がるはずですよ」

## 地域と共に

福祉の世界に地域の人々の手、企業の支援、さまざまな人たちの知恵などを入れ、繋がりを深めることを、古戸氏たちは「福祉を開く」と言っている。

「福祉の世界に外部の人が入ることによって、まず外の目を意識するガラス張りのような状態になり、風通しのいい施設になる可能性が高くなると思います。また、職員やスタッフなどと呼ばれる現場の人たちが、初めて施設を訪れる多くの外部の方々に対して、自分の施設のことや施設に通っている知的障がいのあるメンバーのことを説明する機会が増える。そうするとまずは説明が上手になり、次第に説明がシンプルになり、さらに自分がわかることと、わからないことが明確になる。つまり説明を繰り返し返すことが自分たちの仕事や施設そのものを見直すきっかけに繋がっていきます」

また、外との繋がりを深めることで、お互いの良さ、知恵、特性を生かした新たな価値を創造することができる。そのひとつが、古戸氏が関わる「笹塚十号のいえ」という、渋谷区笹塚十号通り商店街にある元は八百屋

さんだったところを再生した地域福祉拠点。ここは誰もが無料で利用できる場で、地域の人々がお茶をしたり、休憩したり、あるいは障がい者支援事業所の商品販売、フードパントリー（なんらかの理由で食品を手に入れることが困難な人へ、無料で食品を配布する活動）、生涯学習企画、学生ボランティアらの活動拠点などとして活用されている。

「各自自治体には地域包括支援センターという、高齢者の相談にのる組織があるのですが、困っているのに制度上の理由でやれることには限界がある。私の知人が『それはおかしい』と、十年ほど前に無料カフェをはじめました。商店街、障がい者支援事業所、大学、民生委員の方々に声を掛けて委員会を作り、引きこもり状態になっている地域の高齢者の方になるべく外に出てきてもらおうという活動をしたんです。この活動がはじまりです」

ここでは、月に二回運営委員の方によるミーティングが行われているが、そこで話されるのは、貧困やひとり親家族、独居高齢者の問題など地域の中で具体的に



笹塚十号のいえ

起きている出来事だ。

「その中に我々のような障がい者支援事業所の人間が入っていくことによって、知的障がいのある方たちの問題が社会課題のひとつとして理解されるようになっていきます。その場に集まった違う分野の人たちから『それってどういうことなの?』という疑問を投げかけられて、初めて『これは社会から理解されていない、知られていない』ということに気づくこともあります」

それまで、施設の中だけで完結してしまっていた問題、どうせ解決できないと諦められていた課題が、地域と交流することで社会課題として普遍化される。そして外部の知恵を借りることで解決できないと思われる問題が解決することがあるのだ。

「たとえば『十号のいえ』のあるエリアで、これまで『よく見かけるけど、どんな人?』みんな存在は知っているけど、名前さえ知らなかった、という人がいました。ところが、その方が『十号のいえ』に通うようになって、名前がわかるようになる。どんなことが好きでどんなことが苦手か、その方の個性が浮かび上がっ

てくる、それまで匿名性があつた関係から個人の関係になってくる。抽象性から具体性に変化してくるわけです。○○さんの心配ごとや課題をどうしたらいい? というふうに、固有名詞で語られるようになったことで個人の状態に寄り添えるようになるのです」

行政ではなくて、まちの中でその問題が語られることによって、『十号のいえ』の周辺では新しい地域の繋がりが生まれ、課題解決の糸口が見つかっているという。

## シブヤフォントの可能性

こうした古戸氏の考える福祉の世界の課題を解決し、障がい者支援事業所と地域の新しい繋がりをつくると期待されているのがシブヤフォントだ。

「シブヤフォントは複数の人、いろいろな立場の人、施設などを巻き込める力を持っているので、私自身『これはAさんとBさん、あれはBさんとCさんを組み合わせよう』といった人の繋がりを生み出す発想ができるようになりました。もしも、これを『ふれんど』だけでやろうとしたら、できることの範囲が限ら





シブヤフォント発表会で集まった企業とシブヤフォントメンバーたち

れてしまわずですが、障がいのある人もない人も、誰でもやれる『アート』がベースになっていることで、『ふれんど』が地域の発信基地のひとつになれたのは間違いないと思います」

さらに言えば、シブヤフォントが実現したのは「ふれんど」をはじめとする福祉事業所が存在するからであって、渋谷区の職員も、デザイナーの学生たちも、「ふれんど」が存在するから、そこに人が集まってくるのです、と古戸氏はシブヤフォントに取り組んでからの変化について話す。

シブヤフォントという工賃のことも含んだ「仕組み」が生まれ、最初は渋谷区内の四つか五つの施設からスタートした取り組みも、今では十一の施設が参加するまでになっている。

「福祉の世界しか知らないと、アイデアもなかなか広がらないと思いますが、シブヤフォントをきっかけに福祉が開かれ、さまざまなジャンルの業界の方と出会い、障がい者支援事業所の可能性が広がったと実感しています。そう考えるとシブヤフォントは単なるフォントやパターンを作るプロジェクトではなく、実は環境を変えて

いく仕組みだと私は思っていますし、実際に関わった多くの人の環境が変わったのではないのでしょうか」

そして、シブヤフォントでは古戸さんが目指していた、スポンサー制度のような企業との繋がりもはじまっている。

「企業の方たちが施設訪問をしたり、シブヤフォントを自社製品などに活用したり、金銭的支援をしたりといったことが実施されています。企業は、障がいのある全ての人を個々に応援するのは物理的に難しいけれど、地域の施設を通した支援ならば可能です。その時に、企業が求めているものは何か、その企業の社員のためになるのはどんなことかといった、新しいことを施設も一緒になって考えていくようになれば、さらにダイナミックな展開が待っているのではないかと気がしています」

このようにその地域に障がい者施設があることで、さまざまな輪が広がっていく。そして障がい者支援事業所には工賃アップとは別に、存在するだけでその地域が豊かになるという価値を生み出す可能性があることが理解

される。そのためには福祉を開くことが大切なのだ。

## 障がいのある方々と繋がる意義

スポンサー制度は、福祉の世界の課題を解決できるとはいえ、お金を出す側にもメリットや意義がなくては進まない。個人でも企業でもいいが、日ごろ福祉の世界とは関わりのない人や組織が、障がい者支援事業所のスポンサーになることには、どんな意義があるのだろうか。

「知的障がいのある方たちの多くは、早い段階で、『進学していい学校を出て、いい会社に入り、いずれは結婚する』といった、いわゆる理想とされる生き方から外れることになります。健常者と言われる人たちは、そうした人たちと繋がりを持つと、大抵の場合、小さい時から当たり前のように植え付けられてきた、理想の生き方という価値観が一旦壊されます。自分の『当たり前』が通じないことに、最初はみんな不安を抱くようですが、私はむしろ未知の世界へ突入し、新しい自分自身の価値観を作り直すきっかけ、あるいは自分の

価値観を多様にするきっかけになると考えています」「ふれんど」に実習にやってくる保育士や幼稚園教諭を目指す学生たちは、最初はみんな異口同音に「自分は何人見知り」もしくは「初対面の人が苦手」「障がいのある人とうとうコミュニケーションをとっていいかわからない」と不安そうな言葉を口にするが、時間が経つにつれ、あきらかに変化が見られるという。

「実習初日、学生たちは比較的言語がはっきりしている人たち、自分たちからアプローチしてくる人たちとコミュニケーションをしています。それが実習を三日、四日と続けていくうちに、仲良くなる人が一人、二人と増えていき、徐々に馴染んでいきます。やがて実習も後半になると、自分から言葉を発しない、あるいは自分の世界に閉じこもっているように見える人たちに、学生の方からコミュニケーションを取ろうとし始めます。学生の中には、実習が終わる二週間後には施設のメンバーと離れがなくなるぐらい関係性が強くなっている方もいます」

知的障がいのある方と接するには、専門性が必要な

場面もたくさんあるが、知らないからこそ先入観なく接することが出来る場合もあるということが、学生たちを見ていてよくわかるという。また、障がいのある人たちも、そうした学生たちを好ましく思うのか、大げさに言えば、ベテランの支援員より何も知らない学生の方に心を開くような場面も見られるのだそうだ。

福祉が外に向かって開き、一般の人が障がいのある方々と繋がることは、両者にとって豊かな交流を生み出しているのではないかと、古戸氏は考える。

「価値観が壊されるといっても、そんなに大げさなことではなく、世の中には自分の知っている価値観とは違う価値観があるということを体験し実感できる。たとえば、外国に行ってその国の人や文化に触れるのと同様に考えてみてはどうでしょうか？ つまり、知的障がいのある方々と関わることで、私たちは現代社会が押し付ける価値観やルールについて新たな問いを投げかけられているとも言えます。そしてその関わりの中で得られる学びや気づきこそが、彼らと関わることの大きな意義のひとつだと私は考えています」

シブヤフォントでは、こうした問いかけから気づきを得て、ビジネスに生かしたり、生き方そのものに変化が生まれたりした人もいる。

「ただ、そうした気づきの後に起こる内面的変化については、人それぞれなので、『こういう変化が起こります』と簡単に説明することはできないというのも事実です。たとえば私が『障がいのある人と繋がりを持つと、こんな内面変化がある』と言ったとしても、それはすべて私に起こったことです。十人が障がいのある人に出会ったとして、十人それぞれが今まで自分の中に作られてきた価値観に対して疑問を持ち、自分に問いかけ、ひとりひとり相手に対して違った働きかけをするはずで、だからこそ面白いとも言えるんじゃないでしょうか」

## これからご当地フォントを始めるには

シブヤフォントがさまざまな可能性を秘めているとしても、これから挑戦したいという施設の中には、「そうは言っても」と否定的な言葉が出てくることもあるだろう。「施設によっては職員に、あまり利用者の方やその方

の家族、家庭のことに深く入り込まないように、あくまで公平に接するように」と言っているところもあるようです。あるいは歴史のある施設や、すでにヒット商品を生み出してすっかり工賃を稼いでいる施設では、毎日やることがしつかり決まっていて、外部の人や新しいことを受け入れる余地がほとんどなくなっている。外部の人を受け入れていると、通常の工程がストツプしてしまい従来の納期に間に合わないといった理由から『外部との新しい繋がりには必要ない』と考える施設もあるでしょう。しかしそれでは、成功体験から脱却できずに組織が硬直化してしまう危険性もあります」

あるいは外部の知らない人が来ることによって、知的障がいのある利用者たちが興奮してしまい、施設のペースが乱れることを懸念しているというケースも考えられる。

「そうした施設の職員さんの中には『この人たちは毎日同じペースで過ごすことが一番なんです』とおっしゃる人もいますが、私の経験からすると、必ずしもそうとは思えないことが沢山ありました。障がい者支援事

業所で働く職員の皆さんは、障がいのある方たちのいろんな可能性をもっと引き出したり、彼らの魅力を毎日感じたりしながら仕事をしたかったはずですし、それが働く動機の原点という人は多いはずです。知的障がいのある方々だって、日々少しづつかもしれません、皆さん成長しています。人が成長する上で、他者とのコミュニケーションは非常に重要であり、生きていくという実感を持てる貴重な場でもあります。だからこそ障がいのある方だけでなく職員も含めて、施設そのものが豊かになるために、外部との交流はとても重要です。シブヤフォントには福祉を原点に戻す力、職員の方が喜びを持って働けるようにする力があると思います」

仮にご当地フォントを始めたいが、月に一回でもデザインをする学生などを受け入れる余裕がないといった場合、ぜひ一度相談してほしいと古戸氏は話す。

「たとえば、相談をしてくれた施設に、私が『月に一回、学生さんを受け入れる余裕がありますか』と質問したとします。そこで『ない』と言われたら、『何が問題で

受け入れられないのか?』と聞きます。それに対して『上の人が反対している』と言われれば、『上の人は何が原因でダメだと言っているんですか?』とさらに質問します。そうやって、できない理由を外部の人間が客観視することで、徐々に環境が整っていくはずです」

外部の視点が入ることで、場合によってはその施設が抱える他の悩みが少しずつ出てきて解決されていくということもあるという。

「だから、まずはご当地フォントを始める始めない以前に、やってみたいと考える最初の一步を踏み出すところから始めてみてほしいと思います」







# 4

## 行政の現場から

原信吉、齋藤貢司、黒田敬久

## 渋谷発、全国へ

全国に広がるご当地フォントを生み出したシブヤフォントは渋谷区の「渋谷みやげ開発プロジェクト」からスタートした。渋谷区はどのようにして、このプロジェクトを成功させたのか。シブヤフォント誕生から現在まで、このプロジェクトを支えた渋谷区障がい者福祉課の歴代三名の課長に、どのようにしてこのプロジェクトに取り組んだのか話を聞いた。

写真左から

渋谷区福祉部障がい者福祉課長 黒田敬久氏

渋谷区経営企画部参事 原信吉氏

シブヤフォント共同代表 磯村歩氏、古戸勉氏

渋谷区教育委員会事務局教育政策課長 齋藤貢司氏

## 予算や組織作り、問題山積のスタート

二〇一六年、渋谷区は東京2020大会に向け、同区ならではのおみやげを作るというプロジェクトをスタートさせた。障がい者福祉課は区内の障がい者支援事業所とデザイン学校との連携プロジェクトを企画し、事業所メンバーと学生からいくつものユニークなアイデアが提案された中、最終的に採択したのが「渋谷で暮らし、働く障がいのある人」の描いた文字や絵を、「渋谷区にある専門学校桑沢デザイン研究所の学生」がフォントとしてデザインし、パブリックデータにしようというプランだった。

当時、渋谷区障がい者福祉課の課長だった原信吉氏（現・渋谷区経営企画部参事）は、「一度作って終わりのプロダクトと違い、フォントならば横展開もでき、事業として持続できるのではという期待もありました」と当時を振り返る。しかし一方で、乗り越えなくてはならない課題も山積していた。

「区としては、おみやげを作るために予算を組んでいたのが、当然成果を出さなければならない。でもフォント



シブヤフォントを採用した渋谷区職員の名刺

## トライ&エラーを恐れない

はすぐにおみやげとして形にできない。きちんと成果を出すまでどうやって予算を確保すればいいのか？

渋谷みやげの発案者である区長や財政担当にどう説明し納得してもらえばいいのか？ そつしたプロジェクトの

先行きに関することが一番悩ましかったですね」(原氏)

しかも問題はそれだけではない。プロジェクトは、桑沢デザイン研究所の講師でもある磯村歩氏が代表を務める株式会社フクフクプラスに業務委託をする形で進められた。

「委託するのはあくまで区の業務であって、その業務を仕様書に沿って民間事業者などに担っていただくわけですから、フォントを使っておみやげを作ることを区の業務としてどう位置づければよいか、その整理に頭を悩ませました。」(原氏)

そこで障がい者福祉課はこの業務が「障がい者理解の促進」や「障がいのある人たちの工賃向上」、「シビックプライド（地域や自治体に対する住民の誇りや愛着）の醸成」に繋がるという視点を仕様書に盛り込み、業務を整理した。

「渋谷区はトップが新たなチャレンジを応援してくれる土壌もあったので、トライ&エラーを恐れずにここまで続けてこられました。とはいえ、アーティストに工賃として還元できるようにしたのは二〇一九年度からで、それまでは『しっかり工賃向上を達成してほしい』と発破を掛けられていました」(原氏)

そんな原氏がプロジェクトの継続に手ごたえを感じたのは、シブヤフォントが二〇一九年度グッドデザイン賞を受賞した時だという。

「自分たちはこのプロジェクトに価値とやりがいを感じていましたが、本当にこのまま続けていけるのか？と少し疑心暗鬼な気持ちもありました。でも知名度の高い賞で第三者から評価されたという実績が、さらに前に進む原動力になったのは確かです」(原氏)

そつした手ごたえを裏付けるように、この時期に竣工した渋谷区新庁舎には各階のフロア表示など、いたるところのデザインにシブヤフォントが使われた。

「担当者に相談したら『いいですね、やってみましょ





う!』と言って、すぐに動いてくれました。そうやって、いろいろな部署が協力してくれたおかげで、現在のシブヤフォントがあると思います。もし『一年でおみyageのプロダクトを三点製作、売り上げで年間五十万円を達成』といったKPIを設定し、その達成状況だけで評価されていたら、ここまで続けるのは難しかったと思います。これからご当地フォントを始める自治体があるとしたら、数字以外の効果も含めてぜひ長い目で見てほしいと思います」(原氏)

シブヤフォントの成功の鍵のひとつは、障がい者福祉課だけでなく区役所全体を巻き込んだ、つまり関係人口を増やした取り組みと、数値目標の達成状況だけに捉われない、トライ&エラーに挑戦する土壌があった。

## 目指したのは完全な自走化

原氏をはじめとする立ち上げメンバーによって誕生したシブヤフォントのバトンを受け継いだのが、令和二年度から障がい者福祉課長となった齋藤貢司氏(現・渋谷区教育委員会事務局 教育政策課長)だ。

「私が引き継いだ時の大きな課題は、シブヤフォントの自走化でした。シブヤフォントの事業が始まったものの、区の事業であり、事業継続は区の判断となるため、継続しないと判断した場合、シブヤフォントそのものがなくなってしまうという懸念があったからです」(齋藤氏)

令和二年と言えば、世の中はコロナ禍。シブヤフォントに限らず、いつどの事業が中止になってもおかしくない状況だった。ましてや、すぐには成果が目に見えないフォントという事業を継続するにはどうしたらいいのか、齋藤氏は模索を続けた。

「当時、業務委託をしていたフクフクプラスや、事業の主体であった渋谷区内の障がい者支援事業者の方々と意見交換をしながら、どうするのが一番いいのかを考えていきました。その中で施設長などシブヤフォントの事業に直接関わりのある方々が『行政がずっとやるんじゃないくて、シブヤフォントを自分たちの活動として、自分たちで作っていく』という風に言っていたのは本当に嬉しかったですし、そうやってみんなが同じ方向を向けたというのが、成功する上で大き



かったのではないかと思います」(齋藤氏)

対話を繰り返し、シブヤフォントを行政からの業務委託に頼るのではなく、自走できる事業とするため令和三年四月、一般社団法人シブヤフォントが設立された。代表理事にはフクフクプラスの代表であり桑沢デザイン研究所の講師でもある磯村歩氏と福祉作業所ふれんどの古戸勉氏、理事はシブヤフォントに関わる渋谷区内の障がい者支援事業所の理事長や施設長たちと、渋谷区障がい者福祉課長が就任。社員も同じ障がい者支援事業所の職員たちといった構成になっている。ただし、「学・民」である磯村氏は社員から任命された「雇われ理事」であり、そうすることで組織内のガバナンスが効くようになっていく。

## なぜ渋谷区の資本としなかったのか？

「一般社団法人シブヤフォントを設立するにあたり、シブヤフォントの商標権は渋谷区が持っていました。が、抛出金(資本)は一切出していません。実はそれがとても重要だったと思っています。区が方針を決め

るのではなく、事業者の皆さんがシブヤフォントの未来を考えながら進めていけるわけです。ただ、理事の中には民の磯村さん、官の障がい者福祉課長も入っている。で、運営面で声を発することができる。また、渋谷区が商標権を持っているので、継続していくうちに違った方向に進んでしまうことがないと考えました。事業者の皆さんと同様、区もシブヤフォントを大事にしていきたいという思いはありますが、関わりすぎしてしまうと、せっかく皆さんが一般社団法人を立ち上げたのに、区がやっているのと変わらなくなってしまう。そうならないこのような座組みを作ることが、一番気を遣った部分ですね」(齋藤氏)

渋谷区では、これまでに基金を抛出して一般社団法人を作ったことはあるが、シブヤフォントのように抛出金を出さずに完全な自発自立で生まれた法人はない。これもまた大きなトライだった。ただし、渋谷区は現在も一般社団法人シブヤフォントに一部の業務を委託している。これについて齋藤氏は次のように語る。「区はシブヤフォントを障がいの理解啓発事業という

位置づけで捉えているので、シブヤフォントのデータ作成に関わる一部を委託することが、最終的に理解啓発に繋がると考えています。それも最終的には全て一般社団法人で担っていただければ、区はまた違う視点で理解啓発事業を展開することになるかと思います。ただ、スタート当初から一足飛びに進むものではないということも想定していました。今は一般社団法人シブヤフォントが渋谷区全体に対して、あるいはそれを越えてさまざまな事業を展開してくれているので、これからさらに自走が本格化していくのかなと見ています」

## シブヤフォントラボの訪問者が 一カ月で数千人に？

渋谷みやげ開発プロジェクトがスタートした二〇一六年から八年——二〇二四年春、渋谷区の表参道と明治通りが交差する一等地に東急プラザ原宿「ハラカド」がオープンした。その七階に、ダイバーシティ&インクルージョンを体現できるギャラリー&イベントスペースとして、「シブヤフォントラボ」が誕生。時を同

じくして黒田敬久氏が障がい者福祉課長に就任した。「もちろんシブヤフォントのことは知っていました。が、実際に関わるようになって、まず、さまざまな団体の補助金などを利用して幅広い自主事業を行っていることに驚きました。また、自走化して障がい理解を広めていくためには、いろんな活動をしなければいけないといった皆さんの覚悟のようなものを感じました」（黒田氏）

この当時、一般社団法人シブヤフォントでは「インクルーシブファッションショー」ショウガイはへんしんできる」と銘打ったファッションショーや、渋谷区内の小・中学校に出向き、シブヤフォントを使った対話型アート鑑賞といった探究学習を行うなど活動の幅をさらに広げていた。

「シブヤフォントラボのある場所は原宿の中でも一等地で、ファッションに非常に親和性のある場所です。インバウンド効果で海外からの訪問客も多く、最近ではラボへの一カ月の来訪者が数千人を記録したそうです。ただそれは、最初からシブヤフォントを目的とし



シブヤフォントラボ開所時の賑わい



て来てくれているわけはなく、ハラカドのオープンテラスに來た人が、『すごくおしゃれな場所がある』と、フラツと入ってきてくれる、そんな自然な導線ができているからです。そういう立地を生かし今後もさまざまなチャレンジをして、渋谷区だけでなく日本中、さらには海外にもシブヤフォントを、そしてそこから障がい者理解について発信していけると感じています」（黒田氏）

## 全国にご当地フォントを

シブヤフォントを皮切りに、現在はご当地フォントが全国に広がっているが、ある意味競合となるご当地フォントが増えることを、齋藤氏は当初は複雑な思いで見えていたという。

「渋谷区はシブヤフォントをもっともっと広めたいわけですが、ご当地フォントが増えれば使ってくださいの方、つまりパイが減って還元される工賃が減ってしまうのではないかという懸念もあったわけです。ただ、せっかく

作ってもらった一般社団法人の収入基盤、将来を考えれば、ご当地フォントは増えた方がいいと思っただけです。ね。それに、ご当地フォントが広まることで、発祥の地としての渋谷区およびシブヤフォントの認知度がどんどんあがるという相乗効果にも繋がると、今は考えています」（齋藤氏）

シブヤフォントは渋谷区でデザインを学ぶ学生がデザインするという形でスタートしたが、どの地域でも同じような条件が揃うわけではない。そこで各地のご当地フォントは、その土地ならではの運営をしていて、学生に限らず、プロのデザイナーが関わったりしている。他の地域でのご当地フォントの運用について、黒田氏はそれぞれの地域性をいかしてほしいという。

「シブヤフォントはファッションショー、対話型アート鑑賞など、渋谷区ならではの展開がありますが、他の地域で同じことをやるというよりご当地ならではの取り組みにより新しいモデルケースができれば面白いと思います。そこでワクワクする面白いことができ

ば、同じご当地フォント同士が共有して一緒に暮らしてていけるのではないだろうか」(黒田氏)

一方で、ご当地らしさを見つけられない、ハードルが高いという地域に関しては、まずは渋谷区を参考に始めてくれてもいいと言つのは齋藤氏。

「まずは同じ取り組みを試してみても大事だと思います。やってみないと、その良さは分からないということもありますから。私もそうでしたが、施設の利用者の方々、障がいのあるアーティストさんに直接会ってみると、自分の意識が変わります。そして、始めてみると、協力が現れると思います。ですから、まずはできることからやってみるというのもひとつではないでしょうか」(齋藤氏)

## ご当地フォントの根底にあるもの

たとえば方法が違っても、根底にある思いは同じだ。

「シブヤフォントが選択した一般社団法人の設立は、あくまで方法のひとつであって、それが目的ではない

です。シブヤフォントの活動を続けるには、アーティストと家族、支援事業所の皆さんの生活の安定が何より大切です。そのために行政が果たすべき役割を見失ってはいけないと思います」(原氏)

行政としてここまでシブヤフォントに関わり続けてきた理由はどこにあるのか。

「理由はシンプルに関わる皆さんが喜んでくださるからです。保護者の方から聞いた話ですが、シブヤフォントのあるアーティストが、自分の生み出したシブヤフォントのTシャツが紹介されていたイベント会で、普段見せたことのない笑顔になったそうです。

障がい福祉の仕事は、常に課題に追われなかなか立ち止まって達成感や充実感を感じる余裕がありませんが、シブヤフォントを通じて皆さんが見せてくれる笑顔は、そういう日々の地道な仕事へのご褒美だと思っています」(原氏)

# おわりに

シヨウガイはへんしんできる。

この本のタイトルは、一般社団法人シブヤフォントが、東急プラザ原宿「ハラカド」に移転する際に、メンバーと共に考えたミッションです。そして、このミッションには、こうした説明も添えています。

障がいのあるなしにかかわらず、誰もが「へんしん」できる可能性を秘めています。

私たちは共創によって「障害」という固定観念を取り除き、多様な特性や解釈を受け入れる「シヨウガイ」という新たなメッセージを発信します。

障害者、障がい者と表現すると、おそらく、読む人の固定観念での、シヨウガイを思い浮かべるでしょう。ただ、この本に表現されたシヨウガイは、多様な側面を持ち、多様な視点で捉えられるものとして、表現されていたものと思います。あえて、カタカナでシヨウガイと表することで、多様な解釈を受け入れるものにしたのです。



そして“へんしん”です。

障がいのあるなしにかかわらず、関係する全ての人々に気づきと変化が生まれました。時には変心し、そして変針も余儀なくされ、それぞれの変身が起こりました。あえて、ひらがなで表現することで、多様なへんしんの可能性を示唆するものとしたのです。

しかし、そこから広がる波紋は、誰も予想していなかったでしょう。いまや、このプロジェクトに関わる福祉の関係人口は数千人を超え、ご当地フォントを採用した企業は二百社以上に及びます。この広がりを生んだのは、紛れもなく、シブヤフォントやご当地フォントに関わるすべての人々が、このプロジェクトを“自分ごと”として捉え、自らの手で前へと進めていったからにほかなりません。

数多のソーシャルプロジェクトがそうであるように、人の力が結集し、互いの想いが重なり合うことで、はじめは小さな種だったものが、大きなムーブメントへと成長していくのです。

福祉の関係人口としてシブヤフォントやご当地フォントに携わる人々、そして関心を寄せてくださる方々が、このプロジェクトを通じて新たな気づきを得て、小さな一歩を踏み出していく。それがやがて、人と人との自然に寄り添い、共に生きる社会へと繋がっていくことを願いながら、この物語を締めくくります。

最後に、この冊子を編むにあたり、多くの方々の協力をいただきました。渋谷区役所をはじめ、渋谷区内の十一の障がい者支援事業所、桑沢デザイン研究所の学生たち、ご当地フォントを各地で推進する障がい者支援事業所、デザイナー、コーディネーターの方々、そして、活動をさまざまな面から支えてくださっているアートファシリテーターの皆さん。そして、フォント・パターンを生み出し、このプロジェクトを支え続けてくださったすべてのメンバーへ、深い感謝を捧げます。

プロデューズ 磯村歩

企画 磯村歩、福島治、ライラ・カセム

編集 磯村歩、株式会社 imago

執筆 磯村歩、古戸勉、ライラ・カセム、株式会社 imago

装丁デザイン 福島治、ラデツキー・リヨウタ

校正 磯村歩、株式会社 imago

調査 渋谷区、エム・アール・エス広告調査株式会社

協力 渋谷区、専門学校桑沢デザイン研究所、京都ふおんと、

なにわふおんと、蔭山幸司、田代真紀子、澤田誠、澤田佳代子、

玉井七恵、二河等、馬瀬日向子、アンケート・インタビュ

ーにご協力いただいた皆さん、シブヤフォント・ご当地フォン

トにこれまで関わってくださった皆さん

助成 日本財団

シヨウガイはへんしんできる

四五〇〇人以上の声から創りあげたストーリー

発行…一般社団法人シブヤフォント

二〇二五年四月二十八日 第一刷発行

©SHIBUYAFONT2025

本書の第一章の物語は実際のエピソードをもとにしたフィクションです。実在する団体や人物とは関係ありません。また、本書の著作権は各著者に帰属しており、複製・転送・譲渡は、禁止します。

ありがとう  
サンキュー

